



325
319



始



325-3/9



大僧正本多日生著

日蓮五義經要

東京博文館藏版

大正
7. 11. 27
内交

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 佛, 說, 經, 國, 緣.



於如來滅後知

佛說經國緣

及沙多尼義如

實說

日生



本書は、日蓮主義の判教觀、佛陀觀、人身觀、本尊觀、
 行法觀、得益觀の六大教義に關し、正確なる根據に立
 つて、懇篤なる解明を與へしもの、日蓮主義の宗教的
 方面の研究には、最善の努力を加へし書なり。正信正
 解を獲て安住の地に達せんと欲する者は、請ふ精讀せ
 よ。

著者 識す

日蓮主義綱要

目次

第一編 一切教の判釋

1	判釋の意義	二頁
3	絶対判の歸結	三
5	大小相對の概要	七
7	本迹相對の概要	三
9	皇室の尊嚴	六
11	日蓮主義の包容性	〇
13	日本人の通弊	三
2	相對判の分類	三
4	内外相對の概要	五
6	權實相對の概要	八
8	絶対判の標準	一五
10	世法の開顯	六
12	折伏主義の眞意	二
14	佛教の開顯	二四

目次

15	儒教の開顯	二六	16	惟神道の開顯	二六
17	外來思想の取捨	二七	18	教相判釋の歸結	二七
19	禪宗と教相判釋	二六	20	真言宗と教相判釋	二四
21	淨土宗と教相判釋	二六	22	諸宗と教相判釋	二四
23	佛教觀の誤解	四三			

第二編 佛陀に對する意識信仰(上)……………四六

1	意識信仰の紛亂	四六	2	非人格の佛陀	四七
3	萬有神的思想	四六	4	禪學的思想	五〇
5	大佛的思想	五二	6	中心統一の思想	五四
7	釋尊の三德	五五	8	主德の意義	五八
9	師德の意義	五九	10	親德の意義	五九

11	悲母としての意識	六〇	12	三德の文證理義	六二
13	釋尊の顯本	六四	14	壽命の顯本	六六
15	活動の顯本	六七	16	相好の顯本	六九
17	宗派的妄執	七〇	18	諸德の顯本	七一
19	本佛の應現	七一	20	本佛觀の包容性	七三
21	本佛と我國の神明	七五	22	顯本と雜亂の別	七六
23	人としての應現	七六	24	本佛の體相	八二
25	文明と美の感情	八三			

第三編 佛陀に對する意識信仰(下)……………八七

1	前編の概要	八七	2	本佛の智慧	八九
3	智慧兩分の謬見	九三	4	智慧具足の本佛(七)	九七

5 智慧具足の本佛(下)……………一〇一

7 釋尊慈悲の事蹟……………一〇六

9 本佛實在の感應(下)……………一二一

11 本佛の力用……………一二五

13 眞言宗の佛身觀……………一二九

15 經典精研の希望……………一三〇

6 本佛の慈悲……………一〇三

8 本佛實在の感應(上)……………一〇九

10 本佛の功德……………一二三

12 華嚴宗の佛身觀……………一二八

14 淨土宗の佛身觀……………一三〇

第四編 人身に關する意識信念……………一三二

1 人身觀の必要……………一三三

3 人心の研究と新文明……………一三五

5 自然主義の誤解……………一三六

7 誤解せる人身觀……………一三三

2 人心の不可思議……………一三三

4 人心の罪惡性……………一三七

6 人心修養の必要……………一三一

8 釋尊正覺の氣分……………一三五

9 人心の靈妙性……………一三七

11 自他感應の妙旨……………一四〇

13 誠意養成の方法……………一五三

15 易行易守……………一五五

17 宇宙觀の概要……………一六〇

19 宇宙の大生命……………一六六

21 社會主義と唯物思想……………一七三

23 本佛と吾人……………一七五

25 本佛我れに働く……………一八〇

10 十界互具の本體……………一四〇

12 善心と惡心……………一五三

14 菩薩行の自覺……………一五四

16 勇猛精進の願行……………一五七

18 唯物思想の淺見……………一六一

20 宗教心の培養……………一七〇

22 人格的宇宙觀……………一七四

24 向上進取の大精神……………一七六

26 宇宙觀人身觀の歸結……………一八二

第五編 本尊に關する要義(上)……………一八四

1 宗教上本尊の位置……………一八四

2 本尊の分類……………一八五

3	天然崇拜	一八五
5	迷信の改善	一八九
7	英雄崇拜	一九三
9	多神教	一九七
11	交替神教	一九九
13	一神教	二〇三
15	統一神教	二〇五
17	本一述多	二〇九
19	日蓮主義の位置	二二一
21	宗教の真効用	二二四
23	末師の偏見	二三〇
25	逆路の大罪	二三六
4	動物崇拜	一八七
6	庶物崇拜	一九〇
8	本尊と絶對	一九四
10	單一神教	一九七
12	本尊の純一	二〇〇
14	一神教の缺點	二〇三
16	神位の秩序	二〇八
18	統一神教の包容性	二一〇
20	佛教史の失敗觀	二二二
22	佛教史の統一觀	二二六
24	佛教史は釋尊中心	二三一
26	淨土宗の見解	二三九

27	禪宗の見解	二三〇
28	天台宗の見解	二三二
29	日蓮聖人の見解	二三三

第六編 本尊に関する要義(下)……………二三五

1	本尊研究の周密	二三五
3	歸依三寶の本尊	二三九
5	断片的研究の失敗	二四三
7	本尊輕視の邪說	二五〇
9	三寶調和の聖訓	二五四
11	精神的交通	二五八
13	母と嬰兒の經證	二六三
15	日蓮聖人の位置	二六五
2	佛教徒の本尊	二三七
4	最高の三寶式	二四一
6	文字偏崇の謬說	二四六
8	三寶調和の意義	二五一
10	如來と妙法五字	二五七
12	悲母と乳の聖訓	二六三
14	良醫と良藥の經證	二六四
16	佛教信仰の正路	二六八

17	一體三寶の歸結……………	二七〇
19	本佛三輪の妙化……………	二七五
21	本佛二身の應現……………	二七七
23	三寶調和の歸結……………	二八〇
25	實在の信念……………	二八四
18	本尊鈔總結の文旨……………	二七二
20	本佛慈悲の意輪……………	二七六
22	本佛二鼓の宣揚……………	二七九
24	區々の異争……………	二八二

第七編 行法に關する要旨(上)……………二八五

1	佛教行法の意義……………	二八六
3	日蓮聖人の芳躰……………	二九一
5	信仰と世界的文明……………	二九五
7	信心と志願力善根力……………	二九六
9	眞實の智慧と方便の應用……………	三〇一
2	信心と智徳……………	二八八
4	信仰と一切教の實義……………	二九三
6	信仰の根據と實行……………	二九五
8	菩薩行の活用……………	二九九
10	律國賊論の眞意……………	三〇六

11	菩薩行の覺悟……………	三〇七
13	菩薩行の先覺者……………	三〇九
15	日蓮主義の勃興……………	三一三
12	菩薩行の喜悅……………	三〇八
14	日蓮の弟子檀那……………	三一三
16	妙法廣布の志願……………	三一三

第八編 行法に關する要旨(下)……………三一六

1	實行主義……………	三一七
3	日蓮聖人の實驗……………	三二五
5	正義と利益……………	三三〇
7	皇恩の報答……………	三三三
9	相互の慈愛……………	三三六
11	相互の温情……………	三四〇
13	信仰と善徳の實行……………	三五〇
2	奮闘主義……………	三二八
4	正義の操守……………	三二七
6	佛恩の感謝……………	三三二
8	父母への孝養……………	三三五
10	日蓮主義と平和……………	三三七
12	實際的の徳行……………	三四
14	負擔の道徳……………	三五二

15	正直の道徳	三五四
17	夫婦の道徳	三六一
19	優美と剛毅	三六五
16	人格の修養	三五八
18	一家の生命	三六三
20	主義の宣傳	三六八

第九編 法華行者の得益

1	得益の意義	三七〇
3	精神生活の満足	三八〇
5	日蓮聖人の威力	三九一
7	慈愛の心情	三九六
9	正義の勇氣	三九九
11	割愛の決心	四〇〇
13	功業の創建	四〇三
2	現安後善	三七五
4	信仰の威力	三八七
6	歡喜の華常樂の實	三九二
8	慰藉の實感	三九八
10	法華行者の訓練	四〇〇
12	高潔なる觀念	四〇一
14	愛國的功業	四〇三

15	人格の改造	四〇七
17	歿後の得益	四一四
19	順次成佛の勝益	四一八
21	女人成佛の勝利	四三一
23	母の恩	四三五
25	天佑と善徳	四三九
16	正信と健康	四一〇
18	刹那の成佛	四一六
20	即身成佛の誤解	四二三
22	母の感化	四三四
24	國と法	四三九
26	法華行者の志願	四四〇

以上



日蓮主義綱要

大僧正 日本多日生著

一切教の判釋

一切教の判釋 一 一代聖教の中に法華經は明鏡の中の神鏡なり、銅鏡等は人の形をば浮ぶれども、未だ心をば浮べず、法華經は人の形を浮ぶるのみならず、心をも浮べたまへり、心を浮ぶるのみならず、先業をも未來をも譬みたまふこと曇りなし。法華經の第七の巻を見候へば、如來の滅後に於て佛の所説の經の因縁及び次第を知つて、

一切教の判釋

1	人海の舟楫	10	聖教の舟楫
2	...	11	...
3	...	12	...
4	...	13	...
5	...	14	...
6	...	15	...
7	...	16	...
8	...	17	...
9	...	18	...
10	...	19	...
11	...	20	...
12	...	21	...
13	...	22	...
14	...	23	...
15	...	24	...
16	...	25	...
17	...	26	...
18	...	27	...
19	...	28	...
20	...	29	...
21	...	30	...
22	...	31	...
23	...	32	...
24	...	33	...
25	...	34	...
26	...	35	...
27	...	36	...
28	...	37	...
29	...	38	...
30	...	39	...
31	...	40	...
32	...	41	...
33	...	42	...
34	...	43	...
35	...	44	...
36	...	45	...
37	...	46	...
38	...	47	...
39	...	48	...
40	...	49	...
41	...	50	...
42	...	51	...
43	...	52	...
44	...	53	...
45	...	54	...
46	...	55	...
47	...	56	...
48	...	57	...
49	...	58	...
50	...	59	...
51	...	60	...
52	...	61	...
53	...	62	...
54	...	63	...
55	...	64	...
56	...	65	...
57	...	66	...
58	...	67	...
59	...	68	...
60	...	69	...
61	...	70	...
62	...	71	...
63	...	72	...
64	...	73	...
65	...	74	...
66	...	75	...
67	...	76	...
68	...	77	...
69	...	78	...
70	...	79	...
71	...	80	...
72	...	81	...
73	...	82	...
74	...	83	...
75	...	84	...
76	...	85	...
77	...	86	...
78	...	87	...
79	...	88	...
80	...	89	...
81	...	90	...
82	...	91	...
83	...	92	...
84	...	93	...
85	...	94	...
86	...	95	...
87	...	96	...
88	...	97	...
89	...	98	...
90	...	99	...
91	...	100	...

義に随つて實の如く説かん、日月の光明の能く諸の闇を除くが如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅せんと云云。文の心は此の法華經を一字も一句も説かん人は、必ず一代聖教の淺深と次第とを能く能く辨へたる人の説くべき事に候。(神國玉書)

一 判釋の意義

今日蓮主義綱要を語るに當り、先づ第一に「一切教の判釋」と云ふことをお話しやうと思ふ。「一切教」と云へば、釋迦如來五十年の間御說法なされた總てのお經を指すのであり、「判釋」と云ふは、教が廣いものであるから、その區別を立てること、その區別したるものを再び纏まりを付けて、一切教を貫いて考へることでありませう。この判釋、所謂分類と統一と云ふことがなくては、佛教の本旨は分らぬ。五十年說法なされた偉大な宗教に就て、只片隅の一部分のお經を取つて來て、是が善いとか悪いとか言ふても、さつぱりそれは要領を得ないものである、どうしても佛教を正しく觀やうとするには、一切教に對して判釋を與へなくてはならない。

二 相對判の分類

日蓮主義はこの一切教に對して、どう云ふ判釋を取つたかと云ふに、「相對判」と云つて、諸經を相對して區別する場合に於ては、先づ「内外相對」と稱して、佛教と佛教以外のものとの關係を見るのでありませう。次には小乘教と大乘教との關係、その次には他の大乘教と法華經との關係、法華經の中に於ても迹門と本門との關係、斯う云ふ風に「内外相對」、「大小相對」、「權實相對」、「本迹相對」と云ふ、この四つを立てるのであります。更にもう一つ進んで或る相對の名前を立てる人もあるけれども、それは教相判釋としては餘計なことであつて、確に間違ひであります。

三 絶對判の歸結

併しその相對と云つて、相方を比べます場合に、此方が深く向ふが淺いと云ふ風の比べ方をすると、一切教を超越して、而も總てを收めてしまふ場合とがある。

一切教の判釋

例へば日本の皇室は、人民に對すれば、郡長よりも偉いお方である、府縣知事よりも上である、内閣大臣よりも偉いのであるとして、比較しますれば、凡てに對して偉いのでありますけれども、その優劣を比較するのは、未だ一往であつて、更に進んで考へると、優劣と云ふよりは、日本の國民は、上内閣諸公より、下凡ての人民に至るまで、皆陛下の大御心の中に抱かれて居るものであつて、親と子の如き關係である、優劣を見ると云ふよりは、一心同體の關係になつて、一心同體の中に、而も皇室は最も尊嚴に在らせられると云ふのが、正しい日本の觀方であります。その通り日蓮主義は、今申したやうな相對判を立つる以上に、更に進んで「絕對判」と云ふものがある。絕對判と云ふのは、即ち法華經の壽量品の教を基に致しまして、凡てを——即ち迹門でも、權大乘でも、小乘でも、其他佛教以外の教に至るまで、悉く之を捲いて、即ち開顯統一と云ふことを致します。その場合には一切の思想を打つて一團と爲して、惡きものを捨て、善きものを採り、淺きものを啓發して深き思想に導き來り、渾然と

して一大理想の文明に導かんとする所の大精神が、日蓮主義の判釋の眞意であります。この相對判と絕對判と云ふことを能く了解しますれば、日蓮主義の判釋が會得せらるるのである。ちよつと難かしいやうな事であるが、併し其處が了解されなければ、この日蓮主義の組立が分らぬのであるから、大切な問題であります。

四 内外相對の概要

佛教以外の教と佛教との違ふ點を論じますれば、例へば世間の儒教或は婆羅門の教と云ふものは、第一に精神的の因果法と云ふものが、十分に考へられて居らないのである。儒教にしまして、吾々の精神が永遠に存續して行く、即ち死んでも續いて行く、生れる前にも我が生命があつたと云ふ、精神の問題が不透明である。従つて人間の一生涯に爲したる善根功德と云ふものは、吾々の永遠の生命にどう云ふ關係を取るか、過去の己れの爲したる善根功德が、現在の生活にどう云ふ關係を取るかと云ふことは、儒教に於ては不透明であつて、能く分らないのである、即ち生命の問題に於て、

善惡の因果關係と云ふものが説明されて居らない。婆羅門の教に依りますれば、生命の續いて行くと云ふことは考へて居りますけれども、それが幸福になると、墮落して行く關係を、何處に置いたかと云ふと、この現在に善を爲すと云ふ關係でなくして、只神に諛らふやうなことであります。善惡の標準と云ふよりは、請らない律法が定まつて居りまして、例へば火を燃やして護摩を焚くと云ふやうなことをやります、さうして澤山火を燃やして「とんど」を焚くやうな事をして居れば天に生れる、幾ら親に孝行しても、人を救ふても、火を焚かぬやうな者は、地獄に行くと云ふので、火を餘計焚いた奴が勝つと云ふやうなことになる。そこで善惡の原因結果の關係、道德の關係と云ふものが明かにならない。所がそれは世の中に澤山さう云ふ類例が出て来るので、下手にやると佛教の中にもさう云ふ者が出て來ます。その爲す所の事柄が値打の無いことをやつて、さうしてそれが大變善い事のやうに思ふ者がある、先づ佛教以外の教は、善惡の因果關係が明かにならない、未だ色々ありますけれども、その一つだけでも

佛教と他の教とは、根柢が違つて居るのであります。

五 大小相對の概要

小乗と權大乘はどう違ふかと云ふと、小乗の教では、佛性と云ふ人々の有つて居る所の、何とも言へぬ尊とい、佛様と同じやうな性質があると云ふことを、十分明かにしなかつた、全然無い譯ではないけれども、ぼんやりして不透明である。大乘の教は權大乘教であらうとも、佛性と云ふ者が餘程進んで來たのであるが、小乗の教に於ては、十分に佛性有りと云ふことを認めないのであります。

他面には善い所もある、西に阿彌陀様が居るとか、東に藥師様が居るとか云ふ、そんな事は一切ない、唯時間の上に於て、過去に七佛あり、未來に彌勒佛が出るけれども、横に阿彌陀が居つたり藥師が居つたり、そんなごじやくした事はないと云ふことになつて居るのである。權大乘の教に於ては、横に十方に澤山の佛の有ることを説いた、其處が先づ違ふのである、未だ澤山違ふけれども、一つでも二つでも違ふ所を

見付けば、それで宜い譯である。

六 權實相對の概要

權大乘教と實大乘教、即ち法華經と他のお經と何處が違ふかと云ふに、それが一つも擧らぬやうでは駄目ではないか、一つでもしつかりした事を擧げなければならぬ。さうすると他の權大乘諸經に於ては、理論の上には、人に佛性があると言うて置きながら、女が佛になれると云ふやうなことを言つて居る。「女はいけない、佛になれる」と云ふことになる。「それでは佛性は男に限つてあるのか」と云ふと、「さうではない、女にもある」があるものならば、現はれさうなものぢやないか、「ちよつと待つて呉れ、そこは工合が悪かつた」と云ふやうな引掛る所が出来て居る、それが權である。理論の上には佛性有りと言ひながら、實際の問題に入つて婦人の成佛を抑へたり、二乗の成佛を抑へたり、或る一部は佛になるけれども、一部はならぬと云ふやうなことを言つたり、總ての問題に於て引掛つて居る、佛性の思想が徹底しないと云ふことが一つ

缺點である。それで多くの場合に、それを罪の方から説いて來るのは、全く落第である、或る宗派では、善い方は抑へ込んで「人間は罪の深いものである」「業つく張である」と云ふやうに、悪い方ばかり並べるやうなことになるが、是はもう全然失敗で、零點である。人の光の側を説明しなければならぬ、それは悪い奴に對しては、ちよつと業つく張りを説いた方が効が宜いやうに思ふ、業つく張りの婆さん、お前は眞逆さまに地獄に墜ちて、三途川の婆さんに喰はれるぞ」と言ふと、「あゝ怖い」と言ふことになつて、ちよつと効が宜いけれども、それはさう云ふ悪い者ばかり居る世界ならば宜いが、日本の人民は、業つく張りの婆さんばかり寄つて居るのでない、非常に清い、旭のやうな精神を以て生立つて行く所の幾多の新しい人が、毎日々々を生れて行き居るのである、今頃でも何千と云ふ人間を、日本では産んで行き居る、是は業つく張の婆さんではない、新しい無疵な人間である、その無疵の者を善良に導いて行くには、唯だ悪い方からばかり教訓をすると云ふことではいけない、だから權大乘の諸教に於て、

消極的に悪い方から教化するやうな教訓の多いのは、確に法華經に及ばぬ所である。法華經は初から其點は非常に華かに、ばつと天から花が降つて來、微妙な音樂が聞えて居る中で、一番に引出す者は、二乗と云つて、何處でも佛になれない、割れたる石が合はふとも二乗は成佛すべからず、炒つたる種に花は咲かふとも二乗は成佛すべからず」と云はれたのが、いきなり成佛して人を驚かすと云ふやうに、枯れたる木に花が咲いたよりも珍らしい有様のことを、初から示して居る。乞食の子かと思ふやうな穢い者が、バツと長者の子供であつた、それは元から長者の子供で、乞食と思ふは夢見たいなもので、風呂に入れてボンと手を叩けば、元からの長者子である、斯う云ふ積極的教訓を、初から法華經は與へて來たものである。それが非常に大事である、殊に日本國民に對しての感化は、その點が大切なのであります。

もう一つの側は、即ち佛様に就てのこととあります。それは十方に佛が在つても、どの佛が偉いのやら、中心やら、分らないのが法華經以外の諸經である。阿彌陀經を取

つて見れば、阿彌陀様がちよつと偉いやうに見える、藥師經を取つて見れば、藥師様の方が偉い、捉へたお經が勝負見たやうなものであるから、大日經が出て來れば、もう阿彌陀様は大日如來の傍へ來て杳を取ること出來ない、大日如來の所へ「あなたの杳を」と言つて行つても、「貴様はいかん」、ばつと蹴られてしまふ。さう云ふやうな工合で、銘々が豪い氣になつて、まあ好いたものを迎へて來るやうな事になつて居るから、佛敎は一つの宗教でありながら、そこに信仰の統一と云ふものが破れてしまつて、勝手々々のものを本尊とするに至る、それが即ち法華經以外のお經の缺點である。方便の場合ならばそれでも宜しい、その時その時に依つて、或る佛を褒めて置けば宜しいが、眞實の佛敎を明かにして、佛敎徒を統一するは勿論のこと、進んでは世の思想の統一までも圖らうと云ふ大理想から言へば、即ち一切の佛の中心統一がなくてはならぬ。澤山の光の中に於て根本的の光がなくてはならない。星の光のやうに、法華經以外のお經は澤山別々に光つて居る、それを見て「彼方の星の方が明るいぢやない

か「それはヨウ見ないからだ、ヨウ見て見よ、此方の方が明るいぞ」少し此方の方が
 きらつと光つて居る「いやさうぢやない」と云ふやうに、法華經以外のお經は、阿彌
 陀様や薬師様などが澤山光つて居るが、法華經に來ると云ふと、お日様がバツと出た
 やうなもので、お星様は何處へ行つたか分らない、別段掃溜へ落ちた譯でもない、向
 ふに居るのだらうけれども、その儘に見えなくなる、お日様は一つの光であるけれど
 も、お日様の光とお星様の光とどつちが明るいだらうと云ふ問題は消滅してしまふ。
 電燈を持つて來ても暗い、お月様でも仕方がない、星がすつかり一緒に集まつて、お
 日様に負けぬやうにやつて見やう——所謂民主主義、多數主義で、世界中の星を集め
 て、一つの袋に入れてやつて見たら宜いだらう」と云つても、やつぱりどうもいかん、
 「忌々しい、世界中の蠟燭をすつかり買集めて一遍に燃せ」それでもいけない、お日様
 の光に對する光はない、偉大なる光をお日様は一つで有つて居る。法華經の佛身觀の
 理想が其處に現はれて居る、故に寶塔品の時に於て、澤山の佛が集つたけれども、皆

釋尊の前に頭を下げて、さうして壽量品に至つて、釋尊を中心にしたる顯本を明し、
 久遠本佛の眞實の光を顯はして來たのであります。お釋迦様の教を信するならば、
 の本當の所まで行かなければならない。

この釋尊の顯本と云ふこと、佛性論に就て二乗でも女人でも一切が成佛すると云
 ふ思想、それ等が本になつて宇宙が説明される、それ等が本になつて、一切の佛教徒
 の行ひが説明されて來る、根本は佛性の思想の徹底と、本佛に關する思想の徹底と云
 ふ二つが本になつて居る。例せば日本を解釋するには、日本人の大和魂の生粹なる所
 を發揮することが一つ、皇室の尊嚴を十二分に發揮することが一つ、此の二つが根本
 をなして、日本の一切の文明が発現されて行くのであります。法華經以前の大乘經
 ではこの二大教義が不透明、不徹底である、法華經は之を徹底して完全に説明し終つ
 た、是が諸經と法華經の相違であります。

七 本蓮相對の概要
 一切教の判釋

次に迹門と本門は何處が違ふかと言ふと、迹門の方は佛性論は良かつたけれども、今言ふ本佛のことが、壽量品でなければ顯はれてゐない。恰度人日の長所は現はれてゐたが、皇室の有難さが現はれなかつたやうなものである。皇室の尊嚴が現はれぬと、本當に人民の長所も分らぬ、何となれば、唯だ大和魂をば人間普通の徳性から解釋したならば、皇室はなくとも大和民族の何か秀でたる特性——非常に勇氣があり非常に親切であり、非常に善い氣分があると云ふことだけ説明して置けば、それは皇室が無くて宜いが、大和民族の長所中の特に善いものは、皇室を中心にして「億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟ス」と云ふ絶對忠節を捧げる所に、大和魂の生粹、特別の光がある。その大和民族の特性中の特性を説明するには、皇室の尊嚴が現はれぬ限りには、日本人の眞の特性を説明することは出来ない。それと同様に本佛の顯本がなければ、佛性論の生粹を顯はすことが出来ない。それ位のことが、長い問學問しても分らぬならば、それが味噌摺坊主と云ふのである。世間で言つても、日本の國體を研究する、

歴史を研究すると言つて、長い問本を讀んでも、今言ふた意味が分らぬ爲にマゴ／＼するのが、是が即ち腐儒と云ふものである。大事な所と云ふものは、さう澤山あるものでない、大切な所と云ふものは、所謂「一以て之を貫く」で一つである。そこでさう云ふ風に本迹對、權實對、大小對、内外對と、分けて行くと、世間の事よりは佛敎が深い、佛敎の中に於ても、小乗よりは權大乘、權大乘よりは實大乘、實大乘の中に於ても、迹門よりは本門と云ふやうに、次第に優劣が立つて行く、それが即ち相對判と云ふものであります。

八 絶對判の標準

それが今度絶對判の所に行くと、そんな一つ／＼の比べ合せ見たやうなこともなことは止めてしまつて、今度は皇室の尊嚴が、決して外のものとは比較的でなくして、人民を皆悉く子の如くに愛し給ふ、皇室と人民と云ふものは一心同體になつて、さうして日本の國の光を輝やかして行くが如くに、法華經の壽量品の思想が現はれて來ると、

今言つたやうに對手の方に對して此方がえらいぞと云ふことでなく、迹門で分らなかつた所を、本門の思想を加へて之を啓發して行く。例へば譬喩品に、「今此三界は皆是れ我が有なり」と説いてある、此世界は我が所有だと説いてある、我が所有だと説いてあつても、本當の佛が顯はれないで、此處に始ある佛があつて、是だけの年限の間は、この世界は我のものだ」と云つて居つたのでは、その年限が過ぎたら我のものと云ふことが言へない。

大乘の中 九 皇室の尊嚴

例へば我が大日本國は初から皇室が在らせられるが、支那のやうに或は宋を亡ぼして元が起り、元を滅ぼして明が興ると云ふやうに、途中から取つて代ると云ふことになる、何時の年代から何時までは明であるけれども、それから清だと云ふ工合に、或時に起つて或時に終つて居る、支那と云ふものは何と云ふ國であらうか、元と云ふ國か、明と云ふ國か、清と云ふ國か分らない、色々名前が變つてしまふ、法華經の迹

門であるといふと、釋迦如來は「この三界は我のものだ」と仰しやつても、始のある佛であるから眞實が徹底しない。それが壽量品に行つて本佛が顯はれると、是だけの間と云ふのでない、根本の佛が何時も全體を支配して居ると云ふ思想が現はれて來る。この時間の存續と云ふものは、非常に大切なことであつて、どうしてもこの時間の無限と云ふことがなくては駄目である、どんな立派なものでも、譬へば立派な壁であつても、昨日までは無かつたけれども今日出來た、今日は立派な壁だけれども、明日になつたらポカンと割れてしまふと云ふものでは、その壁は値打がない、時間と云ふものに於て、其もの、價值が非常に強く現はれて來るのである。日本の國でも、現在が如何に立派でありまして、是が百年の後、二百年の後には、破壊されると云ふことであつては、その價值と云ふものは殆んど無いのであります、日本のこの有様は、さざれ石の巖となりて苔のむすまで、天壤と與に窮りなき、この國體を擁護して、文明の最後の最後まで、日本が榮えて行くといふから、非常に値打があるのであります。

一〇 世法の開顯

その意味であつて、壽量品の思想が現はれて來ると、即ち迹門に於ける有ゆる思想が活かされて來るのである、それから他の法華經より前の教に説いてあることでも、皆この壽量品の大きな精神から活かして來る。それは一活かして來ると云ふ話をすると長くなるから、一番淺い所の世間の一通りの事を取ると、第一親孝行などが活かされて來るのは無論のこと、日々生活をして居る——味噌を摺つたり、井戸端で米を磨ぐのに亙つて轉んだりして居る、人生々活の所まで、法華經の光と云ふものは活かして來る。何故活かして來るか云々と、この壽量品の信仰を有たずに亙つたのと、信仰を有つて亙つたのとは、非常に違つて來る、信仰の無い奴が亙つたなら、只周章で、起き上つて、顔を擧めて膝頭へ睡でも附ける、それつきりで何にもない、けれども信仰のある人は、バツと亙つたやうであるけれども、ウンと踏み堪へる所に、大なる信仰の輝きが現はれて來る、一切萬端、夫婦喧嘩まで違つて來る、信仰の無い

奴が嬾の頭をどづく所には、何のうま味もないけれども、信仰のある者がどづくのは、どづくべき理由がその奥に附いて居る、この一つの拳骨で彼を深き信仰に入れてやらうと云ふ大きな考があつて、グワンとやるのである、斯う云ふやうに人生のすべての生活に光をもつて來る。この大なる信念、大なる理想を、壽量品の根本から築くに於ては、人生生活の全般に、その力がズツと及んで來るのであります、即ち日蓮聖人が女房と酒うちのみて南無妙法蓮華經と唱ふる所、衆生所遊樂なり。

と言はれたのは、神聖なる愉快である、即ち宗教の信仰と實際生活とが調和して、夫婦差向ひで一バイ飲んで居る、其處に清らかなる信仰が相互の間に通つて居つたならば、是れ程愉快なことではない。この味いと云ふものは、酒を飲まぬ者が酒の旨味が分らぬと同じことで、夫婦で一バイ飲みながら、其處に信仰が通つて居る喜悅と云ふものは、是は千圓や一萬圓で買へない、錢で買へるものでない、唯の酒や刺身ならば、手を叩きさへすれば、三圓でも五圓でも持つて來るけれども、この「女房と酒うちのん

で南無妙法蓮華經と唱ふる所、衆生所遊樂なり」と云ふことは、金錢では駄目である。其處が即ち絶對判で、一切の思想と云ふものが、壽量品を中心にしてスツカリ開顯される、即ち一以て之を貫くものである、その下に善いものは澤山ある、さうして一番善い耀きの一つが現はれて居れば、一切が生きて來るものである。併しそれならばと云つて、小さい事まで一一取替つこをして、「日蓮主義は壽量品に據るのだから、新しい親孝行をしなければいかぬ、今までは親に唯の味噌汁食はしたけれども、今日から粕汁食はさう」と云ふやうに替へて行くものではない、味噌汁は味噌汁の儘であるが、一つの大きいものがありさへすれば、一切が光を發して來るのである、それが實に面白い所であります。

一一 日蓮主義の包容性

故に日蓮主義は、決して狭いことを言ふものではない。或人は、日蓮主義は他宗を攻撃して、阿彌陀様の頭を打ち割るものだと云ふやうなことを考へて居るが、さうで

はない、本當は阿彌陀様を活かしたのが日蓮主義である、淨土宗や真宗のやうに、お釋迦様に敵對するやうな阿彌陀様であるならば、何時か死刑の宣告を受けなければならぬから、阿彌陀様は決して釋尊に反對するものでないと云ふことを、日蓮聖人は言はれて居る。法然上人などが出て、お釋迦様の説いた阿彌陀様と、お釋迦様と喧嘩するのはいくはない、と云ふ事を説いたのが、日蓮聖人でありませう。

一二 折伏主義の眞意

それを聴きやうが悪いから、日蓮聖人の方が酷いことを言つて、法然や親鸞が優しい事を言ふやうに思はれるけれども、それは不透明の頭である、能く氣を落付けて聽いて見れば分る、彼等眞宗、淨土宗の人は何と言つた、日蓮聖人の方に於ては、一切の諸佛と云ふものは、決して之を排斥してはならぬと云ふ。然らば何處を攻撃したかと云ふと、彼等が釋尊を擲つ所を攻撃したのである、「捨、閉、閣、抛——捨てよ閉ぢよ閣けよ抛てよ」と云ふ言葉を攻撃するのである、「他のものは皆捨てしまへ、お釋

迦様でも天照大神でも一切経でも、何でも捨て、しまへ、唯だ阿彌陀様に頼れ、他のお経などは開けてはならぬ、藏の中に入れて閉ぢてしまへ」と云ふやうな亂暴なことを言ふから、そんな馬鹿な事があるかと、日蓮聖人が言つたので、日蓮聖人は今言ふ通り、一切経は無論の事、世間の教までも一切を復活せしめなければならぬ、夫婦暗嘩まで美化さすと云ふのが日蓮主義である、さうしてその通りに説き、その通りにお働きになつたのであります。思想の戦には瞞着ほど罪惡は無ないのである、この頃淨土宗では、増上寺で天照大神を祭つて遙拜式をやつた、悪いことでもないけれども、瞞かし事だから面白くない、宗教と云ふものは瞞着ではいかぬ、悪いと思つたことは、綺麗に改めなければならぬ、彼等は初めはさう云ふものはいけなと言ひながら、それではどうも工合が悪いからと云つて、増上寺に天照大神の御札を置いて、其處で遙拜式をすると云ふ、是で我國體と淨土宗と結び付けたと言ふ積りであらうが、さう云ふことをして見せるのは、洵に白々しくて、素人騙しには宜いかも知らんが、吾々思

想を研究する者には、心持が悪くていかぬ、さう云ふ生ぬるい瞞着を、國民が生半ぢやくで善いと思つて居るやうな、そんな附焼又見たやうな思想では、愈々の時になつて何の役にも立たぬのである、それではいかぬ。

一三 日本人の通弊

今の日本人は、一方から言へば極端の僻論を吐きながら、一方から言へば非常な迎合的な、寛容主義、御座成的の好い加減な瞞かし主義を採つて居る、一方はやくそくな破壊主義である、一方は瞞着の無茶苦茶である、さう云ふことではいかぬ、凜然として正義を守つて、改むべき所は改め、いけない所はいけないとして、生命を捨て、もやると云ふ所に、宗教の力、道德の光を認めねばならぬ。私は決して狭い量見で言ふのではない、瞞かしをすることは何の役にも立たぬ。政治家はどう云ふ考か知らぬが、さう云ふ瞞かしを歓迎するやうな風があるけれども、惟ふに是は本當の政治家ではなからう、二流三流の政治家が跋扈して居る爲であると思ふ。眞に經世憂國の人で

あつたならば、人心を支配すべき問題は、決して左様な喃かしなどを、歡迎すべきものでなからうと思ふ。是は餘談のやうでありますけれども、日蓮主義の教相判釋を語るに就ては、この一言なかるべからずで、決して日蓮主義は狭いことを言ふのではない。

一四 佛敎の開顯

その證據は澤山あります、本尊得意鈔と云ふ御書にも、或る宗旨の學者が「日蓮聖人は、法華經より前のお經は眞實が現はれて居らぬと言ひながら、安國論の中には、法華經より前のお經、即ち仁王經であるとか金光明經であるとか云ふやうなお經を引いて、さうしてそれを證據にして居られるのは矛盾である、法華經より前のお經に眞實が顯はれぬと言ひながら、そのお經を引いて證據にするのは、矛盾して居るじやないか」と言つた。日蓮聖人は之に答へて言はれるに、「自分の議論はさうではないのである、一切經を見るには大綱と綱目と云ふものがある、大事な事柄を説いて居るの

と、それから細かい事柄を説いて居るのとの、二つを見なければならぬ、普通の事柄は、どのお經に説いてある事柄でも、それが皆嘘と云ふことではないが、本佛の顯本、佛性論の徹底的説明と云ふやうな、大事なことは、法華經でなければ現はれないのである、小さい色々の事の説いてあるのは、無論他のお經でも間違つて居る譯でないのである」と言つて居られるのであります。故に日蓮聖人の判釋は、決して他のお經を排斥するのではない、總てのお經を綜合し開顯して、秩序を立て、統一を圖る所の判教である。その事の殊に著しく現はれて居るのは、佛敎の中では阿含經から起つて居る、阿含經と云ふのは、釋迦如來の日々になさつた事柄の眞實が、記録されて居る所の、正確なる事實を傳へたお經である、その阿含經を根據にして、さうして更に深い所の意味合を十分に明したるものが法華經であり、その法華經の大精神に基づいて、更に行亘るやうに詳細なる説明を試みたものが、大涅槃經である。故に阿含經と法華經と大涅槃經とを疎通して考へたらば、一切の佛敎と云ふものは、一番能く分るの

である、是は學問に屬すること、盡きぬことであるが、それだけ申して置きます、その證據は、別に自分は書いて、さうして世の中に遺して置く積りである、唯今私に述べて居る一言は、萬世動かぬことであらうと思ひます。

一五 儒教の開顯

佛教全體は、さうして見て行くのであるが、殊に佛教と儒教、その他世間の道徳との關係に於いては、日蓮聖人は最も能く調和をせられたので、即ち儒教の特色である所の「義」と申しますか、殊に日本に來て發達致しました忠義の觀念、多くの宗教家が打忘れて居る所の、この觀念を主張せられたのであります、即ち慈悲仁愛を説いて、忠孝の道徳を忘れて居る所に對して、日蓮聖人は最も能く忠孝の義の道徳と、佛教とを一致せしめて、さうして之をお弘めになつて居るのであります。

一六 惟神道の開顯

又更に日本の惟神の道の心髓と申しまするか、世界に比類なき我が日本の國體に就

て、日蓮聖人は、その國體觀念に對する先覺者であり、全く我が國體と佛教とを融合せられたのである。それ等の點は實に日蓮聖人の有する數多の特色中の模範的なるもので、即ち今後の思想が導かれる所の模範であります。

一七 外來思想の取捨

西洋の色々の思想が來ましても、今申したやうな日本の國體と云ひ、日本の特色と云ふものと、調和をして進まなければ、西洋の宗教、西洋の倫理、西洋の思想と云ふものが、その儘で日本の國體を侵し、日本の大切なる事柄を妨げるやうな有様では、斷じて許されないのである。故に日蓮聖人が、佛教よりして、能く日本の國體、日本の大切なる事柄と、融合をお圖りになつたのは、永遠に日本人が學問したり、宗教を弘めたりするに就て、之を先覺者と仰いで導かれて行くべきであります。

一八 教相判釋の歸結

斯くして日蓮聖人の教相判釋は、一切の佛教を適當に統一し、儒教と佛教とを統一

し、我が國體と佛教とを統一し、又更に世間の生活と佛教とを一致せしめて、非常に圓滿なる理想の文明を活躍せしむる宗教として、佛教を活かされたのであります。その一一の證據は澤山あるけれども、もう引かないでも明かなことであり、私の頭では、日蓮聖人の御遺文は大體ソラであり、私の言ひ居ることは、皆日蓮聖人に根據して居るのである、一つも自分で好い加減に拵へて言ひ居るやうなことはない、どの言葉もどの言葉も、皆御聖訓より發して居るので、確にそれだけは證明して一一責任を帯びて居ります。

先づ日蓮聖人の御主張の方は、それだけにして置きまして、他の宗旨が主張した事と比較を取つて見れば、一層それが明かになるのであります。先づ禪宗あたりから一つの比例を取つて見やう。

一九 禪宗と教相判釋

禪宗と云ふ宗旨は、教相判釋と云ふことをしない。と云ふものは釋迦一代の教は閑

文字である、反古見たやうなものである、我等はこの教相判釋の外に、佛の精神をその儘傳へたものである、佛の心を傳へた宗旨であるから、之を佛心宗と云ふ、禪宗と云ふのは素人が云つたので、向ふでは佛の心の宗旨——心から心へボンと傳へて來たと言ふ、言葉や文字、さう云ふカラクリは要らない、一切經は悉く閑文字なり——閑文字と云ふのは反古紙と云ふことである、一切經は反古紙なり、さうして見れば、法華經も何もあつたものでない、法華經が良いと云ふのは、それに拵はれて居るのであると、斯う云ふのであります。大變氣が利いたやうに見えるけれども、是が最も悪い所のもので、日蓮聖人は、之を名けて天魔と云つたのであります、天魔と云ふ言葉は、實に活きて居ります。彼等が云ふ寢言みたやうなことは、半文の値打も無いことである、お釋迦様の心をその儘心へ抛り込んで行くと云ふやうなことは、出來ないのである、教は皆忘れてしまつて、お釋迦様の精神がバツと入り込むと云ふても、中中さらは入りませぬ。水でも一斗も入るやうな大きな甕の水を、一合か二合の瓶に入

れやうとすれば、どんなに努力してもこぼれてしまふ方が多いので、お釋迦様の精神が直ちにバツと自分の心に入ると云ふやうなことは、一斗甕から一合瓶に水を移すが如しと言はなければならぬ、一合瓶なら未だ餘程上等であるけれども、實はそれが底抜けの瓶であるから、逆もお話にならない。さう簡単な譯に行かないものであります。お釋迦様の立てたる教と云ふものは、萬世を裨益するに足るべき教で、幾度でも繰返して總ての人心の導かるべきものである。掃溜へ芥を捨てに行つたら、その塵取の柄が竹にコツンと當つた、そのコツンと云ふ音で、バツと悟つた、そんな簡単な譯のものではない。それは禪宗の人は、實に詰らぬことで悟つて居る、昨日まで喧嘩してやらうかと思つたけれども、坊主の身分として喧嘩などすべきものでないと思つて、庭を掃きながら考へて居ると、石がカチンと當つた、その拍子に大悟徹底して成程さうだと思つて、喧嘩を止めた、その位のことを悟つたと言ふ、それを勿體らしく頓悟したと云ふやうなことを言ふ。この間までは、風呂へ行つたならば流しを取つ

たけれども、物價が騰貴したから、今日限り流しを止めて自分で背巾を流すことにした、そんなことを悟つたとか決定したとか頓悟したとか云つて、無闇に勿體を附けるのであるが、それは宜くないことで、瞞かしてあります。一切教の教相判釋と云ふものをしないで、何處から見て宜いか、頭も尻尾も見ないで、「一切經は皆閑文字なり」……そんな亂暴な事を云ふやうなことで何が分るか、詰り尋常小學も満足に卒業しない、中學や大學の教科も知らないで、乃公は學校へは行かぬが、總ての教科書などは反古紙だと云つて、それで以て日本の大先生の學問、大博士の學問の眞實がバツと分かる、と言ふやうなものだ、そんな譯に行くものでない。それは特別に偉い者があつて假にやれるとした所が容易なことではない、一般の多數人を教化する所の普遍的の宗教としては、左様なことは駄目なことである。それが行ける位ならば、何も釋迦が五十年の説法をしはしない。お釋迦様は説いて、説き捲つた、夜半でもお釋迦様は木の下に座禪をしてござる、其處へ車を挽いた人が通る「あなたはどなたでござるか」

「俺は釋迦牟尼だ」それでは説法好きのお釋迦様でありますか」「その通りだ、いざ語らん」と言つて、夜半でも車挽を捉へて、説法せられたのであります。斯の如くに説いて、説き盡されて、最後涅槃の夕に至つて、もう涅槃すべく涅槃の床に入られた時に、須跋陀羅がやつて来て、阿難に「面會を許して呉れ」と言つた、所が阿難が「もういかん、遅れた、世尊はもう涅槃の床に入られたから、驚かし奉ることは出来ぬ」と言つて斷つて居ると、お釋迦様の方から手を叩かれて「阿難よ、何事である」「唯今須跋陀羅が説法を聴きに参りました、今斷つて居る所でありませぬ」「それはいかん、説法しやう、此處へ呼べ」と云ふことになつた、それから又坐り直して説法される。又その涅槃の夕に至つて説かれた所の、涅槃經と云ふものが、今三十六卷四十卷と云つてある位である、「何でも質問がある者は皆問へ」、總ての者が「もう問ふ事はありませぬ」と云ふ時に至つて、「然らば涅槃するぞよ」と云つて涅槃せられた位、お釋迦様は説法の好きな方でありませぬ、それで人類を教化するには、説法に限ると云ふことが、

あらゆる方面から研究されて居るのである、坐禪して居つてボカンと悟ると云ふやうなことで、人間を感化するのは、拙の拙なるものである。であるから一切經を輕んじて「教相判釋などは要らぬ、乃公の宗旨は、佛の心からボンと傳へるのだ」と云ふやうな禪宗の立てやうは宜しくない。それは言葉にばかり捉はれてしまつて、文字の研究にのみ走つて、精神が滅びてしまつたものは、無論宜しくないけれども、そんなことは禪宗坊主が言はなくとも、文字章句に捉はれて精神を忘れてはいかぬと云ふ位のこと、尋常一年の時から教へられて居る、八と云つた所が、八の數がどの位やら分らぬのではいかぬ、「慈姑々々」と言つて字を覚えても、實物を見て何だか分らなくてはいかんから、小學校で教へる時には、ちやんと慈姑の繪が書いてあつて、さうして傍に「くわぬ」と書いて、斯う云ふ物が「くわぬ」であると教へて居る、それ位のこと、尋常一年で教へて居る、言葉だけ覚えて、その實物を忘れては、いかんと云ふ位のこととは、何ぞ禪宗坊主の言を俟つて、而して後に知らんや。總ての學問する者は劈頭第

一に、尋常一年の時から、そんなことは知つて居ることである、彼等が斯の如き事を言ふのは、愚なことである、左様なことで而も他の大なる宗教を嘲けると云ふに至つては、慢心と云ふより外はないことである、そんなことは諸君が考へても分ることでありませぬ、文字だけに捉はれてはいかんと云ふことは、儒者でも言つて居る『論語讀みの論語知らず』と云ふことは、『いろは』歌留多の中にも在るではありませぬか。

二〇 眞言宗と教相判釋

それから眞言宗は、どうであるかと言ふと、弘法大師は偉いやうに見えるけれども、事實は偉くない人でありませぬ、何處が偉いか、人が唯だ偉い／＼と思つて居る、あゝ云ふ人間は偉いと云ふのではない、佛教を學んで、佛教の本義に徹底せざる人であるから、私は偉くないと思ふ。それは幾らでも偉くないことを證據立てることが出来る、けれども餘り偉くなくとも、偉いやうに見えた人である、一犬虚に吠えて萬犬實を傳ふで、何にも知らぬ者が、弘法様は偉い／＼と云ふと、何だか偉さうに考へてしまふ、

人が偉いと言ふから弘法様は偉いんだらう、さうだ偉いんだとなつてしまふ、石川五右衛門と言へば、芝居でやるやうに髪が長いと思つて居るが、實は禿頭であつたかも知れぬ。そんなことは詰らないことである、だから弘法大師が偉い／＼と言つても、何處が偉いかと言へば、何等偉くない。彼の立て方と云ふものは、一切經の判釋に就ては、殊にへまをやつて居る、弘法も筆の誤りどころではない、初から直ぐ失敗してしまつて居る、是は悪口でも何でもない、能く聽いて御覽なさい——どうしていけないかと言ふと、弘法大師の方は、顯教と密教と分けた、釋迦如來の説かれた總てのお經は顯教だ、何故顯教と言ふかと云ふと、人間を相手に公々然と説教したものだから、之を顯教又は顯示教と云ふ、それでは密教と云ふのは何だと云ふと、人間見たやうな馬鹿な者は相手にせぬ、何處で説いたかと云ふと、この人間の世ではない、天の上の法性宮と云ふ所だ、法性宮では何だか分らぬけれども、好い加減の名前をくつつけて、兎に角人間の行けない所、或は金剛宮と云つたり、雲の上で、菩薩のやう

な偉いものばかり居る所である、其處で大日如來と云ふ佛が、その偉い菩薩に向つて説法したと云ふ、何處の言葉で説いたか分らない、兎に角人間の言葉でない、天の言葉で以て説いた、人間には分らない、密かに説いた教だから密教と言ふ、斯う云ふのであります。詰り人間に分らぬ非常に偉いものである、人間に分る位の教は皆駄目だ、釋迦が幾ら偉くても、人間に分るやうなことを言つたのでは、大したものではなからう、詰らぬものだと云ふ。法身の菩薩——雲の上を飛び歩いて居る菩薩である、それを集めて大日如來が説いたのが、密教即ち大日經である。是は頗るえらいと云ふが、えらいかえらくないか分らないか、弘法大師だつて人間だ、人間に分るやうな教は、いけないと言ひながら、人間である弘法大師が、さう云ふものを解釋して人間に聽かせると云ふのは、矛盾も亦甚しい、まるで成つてゐやしない、大體佛教と云ふものは、釋迦以外の佛が出て説いたものは一つもない、これは歴史に照して見て明白なことである、釋迦一佛の説法である、初め波羅奈國に於て、五人の爲に法を説きしより、最

後拘尸那城に於て、須跋陀羅の爲に説法をするに至るまで、五十年の説法は、釋迦一佛の説法である、それが當り前なのである。故に教相判釋と云ふのは、その釋迦一代の説法の中の分類をするのである、その釋迦の説法を擧げて輕視して、譯の分らぬものを横から引張つて來ると云ふのは、まるで教相判釋と云ふもの、格が壞れてしまつて居る、それ位の事を日本人が了解せぬと云ふことでは、日本人も愚なる哉と言ふより外はない、偉い弘法大師様が言つた「なんと云ふ、そんなこけおどしに、吃驚しては駄目であります。自分のこの人間として有つて居る所の力に於て、弘法大師の思想を裁斷するだけの威力ある智力を、吾々は有つて生れて居る、弘法は人間である、瞞かしを言ふてはいかぬぞと言ふだけの透명한判斷力を、吾々は有つて居るものであります。一旦は人間の説いたものは凡ていかぬと云ひながら、大日經を人間に了解せしむべく、説明を與へんと試るが如きは、聽く必要はないのであります、是程矛盾のことではない。日蓮聖人は實際その通り言つたのであります、弘法如何に尊しと雖も、釋迦牟尼一代

の説法を擧げて、以て之を蔑ろにすると云ふに於ては、許すべきにあらず」と、弘法如何に尊しと雖も、釋迦に優るとは言へまい」と、日蓮は斷言したのであります。その位の判斷力がなければ駄目である、弘法大師が偉いと言へば、お釋迦様を蹴飛ばしても、弘法大師の方が偉いと思ふやうな薄馬鹿では、何を仕出かすか分らぬ。

二一 淨土宗の教相判釋

それから淨土宗の教相判釋は、どうかと云ふと、是も餘り感心したものでない。是はどう分けたかと云うと、聖道門、淨土門と分けた、この分け方が頗るへまなことがある、ヨウ考へて御覽なさい、淨土宗と云ふ宗旨の名前からして、さつぱり駄目である、聖道と云ふのは、聖の修行する道であると云ふ、他の佛教は皆えらい人が實行する所の教である、淨土門と云ふのは、何かと云ふと、この世界では碌な事は出来ぬから、淨土の泥足の儘で宜いから、淨土の門へ飛込んで来いと云ふ、娑婆世界では碌なことも出来まいから、親不孝しても泥棒しても宜い、泥足の儘で淨土の門に這入つて、

さうして阿彌陀の願力によつて泥足を洗つて、西方淨土の極樂の座敷の上へ飛込めと云ふ。逆もこの人間世界に於ては、碌なことは出来ぬと云ふことを前提として居る、人生はもう泥足の儘と云ふことを前提として、全體この世界で善い事をしやうと考へるのが間違つて居る、この世界は逆も碌なことは出来ぬから、その儘親の頭をどづいた儘で宜い、淨土の門の方へ飛んで来いと云ふのが、淨土宗の教である。是は頗る良くない思想である、吾々の教は、宗教にせよ、道徳にせよ、現在を中心にして墮落を防ぎ、向上の光明を見出さなければならぬ。此處はいかんとして捨て、しまふ位ならば、宗教も道徳も要らない、淨土の門で足を洗つても洗はぬでも、此方は知つたことでない。勿論現在の生活と云ふものが、全部ではありませぬけれども、宗教を押し立て、道徳を押し立て、行くと云ふのは、先づ現在から矯正して掛る力でなければならぬ、現在の墮落から覺醒する力を産出すことが出来なかつたならば、その宗教は値打のないものである。然るに彼等はこの現在に努力するものを名けて、自力宗——自分の力の

宗旨と云ふ、さうして「自分の力を頼んで、自分でやらうと云ふやうな、そんな生意氣な者は駄目だ」と言ふ、「そんな自惚のものは絶対にいかぬ、唯何でも腰を抜かして、浄土の門へ来い」と云ふ。人間には所謂良知良能と云ふものがあつて、慮らずして、それを知ることの出来る力がある、親に孝行しなければならぬと云ふことは、學校へ入つて學問しなくとも、そんなに骨を折つて考へなくとも、人間生れつきの良知良能と云ふものがあつて、知り得るのである、猫の子を學校へ入れなくとも、鼠を取つて喰ふだけの能力を有つて居る、人間は人の人たるべき道をやり能ふ力のあるものである。然るにそれを出来ないと云つて、無智無能に導くと云ふは悪いことである、汝は如何に無學であらうが、如何に貧乏であらうが、如何に落魄しても、人の人たるべき道を履まぬと云ふ事があるか。然るにこの行ひ易く履み易い人間の道を、即ち難行を云うてケチを附けたのが法然である、文明の進歩を妨ぐる罪人である。是は私僧侶の仲間から攻撃するから、何か嫌なことのやうに思ふべけれど、倫理の批評、

文明建設の批評から見ても、彼等の思想は許せぬと云ふのが、我國識者の定論であります、どうしても文明の爲に、そんな思想は打破しなければならぬ、「法華經は結構だけれども、それは猫に小判見たやうなもので、此方が猫で分らないのだから、猫の爲には鯛の頭の方が宜い」と云ふやうな事を言つて、鯛の頭のやうな教を尊んで、「何でも良い教は皆小判だ、此方が猫だから猫には上等過ぎる、猫には鯛がよい」と教へる。この事は孟子が言つて居る、弓の先生の所に行つて、未だ弓持つことを知らぬやうな者が入門しても、弓を取つた以上は、向ふにある的の真中の黒星の中心に向つて、矢の當るやうに射なければならぬと云ふことを教へる、十年も二十年も入門して居る弟子に向つても、同じく的の中心に當てると云ふことを教へると云つて居る、初からそんな難かしいことを言つてもいかぬ、黒星に當てよと云つても無理だ「何處でも構はぬから、弓を勝手に引け」と、左様なことを言つては、教にならないのである。教を安賣をして「やすいから此方に来い」と云ふ、濁膠でも賣るならばそれで宜いが、苟も

人心を指導感化する所の教を立つるには、そんなことではいかぬ。この事は基督教では能く言つて居る、他の物は腐つても、教は腐つてはならぬ、天下の鹽が腐つたならばどうするか、日本でも梅干が腐つたら、その家は斷絶すると云ふ諺がある、それは魚は腐る、大根や米は腐るか知らないが、鹽が腐ると云ふ事があつてはならぬ、教は天下の鹽である、他の物の腐敗を止めるのが教である。淨土宗は、その教そのものを腐らして掛つて居る、その着想が最も悪い、殊に我が日本人には大禁物であります。さうして法華經でも何でも之を自力である、難行である、聖道門であると云ふ所に打込んで、唯だ阿彌陀の教だけが、淨土門である、易行であると云ふのである。凡そ宗教は自分の力と大なる他力との結合に存するは、定つて居るべきであります。

三三 諸宗と教相判釋

それからその他の宗旨が段々あります、華嚴宗と云ふ宗旨もあり、法相宗、三論宗等色々ありますけれども、それを一一擧げて比較して見た所が大したものではない、皆

佛敎中の一分派であるから、一切經の中に於ては法華經を中心にして見ないやつなもの、過去に現在に未來に佛敎の眞意を見ることの出来ないものである。光の中に於てお日様の光が一番明るいこと云ふことが分らぬ、水の中に於て海が一番大きいこと云ふことが分らぬやうな者に對しては、何を話しても駄目である、水の中では一番海が大きいのである、それを「僕はどうも不忍池の方が大きいと思ふ、まあ能く考へて見ろ」と云ふやうな人間を捉へてやつて見た所が駄目である。一切經の中には法華經が卓越して居ると云つても、ピッタリして分らぬやうなボンクラ頭の者に、將來の宗教を論ずる資格はありませぬ。比べて見れば明白である、何にも難かしい事はない、諸君が學び得ただけの智力を以て、法華經を取つて、壽量品なら壽量品を精讀して、さうして阿彌陀經と比較して見たならば、ちやんと分つて居るのであります。

三三 佛敎觀の誤解

併ながら日蓮聖人の言はれる通り、詰らない黄色の石でも、多勢やつて來て、骨董

屋が物を賣付けるやうな調子に、勿體を付ければ、値打のあるやうに見えるものである、何でもない途中で拾つた石でも、是は孔子が有つて居つた石であるとか、黄石公が有つて居つた石であるとか、云ふやうなことを言つて勿體を付けて、錦の囊にでも包んで置けば、來た者が感心して「非常に立派なものだ」と云つて歸る、又來た骨董屋も「是は成程立派な物だ、是は五千圓ならお手離しなさいますか」と云つて歸る、來る者も「さう云ふやうに言ふと、遂うこの道傍で拾つた黄色い石が壹萬圓にもなつてしまふ、本當の珠であつても、誰も褒める者がなくて「こんなものはいけぬ」と言つて居れば、やはり價値なきものゝやうに思はれてしまふ、大抵の事はさうである、觀音様なら觀音様が有難いと云つて、ぞろ／＼お參詣に行けば、觀音様が何だか分らぬでも、多勢出掛けて「南無大慈大悲觀世音菩薩、何卒金が儲かりますやうに……」勝手なことを云つて居る、觀音様と云ふものは何だと云ふことは、法華經の中にちやんと説いてある、それは斯う云ふ意味のものだと説いてあるのに、それが日本では全

く迷信、分らずや見たいなものの中に入つてしまつて居る。この人生に必要な道徳と、道徳以上に必要であり神聖であるべき宗教が、所謂八卦見とか灸點おろしと云ふやうな者と伍をなして、さうして唯だ迷信的の埃りに葬られて居るのである。今この日蓮主義の上に於て唱道するのは、さう云ふものではないのであります、飽くまでも日本の理想的文明の中に、神聖なる宗教の位地を占めて、さうしてその効用を完うして行かうと考へる所から、判定するのでありますから、どうぞ諸君は唯だ世間の盲目者が黄色い石を褒めて居るから、それがえらいのだらうと云ふやうな考を打捨て、本當の法華經の明白なる教訓に基き、日蓮聖人の遺文に基いて、確實なる據處に基いて、さうして信仰を打立てるやうにして戴きたいと思ふ。

以上は先づさつと日蓮主義に由つて一切教の判釋と云ふことを御話したのであります。

第貳編 佛陀に對する意識信仰 (上)

今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此の處は諸の患難多し、唯だ我れ一人のみ能く救護を爲す。
(譬喩品)

一 意識信仰の紛亂

是れより佛陀に對する意識信仰と云ふことをお話しやうと思ふ、是は佛敎に教ふる所の佛様と云ふのは、どう云ふ風に心得て、信仰したら宜いのであるかと云ふ問題であります。

佛敎はお經が澤山ある爲に、同じ佛敎でありながら、佛様に對して色々な考があり、信仰が起つて居る、甚しきに至つては、佛様を忘れてしまつて、その外のものを信じて居るものもある。又佛様ではあるけれども、中心となるべき佛を忘れて、横路の佛を

信じて居る、例へば娑婆世界の教主は釋尊であるにも拘らず、十萬億土の安養世界と云ふ別の世界がある、十萬億土も横路へ行つて、安養世界の阿彌陀様を信じて、此方の佛様は捨てしまふと云ふやうな者もある。

二 非人格の佛陀

又佛様に對する考へが人格的でなく——人格的と云ふのは、姿があり魂があることであるが、さう云ふ方なしに、佛と云ふものは、バツと擴がつて居る所の宇宙全體であると言ふ、それは幼稚な思想の場合には、さう云ふ考も起る、即ち宇宙全體の大生命であるとか、或は宇宙に遍満して居る所の法性であるとか言ふと、ちよつとそれが高いやうにも見える、哲學風の人の考から言ふと、宇宙の大生命、宇宙絶對の大靈と云ふやうな事を言つて居れば、何だか大きくて立派のやうに思ふけれども、それは宗教としては未だ成熟しないものである、さう云ふ考が直に間違つて居る譯でもないけれども、未だそれは能く極らぬ間である、理想である間であつて、宗教の信仰へ移

すには、宇宙の大生命だと云ふやうな事では、信仰とはならない女が理想の亭主を持つんだと云ふ、自分の亭主は上等な亭主であらねばならぬ、形はないかも知れぬ、えらい者であらねばならぬと云ふ間は、話は立派だけれども、その亭主は何處に居つてどんな者だと云ふ事になると、ハッキリしない、居らない者かも知れぬ。宗教の信仰は切實なるものを要求するのであるから、さう云ふボンヤリした事では駄目ナンである、どうしても宗教の信仰は、人格的に達せんければ満足の出來ないものである。

三 萬有神的思想

然るに佛教の中には、さう云ふ擴がつた宇宙全體に亘つてしまつて、頭も尻尾も分らぬ所の佛陀を認めるやうな者もある。或は萬有神教と云つて、さう云ふ擴がつたものを今度萬物に移して行く山でも川でも事々物々が、佛であると云ふ思想である、それも一面理論上から言へば、言ひ得られぬことはない、皆宇宙の大精神の表現であり、宇宙の絶對の表現であるから、表現それ自身が皆佛である、人間は無論佛であるが、

何でも佛である、山でも川でも皆佛であるといふ、山川草木悉く皆是れ毘盧遮那現成の如來なり」と云ひ、それを又大變良い事のやうに思つて居る、現在サウ思つて居る人もある。けれども能く研究すれば、宗教の信仰を繋ぐ所以でない、何故かと云つたならば、ソナナ事は理屈で言うて居るけれども、茶碗でも土瓶でも皆是れ佛だと云ふやうなことを言つて見た所が、何時まで見て居つても、吾々は土瓶は土瓶だ、土瓶を割つたからと云つて「あなたの所では、佛様を壊してお氣の毒様」と見舞は云はれまい、そんな事を言ふ者は無い、土瓶が割れた、仕様が無い、捨て、仕舞へ」と言ふだけである。理窟としては萬有皆佛なりと言つても、人間には情意と云ふものがある、人間の心に情があり、感覺があつて、左様な屁理窟を言つて居つても、それでは逆も動かぬものがあるのである、子供が死んだのも、土瓶が割れたのも、同じものだと云ふやうな事を言つても、土瓶が割れたのを見て涙を流して「あゝ可愛い事をした、可愛い子供が死んだのも同じことだ」とは思ふまい、狂人ならそんな事を言つて泣くか

も知らんけれども、健全な頭の人には無い、であるからさう云ふやうな事を言うて居る間は、冷たい理窟を言うて居るのであつて、生々したる人間の精神を導いて、命を捨てしもの信念に依つて活きやうと云ふ、本當の力を現はすことは出来ないのです。さう云ふやうな山でも川でも皆毘盧遮那如来だ、空吹く風が毘盧遮那の說法だ、松が枝つたふ風の音が眞の說法だと云ふやうな事を言つても、それは理窟であつて、松の枝をゴクゴク吹いて居る風を聞いて覺つたと云ふやうな事を言ふのは、嘘ッ八である、そんな事をして居れば風邪を引くだけの話だ。

四 禪學的の思想

又分らぬでも、分つたやうに言ふ奴がある、發句などを嚙つて居ると「古池や蛙とびこむ水の音」ジャブナンと言つて、證つたやうな顔して居るけれども、あやしいものである。乃公はお經など見ない、眞理は宇宙に在る」と云ふ、それはそれに違ひないけれども、その宇宙にある眞理を、吾々に了解し得られるやうな言葉に移し、そ

れを噛み砕いたものにして、吾々を導く所に宗教と云ふものが存立するのである。宇宙に存在して居る眞理その儘で、吾々が直接救はれるならば、宗教は要らない、自身自身が勝手に眞理を捉れば宜い、けれどもさうは行かない、或る意味から言ふと、吾々は赤ん坊見たやうなものである、赤ん坊が野菜を食はなければならぬからと云つても、大根や牛蒡をまる嚙りにする譯には行かぬ、やはり母親の胃袋を通して乳になつて、初めて漸くそれが飲めるやうなものである、小さい事は人間の智力で行けるけれども、大なる問題に行くと、人間はどうしても或る偉大なる胃袋を通して、消化した所のものを與へられなければならぬ、其處に宗教がある、母親が乳を飲ますやうな所に、宗教と云ふものはあるので、赤ん坊が飛出して牛蒡や胡蘿蔔を丸嚙りにするやうな所には、宗教と云ふものは無いのである、其處を能く了解せんければいかぬ。佛様を見るには、そんな冷たい理窟では、逆も吾々の精神を満足せしめ得るものではありません。

五 大佛的の思想

佛陀に對する意識(佛仰上)

そこで色々お経もありませうけれども、例へば大日経を學んで、山でも川でも佛様と見たり、或は華嚴經を學んだが爲に、大きな佛に擬がつてしまつて、奈良の大佛様のやうなものになつて、人の信仰を繋ぎ得ない、古物保存としては珍重されて居るけれども、彼の奈良の大佛様の前に行つて、頭を下げる者が存外少ない、成程大佛様は大きいナ、彼の鼻の孔の中を人が歩けるさうだ、一つ這入つて見やうか」と云ふやうな事は言ふけれども、其處に人間の敬虔の念を以て、眞心を以て、宗教的信仰を捧げると云ふことは、殆んど絶無である。それはどう云ふ譯であるかと云ふと、唯だ無闇に大きくばかりしてしまつて、人間の情意を満足せしむることを考へないから、さう云ふものが出來てしまふ。けれども華嚴經を讀んで、華嚴經の眞意を握つたならば、あんな大きいものを拵へて、上を向いても頭の方は能く分らぬやうな物を拵へんければならぬことはない、佛は一面にはあゝ云ふ大きな働きを有つて居るけれども、汝等を救ふが爲に汝等と同じやうな姿を取つて此處へ生れた、その内面の有つて居る力は、

斯の如きものと云ふので、非常に大きな事が澤山説いてある。その内面のものを其處へ曝け出して、人間を救ふべく現はれた意味を忘れてしまふから、あんなに大きくなつて來る、さうして華嚴經の意味も人間に分らぬやうになる、或は芥子粒の内に須彌山が這入るとか、一本の毛の中に世界中が這入つて居ると云ふやうな事ばかり言つて、眞實の意味は分らぬやうになつて、終に華嚴宗と云ふものは滅びてしまつた、今日は華嚴經は存するけれども、華嚴宗は亡びてしまつた、それは即ち賢いやうで間が抜けて居るから、さう云ふ事になるのである。今でも日本に氣が利いて間の抜けた人間は、ウジャ／＼居る、少し哲學でもやると直きにさう云ふやうな事を言つて、佛ナンと云ふものは、そんな姿があるとか、形があるものではない、宇宙の絶對であるとか、大生命であると云ふ。それは宗教の信仰を有たない所の人であります、さう云ふやうな事を言つて居る人は、生涯何等信仰に入り得ない、宗教の方から言へば、ひやかし人間である。

六 中心統一の思想

私は、華嚴經でも大日經でも、決してさう云ふやうな迂遠な譯の分らぬものでないと云ふことを斷言致します。又その他のお經を研究致しましても、佛敎と云ふものは、纏りの附いて居らないさう云ふ迂遠なただつ廣いものでない、一一確に中心を立てられたものである、その意味が頗る明瞭に、徹底的に現はれて居るものが、法華經である。法華經が獨りさう云ふ意味であつて、他のお經は皆反對して居ると云ふのではない、他のお經に於てはその意味が少し不透明であつたのを、法華經に依つて明晰に示されたと云ふに過ぎないのである。故に一ト度法華經が現はれて見れば、一切經は皆法華經と同じ意味に見られるのである、阿彌陀經を讀んでも、大日經を讀んでも、決して法華經に反對したやうな意味合はありませぬ、他の宗旨の者は、反對したやうな説を立てるけれども、それは誤解である、お經それ自身の間に、左様な衝突と云ふものは無いのである、一遍に大事な事が説けぬものだから、佛様が現はれて働いて御

坐る内面は、斯う云ふやうに大きいものだと言つて、盛んに大きな事を説いたり、或は又さう云ふ偉大な所を止めて、佛が事實に日々親切にせられた所ばかり説いたり、色々にお經は説かれたけれども、それは佛の偉大なる事を示すに就て、その一部分一部分を説明して行つたものである、それを貫いてスツカリ纏めて、分裂しないやうに、佛の活動の全體、表面と裏面との一致を、能く説明したものが、即ち法華經の思想であるのであります。

七 釋尊の三徳

是に於て佛に對する考は、どう云ふ工合にして行つたら宜いかと云うと、色々問題も起りますが、第一は、佛敎に教へる意味は、釋迦佛の三徳と云ふことであります。三徳と云ふのは、佛は我等の精神的の主君であり、又精神的の師匠であり、精神的の親である、即ち吾等の肉體に屬する方の親は、この身を産んで呉れた父母であるけれども、既往に無限の生命と云ふものを有つて居る、吾々の親より前から續いて居る過

去の生命、今度死んでも滅びない無限の生命がある、この世界に現實に太郎兵衛として産れて来る人間は、八兵衛とお鍋の子供として生れて来たのであるけれども、それより前があり後がある、永遠の生命を飽まで導いて呉れる、親切に世話して呉れる方がある、人間は死んだらモウそれつきり、世話をすることは出来ない、どんな親切な阿母さんでも、子供が死んで焼かれて、骨になつて墓場へ葬むられてしまへば、石塔の頭から水位掛けて呉れるけれども、それ以上世話は出来ない、靈の行く途に就ては、如何に慈愛深き父母と雖も、如何ともする事が出来ない、併し滅びない生命は、墓場の石塔の彼方に於ても、やはり辿つて行き居る、その場合に於て親と同じやうに、若くはそれ以上の親切を以て、導いて呉れる眞の親たる者が佛陀である、それを精神の親と謂ふ。さう云ふことを言つては、人間の親が粗末になると云つて、心配する學者もあるが、彼等は餘程間の抜けた學者である、人間と云ふものは、そんな學者が心配する程粗末には出来てゐない、精神の親を信するが爲に、肉體の親を粗末にするやう

な馬鹿者は、昔から一人も無い、宗教の信仰を有つたが爲に、尙ほ以て肉體の親を有難く思つた人は千萬人でも億萬人でもある。であるからさう云ふ學者は、その點に於て學者ではない餘程の薄馬鹿である、宗教が精神の偉大なる父母を信するが故に、肉體の父母を輕んずるなどと云ふ事を心配する學者は、全く愚なことでありませう。人間の精神と云ふものはさう云ふものでない、洵に圓滿無礙なるものである、是が形のあらゆるものであるといけないが、心と云ふものは形はない、磨けば磨く程、無限の光、無限の能力を發揮する、人間の精神は面白いものである、親に非常に孝行だと云うと、孝行に精神を使つてしまつて、君に忠義が盡せないかと云ふに、さう云ふものではない、親に非常な孝行する人は、亦君にも非常な忠節が盡せるのであります。人間の能力と云ふものは不思議なもので、取つて置いたから、それだけ溜つて居ると云ふものでない、學問すれば毎日々々脳力を使ふから、減つてしまふだらうと云ふけれども、さうではない、子供の時から學問も何もしない親爺は、脳力がウンと溜つてゐて、賢

こいかと云へば馬鹿である、精神と云ふものは、使へば使ふ程益々その能力を發揮して行くものである、故に吾々は佛を、久遠の生命に對する親とし、師匠とし、主君として、之を信するのであります。

八 主徳の意義

それはどう云ふ意味に於てであるかと云うと、主人と云ふことは、支配する意味であり、この宇宙は、偉大なる佛陀に支配されて居るのである、どう云ふ事で支配されて居るかと云うと、即ち一切の宇宙に現はれる事柄は、佛陀は法王と云つて、宇宙の萬有の王として、之を支配せられる、吾々はその偉大なる佛様の支配して居られる宇宙の中に生れて居る者で、即ちこの點に於ては佛様の家来である。

九 師徳の意義

師匠と云ふことはどう云ふ意味かと云うと、唯だ支配して居るだけではない、この宇宙全體に於て生きとし生ける者を導く爲に、善き教を興へ、善き導きを興へ、いろ／＼

の方法を以て、一切衆生を善導せられる所のお師匠様である、故に大恩教主、或は本師とも申し上げるのである、小さい事は誰でも知つて居るけれども、愈々大事なことになつたならば、佛様から教はらんければならないと云ふことが、即ち佛教徒の意識信仰である。この偉大なる佛陀が人類に生れぬ限りには、大問題、大疑問と云ふものが解決されない、獨り釋迦牟尼出でて、人類の千古の謎を解決し、千古の疑問を解決したのである、釋迦牟尼に依つて人間の精神界は、光明に接し得たと信するのが佛教徒であります。この故に眞の大きな問題に於ては、佛をお師匠様として、吾々は尊敬するのであります。

一〇 親徳の意義

いま一つは親であります、即ち慈父大覺世尊と申上げて居りますが、洵に慈悲深い所の吾等の命の親であります、それは佛が一切の事柄に就て、常に慈悲を以て一切衆生の苦みに沈んで居るのを、温かき仁慈を以て、どうぞしてその苦みを救つてや

らうと云ふ、一念も忘れ給はぬ、夜となく晝となく、「毎に自らは念を爲す、何を以てか衆生をして」と云ふ、大慈大悲の思召と云ふものが、間斷なく續いて居るのであります、實にこの點に於ては、佛様の温かき思召と云ふものは、他に比ぶべきものはない。

一一 悲母としての意識

さうして是は父と云ふ言葉で現はしてあるが——先づ父として現はすを以て、意味が良いと云ふので、慈父と云ふ事が多いのであるけれども、母として現はしてある所も幾らもある、優しい親切な方に於ては、吾等は嬰兒の如く、佛は即ち悲母の如きものである、吾等は幼兒にして、乳を飲んで大きくなるものであり、佛は之に乳を與へる所の母である、いろ／＼さう云ふ風にして、佛様の優しい意味合と云ふものは、能く現はれて居ります。是は中途から考へますれば、精神界の支配者、精神界の教師、精神界の親と云ふやうなことは、他に於ても言ひ得られぬことはない、それは基督教

を信する者が、基督教に於て教ふる所の天の神を以て父とし、基督を以て教主として、色々説明するけれども、それは基督教を信する上に於ての事である。佛教を信する者の方から言うと、佛陀が眞の主師親三徳を具へて居るお方である。婆羅門の方から云へば、摩醯首羅と云ふものを、父とするけれども、それ等の者も、佛に對すれば、皆子であると云ふので、佛教に於ては梵天でも帝釋でも、みな來つて佛に禮拜歸依し、佛の教を聽いて居る、この點が如何にも明白に佛教にも説明せられて居るのであります、梵天でも帝釋でも決して之を輕蔑すると云ふことはない、吾等の主師親としては、一切經何處を披けて見ても、釋迦牟尼を除いて他の者を擧げては居らぬ、阿彌陀經を披けて見ても、阿彌陀如來を以て、吾々の父と言つた事は決して無い、吾々の教主と謂つたこともない、娑婆世界の吾等を支配する法王と云つたこともない、大日經を見ても、さう云ふ事はない、一切經何處を披けて見ても、吾々の爲の主師親三徳者は釋迦牟尼世尊、吾等の前に教を垂れたる釋迦牟尼世尊であると云ふことを、最も明白に

一切經は何處でも説明して居るのである、現實の人間の上で言つても、お父様が彼方へ行つたり、此方へ行つたりすることは無い、親切にして呉れる人は幾人あつても、隣の小母さんが親切だ、向ふの親爺さんが親切だとは云ふけれども、お父様は一人に限つて居る。日蓮聖人は其處を明かにして居る、いろ／＼言ふけれども、お前等の精神上の父は誰だ、無いと云へば父無子か、二人あると云へば間男の子か、斯う日蓮聖人は言はれて居る、誠に明白でありす。佛教を信する限りに於ては、親を取違へてマゴ／＼する必要はない、耶蘇教を信する以上は基督が教へたる天の神を信じて、之を父とするに於て異論が無い、佛教を信する以上に於ては、釋迦牟尼世尊を以て吾々の主師親三徳者とするに於て、議論のあるべき餘地は無い、日蓮主義はこの點に特色がある。

一三 三徳の文證理義

さうしてこの言葉を纏めて法華經で教へて居りますが、それは彼の有名なる譬喩品

の文であつて、この經文は非常に大切な意味を有つてあります。

今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子
而今此處 多諸患難 唯我一人 能爲救護

この「我が有なり」と云ふ所が、即ち主人としてこの世界を支配して居る事を示して居る、我は法王としてこの天地宇宙を支配して居る者であると言つて居る。「其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり」その三界の中に生れて居る所の總ての命ある者は、悉くこの佛陀の子である、子として愛して居るものである。「而も今此の處は諸の患難多し」で、多勢の者の生活して居る所には、いろ／＼の苦みがある、即ち四苦八苦と稱して、或は病に罹り、或は死に、或は求める所が得られないと云ふやうな事で、いろ／＼患難して居る、この苦みを見捨て、置く譯に行かぬ、そこで廣く之を救ふと云ふ場合に、別段手傳ひを頼まぬでも、俺が偉大なる力を有つて居るが故に「唯だ我れ一人のみ、能く救ひ護ることを爲す」我れ一人にして救ひ護る力を有つて居ると云つ

て、さうして腕を出して、この腕一本は十方世界中の者がブラ下つても、天地宇宙の有ゆるものが皆ブラ下つても、尚ほ之を助くるに餘りがある、況んやこの娑婆世界に生れて居る者を救ふには、我が一つの腕で澤山だと云ふ、この娑婆世界の人を救ふのに、薬師様を頼んだり、觀音様を頼んだり、そんな事は要らない、唯だ我れ一人にして救ひ護らるる力がある、其處を信するのであります、それが日蓮主義の佛に對する所の意識信仰である。三十三間堂のやうに澤山の佛を祭つて、何處でも構はず頭を下げて、斯うして置けば、何處かの佛様が護つて呉れるだらうと云ふ、そんな澤山を頼むのではない、勿論その澤山のものに對しても尊敬は拂ふ、人の崇めるものに對して決して不敬の事はせぬ、何でも大切にするけれども、苟も大事な事柄は唯だ一人の本尊、釋迦牟尼佛に對して、我が信賴を捧げると云ふ所に、日蓮主義の正義は在るのであります。

一三 釋尊の顯本

その次に佛に對して考へねばならぬ事は、佛陀の顯本と云ふことであります。この世界に現はれて下さつた釋迦如來は、或る意味から言へば年限が八十年であつたり、又爲さつた事柄の中に於ても限りがあるものである、偉大なる働きは爲さつたけれども、或はその説かれた事にも限りがあり、爲さつた事にも限りがある、宏大なる慈悲と智慧とを振舞はれた佛一代の活動は、何とも申しやうのない程偉大なるものであるけれども、併し尚ほ限りがある、限りがあるに依つて、或る意味から言へばモツと偉い事、即ち弘法大師が考へたやうに、釋迦如來は人間相手にして説いたから詰らない、人間に分る位の事は駄目だ、モツとそれ以上の事をやらうと云ふ——それは詰らぬ事だ、人間に分らぬやうな事を考へて居る奴は馬鹿だけれども、併し假にさうする、モツと偉い事があるかも知れぬ、あつて見た所が分らぬ者は何にも分らぬのだから、知つて居つても言はぬ方が善い、分らぬ事を知つた振して喋べる奴は馬鹿だ、けれども假にも釋迦様の働きより、更に偉大なものがあるか無いかと云ふ問題になつて行つた

時には、茲に即ち顯本と云ふ問題が起つて來るのであります。

一四 壽命の顯本

それは先づ壽命の上に就て、八十年と云ふ壽命は佛の眞の壽命ではない、用事を爲さる爲に先づ悉達太子としてお生れになり、成道を遂げ、さうして五十年説法を爲さつて、先づ之に於て説くべき法は説き終り、度すべき衆生は度し了つて、モウ早や爲すべき事が無いから、入滅をされると言はれた、その八十年と云ふものは、生れられる時に初めて佛が出来たものでもない、跋提河の邊に入滅せられた時消え去つたものでもない、生れ来る前に久遠の本佛があり、入滅せられた後に常住不滅の本佛があると云ふことが、年の上に對する顯本であります、この事を考へなければならぬ。お釋迦様は涅槃してしまはれて、今は何處へ行つたか分らぬと云ふのは、佛敎を信する人の考ではない、何宗であらうとも、お釋迦様が涅槃して行衛が分らぬ、失踪届を出さうと云ふやうな人間は、決して佛敎を信じて居る者とは言へないのである。釋尊は八

十年の壽命を以て入滅してしまつても、それは人間に現はれた姿をお隠しになつたのであつて、現にあり／＼として常住不滅の如來である、恰度太陽が朝東の海上上つて又暮方に西の山に隠れるけれども、それは吾々が山に遮ぎられ海に遮ぎられて、日の光を見ないだけで、お日様の體が朝出來たのでもなければ、夕方西の山の向ふに落ちて消えてしまつたものでもない、釋迦如來が迦毘羅城に降誕せられて、跋提河に入滅せられたのは、即ち東の海と西の山とであつて、その久遠の本佛は今も光明を發して、不滅の如來として存在して御坐るのである、その如來は何處に御坐るかと云へば、『近しと雖も見えざらしむ』と説かれて居るから、現に常住不滅の如來は我が頭の上を照して居らるる、吾々信仰の上には何處にも生き／＼したる如來が、常住に在すと云ふことを信するのが、年に關する所の顯本であります。

一五 活動の顯本

佛の働きに就て申上げれば、今度爲さつた事も非常に立派でありますけれども、そ

れよりモツと偉い事がありとするならば、それはどんな偉い事でも爲されるのであります、或は他の佛が假にやつた事が偉いやうに見えるならば、その偉い佛がやる事も皆お釋迦様は出来るけれども、そんな事を人間の世の中によつて行く必要が無いから、爲さらないのである。随分それは佛敎には殆んど怪談に類するやうな事が、澤山説いてあるけれども、それは人間に寧ろやらぬ方が宜い、お釋迦様のやうにやはり人間に適したる、餘り怪し氣に見えない、威化の方法を以てやつて下さつた事が、寧ろ難有いのであります。世間には可怪し氣な事を難有がる者がある、例へば鐵鉢なら鐵鉢をポンと叩くと、中から澤山御馳走が出て來るとか、その方が宜いちやないか、お釋迦様は働いても容易に飯が食へぬと云ふ、そんなへボな佛は駄目だ、俺の方の佛は鐵鉢からバツと出して呉れる、この方が宜いちやないかと言ふ、それはお釋迦様も出來るのだけれども、人間の世の中に鐵鉢の中から御馳走を振撒くやうな事を教へると、人間が懶惰になつて、それが爲に社會の組織が破壊されるから、無闇に鐵鉢の中から御

馳走振撒かぬ方が宜いと云ふので、お釋迦様は左様な教化を爲さらない。出來ないのではない、何でも神變不思議の事をやらうと云ふ氣ならば、お釋迦様は無限の神通力を有つて居ると云ふ事が、活動の上になける顯本であります。

一六 相好の顯本

それから相の上になつて、人間見たやうな體でなく、モツと大きく即ち大佛様のやうにとか、或は世界中を一呑にするやうな姿が欲しいと云ふならば、お釋迦様はそんな事は、バツとやれば直ぐ成れる、けれどもそんなに大きく世界中に擴がつてしまつたら、人間が見ることが出來ない、それでは駄目だから、やはり人間のやうに生れて、人間を教化なさるのである。さう云ふ工合に總ての問題に就て、其處が足らぬと思はれるならば、それは足らぬのではない、それが適度であるが故にサウなさつたので、その奥に無限と云ふものを有つて居る、と云ふことを現はすのが顯本と云ふ理想である。

一七 宗派的妄執

この奥の手が一つ現はれて來ると云うと、いろく佛敎にある間違つた考、いろくな宗派と云うか、何だか知らんけれども、變てこな事を言うて團結を作つて居るものは、木葉微塵に打碎かるべきものである。この佛に對する顯本と云ふ理想が一つ分らぬが爲に、様々な迷を以て摸索を試みて、盲目が暗中を索つて居るやうな有様で、色色の間違つた思想が起つたのである、それを宗派と云ふやうな名前を附けて、分らぬ者同志が團結して居るけれども、左様なものは今後不必要である。佛敎は今申すが如く絶對の信賴を本佛に捧げて、之を顯本すると云ふ上に於て、初めて世界の宗教界に立つて覇を争ふ事が出来るのである。この思想に基かすして、佛敎内部の善惡を争ふは、即ち露西亞が同志討をやつて居ると一般、世界の思想に向つて佛敎が勝利を占めることは、斷じて出來得ないことである。今の日本の佛敎は、露西亞の混亂して居る状態よりも、モツと酷い有様のものである、斯の如きものは、どうしても覺醒せんけ

ればならぬ、今のやうな生くらではないかぬ、モツト徹底的にやらなければならぬ、又吾々日蓮主義者は、やつて見せると云ふ確信を有つて居るべきである。

一八 諸徳の顯本

その外慈悲の上に於ても、智慧の上に於ても、力の上に於ても、功德の上に於ても、すべてに絶對無限を内面には具有する、それが適度に現はれたものであると云ふことを、信するのが顯本の思想である。この事を能くお説きになつたのが、法華經の壽量品であり、日蓮聖人はこの意味を、開目鈔と云ふ遺文に於て、詳しくお述べになつて、命を懸けてこの點を御主張なさつたのである。日蓮主義の心髓は、即ち佛陀の顯本に在るので、佛陀の顯本を忘れたやうな者には、日蓮主義者と言ふ光榮は許せないのであります。

一九 本佛の應現

それから更に考ふべき事は、今度は應現であります。應現と云ふのは、その佛が現

はれて來ることでありまして、今度天竺に現はれたのは、即ち應現の一つであります。併しこのお釋迦様は、天竺の迦毘羅城に悉達太子として現はれるばかりでなく、その現はれは自由自在であります。完全な佛の意味を以て現はれたのは、悉達太子として現はれた釋迦でありますけれども、必要に應じては、色々な姿を以て現はれて來るのである、壽量品には「或は己身を示し或は佗身を示し」とあります、佗身と云ふ時分には、菩薩から以下九界の相を言ふので、人間にでも神様にでも何にでもなつて現はれて來る、故に顯本した佛陀から見ると、例へば日本の大切にしなければならぬ神様は、やはり本佛の應現として之を信するのであります、お釋迦様も應現であり、日本の神様も應現である、その他日蓮聖人が上行菩薩の再誕と云ひましても、本へ戻せばやはり上行菩薩と云ふのも、お釋迦様の働きの一部である、故に本佛が應現して、日蓮聖人になつた、と言ふことは出來るのである。さうすると日蓮も本佛だから、日蓮でもお釋迦様でも、同じぢやないかと言ふ者があるかも知れぬが、それは違

ふ、應現した時に大工として現はれた者は大工、軍曹として現はれた者は軍曹、少將として現はれた者は少將、師團長として現はれた者は師團長と云ふやうに極つて居る。然るに本が同じだから、軍曹でも師團長でも同じだと云つて、軍曹が師團長に對して「コラッ」と云ふやうになつてはいかぬ、軍曹として現はれた者は何處までも軍曹である、それ程威張りたければ、軍曹にならずに、師團長に生れて來る外はない、現はれて來る位地と云ふものは、やはり守らなければならぬ、應現で現はれるのだから、何でも彼でもゴチャ／＼に見やうとするは、譯の分らぬ籠の弛んだ人の考である。〇鬼子母神も本佛の現はれた、日蓮聖人も本佛の應現だ、阿彌陀様も本佛の應現だ、サア濁醪持つて來い、皆んなで一緒に胡坐かいて飲まうぢやないか」と、さう云ふものではない、ちやんと一旦現はれた以上は、秩序整然たるものであります。

二〇 本佛觀の包容性

そこでさう云ふ偉大な應現と云ふことを、本佛に就て認めるから、茲に包容性と云

ひますが、有ゆるものを收め容れる力が、日蓮主義の佛陀觀には現はれて來るゝであります。故に阿彌陀如來も決して排斥するのではない、阿彌陀如來が本佛の應現であると云ふことを、日蓮聖人は主張されるので、阿彌陀を叩き毀せと云ふのではない、應現である所の阿彌陀如來が、本佛を侵して來るに依つて、それはいかぬ、影を以て體を閉さんとする故に、それを日蓮聖人は許さないのであります、一つの佛でも、一つの菩薩でも、日蓮主義は決して排斥はせぬ、應現として現はれたものは、影法師でも宜しい、一旦現はれた阿彌陀如來と云ふ名前だけでも宜しい、芋の葉の上に露が溜れば、その上にも月は映るのであります、風が吹いて露がポロリと落ちてしまへば、月は何處へ行つたか分らなくなる、それと同じやうな事で、阿彌陀如來が有るか無いかと云つても、それは芋の葉の上に、月が映つて居るか居らぬかと云ふ問題である、映つて居ると云つても宜しい、露が落ちれば無くなつたと云つてもよい、阿彌陀も藥師も、言葉の上に於て説いただけの話である、一切經の中には澤山佛がある、それはお

釋迦様が説法の時、時に應じ處に順じて色々のものを説いた、けれども結局そんなものは、我が働きの一部であると云ふことを、終ひに顯本して一つに纏められてある。天に在る所の月を忘れて、芋の葉の上の月を争ふと云ふやうなことは、餘程の馬鹿でなければ出来ない問題である。

二二 本佛と我國の神明

であるから日蓮主義は、他の一つの佛でも一つの菩薩でも排斥するものでない、一切を包容して行く、即ち統一と包容と云ふ力を完うして居るものであるから、日本に來ては、日本の神様を大切に於ては、日蓮聖人が最も力を注がれたので、本尊の中にも、天照大神、八幡大菩薩と云ふやうに現はれて居る。所が淨土門や何かでは、日本の神様を信することが、出来ないやうになつて居つた、今度初めて増上寺で、天照大神を祭つて遙拜したから、大正七年からは、少し改まるかも知れんけれども、それは唯だ表面である、開山以來傳つて居る思想と云ふものは、中々改まらない、法

然上人の書いた書物があつて、代々の浄土宗の學者は、それに依つて思想を承継ぎ來つて居る、今は法然上人の眞意が衰へて居るから、左様な附焼刃のやうな事が行はれて居るが、一ト度法然上人の意思を復活したならば、左様な思想は皆撲滅されるものである。宗教はさう云ふ瞞着はいかぬ、解散せなければならぬやうになつたならば、速に解散して、間に合はぬ宗教は止めた方が、一番宜いのである。

三三 顯本と雜亂の別

であるから日蓮聖人は、本佛の顯本、應現と云ふ思想から、一切のものを包容せられた。日蓮主義の誤解者は、その一切を包容せられた所から流れて、或は鬼子母神の信仰となつたり、帝釋の信仰となつたりして居るけれども、それは又餘りに遙か弛んだ話で、中心の本佛、統一の本佛を忘れたならば、大變間違つた事になるのであります。そこで應現の中に於ては、三世十方周遍利益と申しまして、時間の上に於ては、始なき始より終なき終まで、本佛は應現を續ける、又空間の擴がりの方に於ては、十方

世界到る所に應現をするのであつて、限りなき偉大なものであり、その應現して行く中心を、今の釋迦牟尼佛に執るので、是が即ち中心であります、偉大なる本佛の應現として、佛陀格として現はれたものは今の釋迦であります、宗教の信仰に現はれたる所の佛陀としては、今の釋迦牟尼でなければならぬ。天照大神が如何に偉くとも、宗教心を満足せしむる中心としては、釋迦に及ばぬ、併し日本の國家と云ふものを、擁護して行く方から云へば、天照大神は釋迦より大事であります。吾々が宗教の信仰を中心とした時に於ては、お釋迦様が佛陀格を以て現はれた全部であります、それは鬼子母神でも帝釋でもいかない、帝釋は婆羅門で祭つたものであるけれども、お釋迦様の所で頭を下げて説法を聞いたり、又威張つた事を言つて阿修羅王から攻められて、小さくなつて顛へたりするやうなものである、お釋迦様が宗教心の上に於ては、有ゆる方面に満足と與へられて居るものであつて、逆も他に比ぶるもの無いものである。國家としては、日本の組織は、調べれば調べる程、世界に冠絶して居る、即ち國と云ふ國

の鑑となつて居るものが、日本の國家であり、教と云ふ教の鑑となつて、宗教心に満足を與へるものが、佛陀の教である。その完全なる國家と完全なる宗教と結合して、それを飽までも基にして、世界の文化を導かうと努力されたのが、日蓮聖人でありま

二三 人としての應現

であるからこの應現と云ふことは、非常に廣い大きなものであるが、併し中心を釋迦牟尼に置くと云ふことを、忘れないやうにして、その應現をモット適切なる所に導いて来る、即ち自分の親なら親が、良くない人間である場合に、その子供に非常な善心の者があつて、親を善道に導く、非常に亂暴な悪心の親を、子供が善道に導いて、道德の人にするると云ふ場合には、その子供の上に、佛が乗移つて御働きなさる、娘の上に宿つて、拗強い親爺を教導せられる事もある、娘全體が釋迦如來でなくとも、昨日と今日とか、二日なら二日乗移つて働く場合もある、その意味を日蓮聖人は餘程強

く應用せられた、船守彌三郎が、伊豆の伊東に於て、日蓮聖人を助けた時には、彼は唯の漁師でない、今までは唯の漁師知らんが、今日蓮を助けるその時は、我が絶對の信頼を捧ぐる釋迦牟尼佛の御魂が、彌三郎の心に入代らせ給うたのであると仰しやる。阿佛房が佐渡が島に於て、日蓮聖人を斬らんとした、けれども御目に掛つて感服して、夜な〜妻をして、食物を送らしむるに至つて、日蓮聖人は阿佛房に對して感謝した、あなたは日蓮の仇として來たやうであつたけれども、今から考へれば三名淨行菩薩が、日蓮一名上行として、法華經の爲に佐渡に流されて來るのを待ち構へて、淨行菩薩が助くべく準備して下さつたのか、あなたは阿佛房と云ふけれども、淨行菩薩ではないかと、日蓮聖人は言はれて居る。この精神は餘程強く聖人は言はれて居る、富木殿に對しても、あなたは二名無邊行菩薩ではないかと言ひ、又弟子信者に對して、すべて本化の菩薩の自覺を有てと言はれた、唯だ日蓮のみが上行菩薩でない、汝等『南無妙法蓮華經』を唱ふる者は、釋尊の魂が、入代らせ給ふたものと思へ、汝の

心に『南無妙法蓮華經』が響けば、この聲は、本佛の尊の仰しやる聲と思へ、汝等自らの聲であらうとも、『南無妙法蓮華經』を聞いた時の汝は、本佛直接の御聲と思へ、汝の心に信仰を得れば、それは汝の心のやうであるけれども、本佛が感應を垂れて、汝の心に入代つて導き給ふものと思へ、『佛の御魂の入代らせ給はずば、唱へ難き題目なり』と仰せられて居る。龍の口に於て首が斬れない時にも、日蓮の首は唯斬れないのではない、本佛が来て守つて下さつて居るから、斬れないのである、大覺世尊が、日蓮の首に代らせ給うたものであると云ふ。この本佛が、個人々々の精神の働きの中に現はれて来る、絶對の如來は、遠い雲の上に御座るのでない、安養世界と云ふやうな所から、ギシ／＼船でやつて来て、救世の船と云ふ助け船に乗せて、エイコラー／＼連れて行くと云ふのではない、或は今日の蒸汽船のやうなものでも、自動車や飛行機を持つて来て、連れて行くと云つてもいけない、何ほ早くても、そんな死んでから後の事では駄目である。無論死んでからの問題も大事だけれども、生きて居る間から、

本佛感應の活動が吾々の上に現はれて来なければならぬ、船守彌三郎が日蓮を助ける時に、自己の利害得失を忘れて、聖者日蓮を救ふと云ふ時には、一大決心を以て、假令地頭から酷い目に遇はうが、是つきり船に乗つて遠くの無人島に渡つて、日蓮聖人に給仕奉公をしようとも、この清き聖者を見捨て、行く譯に行かぬと云ふので、若しも事が面倒ならば船に日蓮聖人乗せて、漕いで／＼腕の續かん限りは、人の居らぬ所に行つてでも、御奉公しよう云ふ、この絶對の清き精神の底に、本佛が働いて居ることを、見なければならぬ。この仕事は、眞に人の爲にも、道の爲にも、國の爲にも、偉大なものだと感じた時に、バツと人間から斯う懸け離れたやうな元氣が満ちた時、この身に本佛が移りたまひしと、斯く感じた時には、非常な力を現はして来るものであります、是が即ち法華行者の心得である、生きた如來が今現に、吾々人類の活動の中に現はれて居られる、絶對は吾々の上に働く、本佛は吾々の心を宿として、働かになると云ふことを信するのが、即ち日蓮主義であります。聖人の御言葉を以て

證明すれば、

この法華經は信じ難ければ、佛、人の子となり、父母となりなどしてこそ、信ぜさせ給ふなれ。

本佛は親ともなり娘ともなり、どう云ふやうにでもなつて、その人を善道に導くのであるから、娘が善い事を教へて呉れる時には、唯だ「ナンこの娘は俺が産んだのだ」と言はないで、産んだは俺だけれども、その精神には本佛が宿つて、善い事を言ふのかと思へば、其處に自分の心が随つて行くやうになるのであります、誰でもその人間それ自身は詰らぬと思つても、それが善い事であつたならば、本佛の働きとして考へて見る事が、大變好いであらうと思ひます。

二四 本佛の體相

それから次には、佛の體相と云ふことであります、即ち佛の本體と妙相とはどう云ふものであるかと云ふに、佛の體は、前に言うたやうに擴がつてしまつたものと考へ

ては駄目である、佛はやはり具體的なものであり、具體的と云ふのは人間を教化する佛として、人間に似た相を有つて居られることである、併しそれは整うた姿であるから、三十二相八十種好と云つて、何とも言へない美しい美を備へて居る御相であります。所がそれを嫌ふ人があつて、佛はそんな相のあるものでないと云ふ、金剛般若經には、相を以て見るのは、魔見だと書いてあるけれども、それは浅い意味の所に、さう云ふ事を言ふのであつて、本當の教のある所、即ち法華經に行きますれば、彼の有名なる提婆品に於て、女が佛様の事を讚歎して、佛様の尊いのは、御智慧としては、一切の人々をして居る事を御覽になつて、善い事を導きなさるのであるが、御相は洵に美しい方で、三十二相を以て飾つて御座る所の御方であると申し上げた。

微妙の淨き法身 相を具すること三十二

この美と云ふことは又大切なことである。

二五 文明と美の感情

佛陀に對する感情(上)

人間が眞、即ち哲學的の眞理を大切に思ふ事も、善、即ち道德的の善事を大切に思ふことも、結構な事である、それと相並んで譲らぬものは美であります、人間の感情に於て清いと云ひ、美しいと云ひ、穢れが無いと云ふことが、非常に大事なことであり、之を誦らぬ事のやうに思つて居るのは、未だ人間の精神を研究せぬ、又人類の理想、世の文明と云ふものを、研究せない人の言ふことである、近頃は美術が大事であるとか、或は風景や名勝を保存せなければならぬと云ふ考が、文明の爲に必要である、大切であると云ふことを、認めて來て居るのであり、美術の品物としては、人間が造つたものもあらうけれども、一般の思想の問題としては、美を絶對の佛の上に於て、十分に考へ得ないのは、未だそれは思想が遅れて居るのである、新しい思想として研究すれば、どうしても吾等の渴仰を捧げて行くのは美であります、眞黒に垢で光つて居るやうな佛様では、難有いと思へない、何とも言へぬ色彩ある莊嚴な御相を見て、ア、綺麗だと思ふ所に、信仰の念も起るのであります、それを油煙で眞黒になつて眼

玉ばかりパチクリして居る、さうして眞黒が難有いナンと云ふのは、それは一の變態心理である、さう云ふものは一般の人間を導くに足らぬ、飽までも佛壇は美しく飾らねばならぬ、故に佛様は恰好の悪い者は佛になれぬどころではない、弟子にさへしなかつたのであります、顔が變てこな形であるとか、口が歪んで居るとか、人が見ても氣分の悪いやうな者は、人心を感化する所の宗教家となることを許しませぬ、何ほ善い事を言つても、化物のやうな面をして居つたならば駄目である、言ひ居る者の面つきがまづい爲に、教が聞く者の耳に入らない、であるから美と云ふものに、吾々の渴仰を捧げるのである、故に日蓮聖人は、この事を餘程能く謳つて居られるので、佛様はさう云ふ三十二相八十種好を具し、微妙の裝美しく、迦陵頻伽の御聲を以て、一切衆生を皆佛に成したまふ、その有様を譬ふるに、非常な美人の姿を舉げて、さうして佛様の美しい姿と結び付けて、吾々は即ち佛を渴仰せなければならぬ、と云ふことを説かれて居る、是は大事のことでありませぬ、佛とは何ぞ「乾屎橛」、乾屎橛と云ふのは、

佛陀に對する意識信仰(上)

乾からびた糞の概見たやうになつたものだ、そんな事を言つて豪がつて居るのは、萬有神的思想に於て言ふのであつて、今日學問が進んだ世の中に於ては、價値のないものである。何も知らぬから、佛様と云ふと木像ばかりと思ふ素人に向つては、面白いかも知れぬけれども、いろ／＼思想を研究したならば、さう云ふことは詰らぬ事である——吾々の理想は、この本佛の美が眞理と結び付き、善と結び付いて、吾々は益善善なる人となり、益々智慧のある人となり、益々美しい行ひをする美しい人となつて、益々光を放つやうになつて行かなければならぬので、それには身體の相も美しくなければならぬ、何ぼ佛様になつても、鼻が缺けて口が歪んで、目つちからで跛を引いて歩くやうになつては、サツバリ詰らない、どうしても完全な美を具することが大事であります、それを日蓮聖人は盛んに説かれた。

第參編 佛陀に對する意識信仰 (下)

我が壽命の長遠なるを説くを聞いて、深心に信解せば、則ち爲れ佛當に普聞彌山に在つて、大菩薩諸の摩訶衆の圍繞せると共に、説法するを見。又此の娑婆世界は其の地瑠璃にして坦然平正に闍浮檀金以て八道を界ひ寶樹行列し、諸臺樓觀皆悉く寶をもて成じて、其の菩薩衆成く其の中に處せるを見ん。若し能く是の如く觀すること有らん者は、當に知るべし、是を深信解の相と名く。
(分別功德品)

一 前編の概要

前編には佛陀に對する意識信仰といふことに就て、お話を致したのであります。其中に四つばかりの事を申したので、第一が三徳、佛に對しては三徳と云ふ意味を以て見なければならぬこと。それから第二は顯本、釋迦牟尼佛として現れし佛陀の本體、

佛陀に對する意識信仰(下)

其眞面目を開發して、佛陀の絶對價値を認めなければならぬ、釋迦教徒でありながら、釋迦の表面に現はれし事を段々縮めて、小さく見る、低く見る、而して釋迦を侮らんとするが如きは、誤まりたることである、吾々は飽までも、釋迦牟尼の表面に現はれし卓越したる光輝を見なければならぬ、況してや其内面に含まれたる佛陀の價値は、絶對無限であると云ふことも見なければならぬ、第三には應現、其絶對の佛陀は、有らゆる方面に身を現するものである、而して其處には、多數の尊敬すべき神佛と、この絶對の佛陀の間に、調和統一が行はれる、又この佛陀は、唯だ高い佛として現はるのみならず、人々の心の中にも現はれて、吾等を善導するものである、即ち絶對の大人格者は、吾々人類の間に生きて、日々働いて居るものであると云ふやうな意味が、應現として説示されて居るものである、殊に日蓮聖人は其點を活用せらるゝこと至れり盡せりであると云ふことを、御紹介して置いたのであり、第四には體相、其佛陀の本体とは如何なるものであるか、唯だ佛陀と云つても、それを形の無いもの、人

格の無いものにして見て行く、即ち宇宙に遍滿して居る所の、大生命であるとか、大精靈であると云ふやうなことは、さう云ふ風な言ひ方も、大變宜いやうに見えるけれども、それは未だ宗教の信仰を得ない人が言ふことであつて、眞に宗教の信仰を得、佛教徒たる信念を有する者は、其大生命が結晶して、さうして此偉大なる人格に現はれて居ると云ふことは、認めなければならぬと云ふことを、お話を致したのであります。

斯かる意味は非常に進歩した思想であります、西洋の宗教家、西洋の學問の思想に捉はれて居る者の、了解し得ない所である、全く法華經の特色であり、日蓮主義の絶對價値であると云ふやうな意味を、申し述べて終つたのであります。

併し佛に對する考へ方、又信心の仕方と云ふものは、それだけでは足りないからして、續論として、これよりは其後をお話するのであります。

二 本佛の智慧

佛階に對する意識信仰(下)

五、智慧、即ち其第五として佛様の智慧と云ふことをお話しやうと思ふ。佛様の智慧と云ふものは、どう云ふものであるかと云ふと、無論此佛敎を信する者は、佛様の智慧の圓滿にして、絶對なるものであることは確信するのである。今お話しする事は、佛敎徒が佛様に對して、どう考へるか云ふことをお話しして居るのであるから、佛敎を信じない者が、屁理窟を言つて居るやうな問題は、此場合には語る必要はないのである。佛様は人格を有つて、其心の中には、絶對の智慧が働いて居る、吾々には智慧が足らぬから、斯う云ふものだとして、此處にお話しすることが出来ない、又假りにお話し得ても、聽く方で直ぐ了解することが出来ぬ、併し佛様は、天地宇宙の眞實の事をお悟りになつて居る、實相眞如と言ふか、絶對眞理と言ふか、他の言葉を以て言へば、眞正なる哲學、眞正なる宗敎、眞正なる宇宙の本面目を、悟られた御智慧に於ては、少なくとも人類に生れた學者、宗敎家の考よりも、更に精確なる智慧を、吾々に示し得るものであると云ふことを信するのである、それが佛敎徒である。他に偉い方

もあらうが、釋迦の精神に光つた智慧は、即ち人類に現はれた總てに卓越して居つた智慧であつて、さうしてそれが今申すやうに、宇宙の眞實相を照すに於て絶對であると共に、下は人々の心を照し、人々の行を照し、其行の善と惡とを照し、其善と惡との赴く所の結果を照し、其赴く所の結果に於ては、苦みと樂みと墮落と向上がある、其苦みに對し、其墮落に對して、之を憐み之を救濟せんとする所に、智慧が働くと云ふことになつて行くのである。宇宙の眞理は斯う云ふものだと言つて考へるだけでは、本當の佛ではないのである、活ける人々の精神、即ち人の心と行と、其行の結果の赴く所を觀察して、而して之を如何に善導すべきか、上には絶對の眞理を悟り、下には衆生の精神行動を觀察して、而して之を如何に導くべきか、さうしてそれに適當なる感化を與へることに於て、少しも誤らない、愚者來れば愚者を導き、賢者來れば賢者を導き、何人をも之を濟度して、少しも誤らぬ所の、一切衆生を普く濟度し得る、圓滿なる智慧を有して居るものを、佛陀と稱するのであります。即ち佛敎徒は釋

迦牟尼に對して、佛陀の智慧を斯く認め其様に信するのである、お釋迦様の智慧は足らぬからして、何處ぞから借りてござるとか、大日如來に智慧の借用に行くとか云ふ風に、釋迦の智慧に於て缺陷ある如く認めるのは、眞の佛教徒ではないのである、それは釋迦を信すると云ふのではない、釋迦牟尼を疑ひ、釋迦牟尼を侮ることになるのであつて、絶對の信賴を捧げ、南無釋迦牟尼佛、歸依釋迦牟尼佛と云ふことに、ならなければならぬのである、佛敎を信じない人ならばいざ知らず、自ら佛教徒であると稱しながら、而も釋迦牟尼の智慧を疑ふ如きは、隨分矛盾であると謂はなければならぬ。

三 智慧兩分の謬見

所が佛教徒の思想にも、色々妙な事が現はれるのであつて、佛様を見るに、智慧だけの佛、慈悲だけの佛と云ふやうなことを言ひ出す、それからお經を區別して、智慧だけ説いたお經、慈悲だけ説いたお經と云ふやうなことを言ひ出す、是は頗る窮した者

が言ひ出したのである、吾々から觀れば、何とも言ひやうのない俗論であるけれども、併しさう云ふ思想はズツと以前から勢力もあり、又今尙其殘黨がある。法華經に對しては、始んど法華經は智慧のお經として一番良ひ、併し慈悲が現はれて居るお經ではない、法華經は智慧のお經である、是は智慧は説いてあるが、慈悲が足らぬ、斯う言ふのである。然らばどう云ふお經が、慈悲のお經であるかと云ふと、阿彌陀經が慈悲のお經の一番良ひものである、それであるから阿彌陀如來が、慈悲の佛の一番良ひのである、斯う云ふ事を言ふ、世の中にはそれで瞞されて居る人が、隨分多いのである、瞞されて居ると云ふよりも、何も知らぬものであるから、さうだと思つて居るのである。併しながら佛様を智慧の佛、慈悲の佛と、ボンと割つてしまつたならば、佛格と云ふものは壊れてしまふのである、人間であつても、賢いけれども親切がないと云へば、人格の缺けた者である、親切であるけれども智慧がないと云へば、是は馬鹿である、人間一人の人格で言つても、智慧があり意志があり感情があり、そこには

道德性と云ふものがなければならぬ、又物を分別する智慧がなければならぬ、唯だ道徳はあるけれども、智力の方から言へば何にもない、學問はあるけれども、少しも親切はないと云ふのでは、是は皆不具者で、少しも値打はない。一切衆生を濟度する所の佛様に、智慧の佛、慈悲の佛と云ふ、區別のあるべきものでない、慈悲はあるけれども馬鹿な佛、賢いけれども不親切な佛、智慧の佛と云ふことは、一方から言へば不親切の佛、慈悲の佛と云ふことは、一方から言へば薄馬鹿の佛と云ふことである、斯う云ふ事を言つて、智慧の佛としては法華經に現はれ、慈悲の佛としては阿彌陀經に現はれて居る、と云ふやうな考を以て分類し、若くは斯う信じて居る、是等は佛敎の研究の上に於ては誤つたる考へである。

佛陀格と云ふものは、智慧も絶對、慈悲も絶對、力用も絶對、總て絶對に達せんければ、佛様と言ふことは出来ない、親切が缺けて居つても佛ではない、智慧が缺けて居つても佛ではない、又考があつても、働の方に於て、手は完全であるが跛者である

とか、五體は揃つて居るが、中風で働けないと云ふのでは、佛ではない、佛と云ふ以上は完全でなければならぬ、一方は手が缺けて居る、一方は足が缺けて居る、手の缺けて居ると、足の缺けて居ると比べると、手の達者な方が役に立つ、斯ういうやうな風に、佛を考へるならば、それは佛陀を侮蔑するものである、斯の如き論を爲すものは、愚と云ふならば、尙ほ恕すべきであるが、愚と云ふよりも、寧ろ爲にする所あつて、左様な論を吐くので、是は一種の罪惡であります。

それ故に大涅槃經と云ふお經には、慈悲心が缺けて居るやうなことでは、佛の大智慧とは言へない、智慧が缺けて居るやうなことでは、佛の大慈悲とは云へないといふ。是は道徳上の研究でも、如何に親切があつても、智慧の缺けて居るやうなものは、道徳ではないと云ふことは、古い希臘の「アリストートル」の時代に於て、其問題が起つた、如何に親切であつても、一方に智慧が缺けて居つては、其親切が仇になる、子供を教養する上に於ても、唯だ親切ばかりでは、あまやかしてしまつて、後には悪い癖

がついて来る、物を分別するだけの智慧がなくして、唯だ親切ばかりであると、遂には人を賊する、是は古い時代に、既に相場が定まつて居る話である。それを智慧の佛、慈悲の佛、薄馬鹿の佛、不親切の佛と言つて、そこに差別を立てると云ふやうな、さう云ふ不當なる見解は、今日限り必要はない、左様な宗教は我が日本には、百害あつて寸功無きものである。

凡そ國家には、武力の戦、經濟の戦の前に、思想の戦がある、其思想の戦に於て破れたならば、其國家は必ずやられるのである、其思想の戦に應ずるには、道德の問題、宗教の問題、其國民の哲學的思想の根據を作る所の問題が、最も大切なのであります。さう云ふ智慧を馬鹿にする所の人々と云ふものは、日本の國家を危するものである、佛様を見るに、智慧の佛は吾々に必要はない、親切さへあれば宜しい、唯だ其親切と云ふ事のみを以て、宗教を押立てると云ふのは、非常に誤つて居る、だからして法華經に於ては、智慧の方面を説き、慈悲の方面を説く、佛陀に對する意識信仰は、唯だ

佛の一方面ばかりを見たのではない、前からも後からも、總てに於て圓滿なる如來を、見なければならぬのであります。

四 智慧具足の本佛(上)

そこで智慧に就ては、宇宙の實相を照し衆生を濟度する上に於て、總てに智慧が働くので法華經の上に於ては、方便品の初めから、智慧を讚歎してある、是が法華經の偉い所である。淨土教に智慧などは構はない、唯だ是は一婦人の爲に説いたお経であるから大したものではない、法華經は智慧を談じ、慈悲を談じ活動を談じ、絶大無限を發揮するのである。方便品の初めに佛の説かれたのは、智慧の問題である、「爾時世尊、從三昧、安詳而起、告舍利弗、諸佛智慧、甚深無量、釋迦牟尼佛は、諸佛の智慧は甚深無量なりと云ふ事を説いて居られる、諸佛は薄馬鹿だと云ふやうなことは、言つてゐないのであります、先づ佛の智慧の絶大なることを賞讃し、而して其智慧は、唯だ眞理を悟つたきりではないかぬ、それを應用する所の智慧でなければならぬ、即ち

佛陀に對する意識信仰(下)

『權實二智を歎す』で、『如來は方便知見波羅蜜、皆已に具足せり』、如來の知見と云ふのは、絶對の眞理を照す所の智慧、方便は、衆生を濟度する適切なる智慧、之を「權實二智を歎す」と云ふのであるが、唯だそれでは分らないから、其照した宇宙の境涯は、どう云ふものであるかと云ふと、「諸法の實相」であると、偉大なる眞理を説明せられた、汝等舍利弗——舍利弗は智慧第一と謂はれて居る、それが世界に一杯集まつて相談しても、佛の智慧は測ることは出来るものでないと示された。

此節は多數々と無暗に言ふが、多數と云ふことは、據らない場合に多數で決するのである、偉い者が居らぬ時には多數が宜いけれども、偉い者が出て来ると、多數なんかは何にもならない、同じやうな笹基が多數寄つても、初段とか二段とか云ふ者には、敵ふものではない、ヘッポコ笹基が多數して有りざりの智慧を搾つて掛つて来ても、此方は煙草を吸ひくやつて居つても、矢張基にならぬやうなものである、今は餘りに多數と云聲に迷つて居るが、是は政治の決議の方式手段として、あゝ云ふ説が

起つたので、高遠なる思想、道德、宗教等、總て一國の文明を開發すると云ふやうな大問題に就て、之を多數に依つて決せんとする程、愚なることはないのである、政治上の決議の方式、已むを得ざるに出でたる事を以て、高遠なる一國の思想、其一國の宗教、道德まで左右せんとするに至つては、危い哉岌々乎たりである。

茲に於てか釋迦は、智慧第一の舍利弗、其舍利弗が十人二十人、或は五十人寄つて相談しても無論分るまいが、併し大勢寄つて「假令世間に滿てらんもの、皆舍利弗の如くにして」一般の者が皆舍利弗のやうで、それが寄り集まつて「思を盡して共に度量すとも」多數が寄つて、佛様の智慧はどの位と相談して見ても「佛智を測ること能はず、正使十方に滿てらんもの、皆舍利弗の如く、及び餘の諸の弟子、亦十方の刹に滿てらんもの、思を盡して共に度量すとも、亦復知ること能はず」、舍利弗の如き智慧を有つて居る者、十方世界に一杯になつて、決議してやつて来ても、而も佛の智慧を知ることは出来ない、是は實に面白い。大偉人の智慧と云ふものは、低い者からは分

るものではない、相談したら分るかと云ふと、今も言ふやうに、幾ら相談しても役に立ちませぬ、へボが幾ら寄つても、少し出来る初段に、三日四目の連中が、三十人五人寄つて相談してやつても、初段の人一人に敵はない、戦争でもさうであらうと思ふ、戦略と云ふものは、澤山の人が寄つて、會議を開いて決議で定めて行くと云ふものではない、それに上達した者、最高の人が二人か三人で定めるものである、政治の決議の方式は多数でも宜いが、併し宗教や道徳になつては、今のやうに多数の考と云ふことは、私は宜しくないと思ふ。

それから尙ほ佛の説かれたのに、如來の智慧は諸法の實相を照すばかりでなく、種性體相を知ると云ふことがあります、此種性と云ふのは、前に申した通り、自分が色色善惡其他の種を蒔いて、それに依つて今日それ／＼の姿を得て居る、人間に生れるものもあり、畜生に生れるものもある、又同じ人間の中にも、それ／＼形が違つて現はれて居る、それが體相である。それ等の本體性質を推究めて見れば、佛性がある、

表面に於ては色を違つた所があるが、其本體には共通した或る尊い所のものを有つて居る、けれども實際の上により損つて、非常に淺ましい有様に落込んで居る、さうしてそこに因果關係のあることを説明せられて、佛は心配せられたのである、一時の迷の爲に己れを苦め、己れを永久の沈淪の淵に導くことを仕出來すのである、思へば思な話である、唯だ一時の感情の走るに委せたが爲に、永遠の苦みをするのである。佛様はさう云ふ過ちをさせたくない、一時は苦しいやうに見えるけれども、永遠の榮に上るやうにしたい、と云つて一一御心配下さるのであります。

五 智慧具足の本佛(下)

従つて慈悲には、直にそこに智慧が働かんければならぬ、親が子供を導いて行くに唯だ親が賢いばかりではいけない、子供を可愛がる精神が伴ふて、其子供は善く導かれるのである、又學校の先生でも、學者であると云ふだけではいかぬ、矢張其學生を愛して、縁あつて自分が此學校に來て、此學生を教育して居る以上は、どうぞ此學

生の前途に於て幸福のあるやうに、將來過ちを取らぬやうに、正しき人間になるやうにと云ふことを考へて、其親切なる精神が籠つて教へて行くならば、必ず善き感化を與へるのである、故に眞に考へ深き人の智慧は、必ずやそこに慈悲が働く、慈悲の伴はぬ智慧を有つて居る者は、本當の賢い人ではないのである、人間の本當の智慧と云ふものは、唯だ冷たい所の、三と四とを合せば七と云ふやうなことのみでは、それは本當の智慧ではない、人類の歴史に鑑みても、斯う云ふやうな事に依つて、或は人が苦しむ、或は人が迷ふのであるから、斯う云ふ工合にして、世を救はなければならぬと云ふ風に、智慧が働く、それには慈悲が伴ひ親切が伴ふのである、智慧と慈悲とを二分するとか、道徳と智識とを二分すると云ふのは、研究上の便法であつて、實際に於ては有り得べからざることである。お釋迦様の如きに至つては、智慧が働く時に、其智慧は衆生の心を照し、行を照し其結果を照し、従つて之を濟度せんとする慈悲が働いて居る、慈悲と智慧とが渾然として一つとなつて働く、暫く其智慧の方面を説い

て、宇宙の絶對を悟り、衆生の心を悟り、總てを悟つておゐるでなさる、何時も過ちのないものであると云ふことを申すのである。

尙ほ其智慧から説出されることは様々ある、佛教の廣大なる教義となり、佛教の哲學となつて、現はれて居るのであるが、どれだけの御智慧かと云ふことは、今一言にして申すことは、出來得ないのである、又それ程まで言ふ必要もないのである、唯だ佛を認むるには、宏大なる智慧を有つて居る佛様と云ふことを、矢張第一にしなければならぬのである、さうしてそれが有らぬ方面に、影響を齎すものであると云ふことを了解すれば宜しいのである。

六 本佛の慈悲

六、慈悲、續いては慈悲であります。前申す通りに佛の一個の人格には、宏大なる慈悲が働くものである、其慈悲はどう云ふ工合に働くかと、云へば、此世の中の有ゆるもの、上に働く、其事は一一お經などを擧げて證據に立てるまでもないことで、釋

佛陀に對する意識信仰下)

迦が世に出られて爲された所の仕事の總てが、衆生濟度である、自分の名譽の爲に、或は自分の利益の爲に働いたのではない、自分の身は淨飯大王の子として、悉達太子として生れた釋迦牟尼の境涯は、幸福なるものであつて、別段何も努力する必要はない、然るに年二十九にして、太子生活の幸福を棄て、さうして單身山に入つて修行を積んだ、終に豁然として大悟徹底した曉から、拘尸那城の涅槃に至るまで、衆生濟度の爲に働いた所の人であります。それが唯だ普通の親切であつたならば、三千年後に傳はる偉大なる感化は興らなかつたであらう、釋迦教を信する位の人、進歩した思想を有たなければならぬ、今日の世の中に於ては、慈悲のみを尊敬して、智慧を蔑視するやうな宗教は、其存在を許さないものである、であるから此釋迦牟尼が與へたる慈悲と云ふものは、如何にも徹底的のものであります。

最初太子が山の中に於て修行して居られた時分、お父さんの方から使が來た、烏陀夷と云ふのは悉達太子の友達で仲が善かつた、其烏陀夷が使に來て、どうか家へ戻る

やうに、今迄太子として生活して居つたものが、山の中に入つて寝る所もなく、蛇が來て齧すとか、蛇が來て食ひ付くと云ふやうな事があつては、寔にどうも氣の毒だ、それに國には大變な事が起つて、今貴方が歸つて呉れぬと、國家は危ないと云ふやうな事を言つて、悉達太子の心を動かさんと試みた。其時に悉達太子は、我が今やつて居る事柄は、非常に遠大なる希望を有つて、絶對の悟りを得やうとして居るのである、實は菩提の方から使が來るかと思つて待つて居つたに、迷ひの方から使が來るとは豫想外のことだ、自分は必ず菩提を成就する積りであるけれども、身體が堪へずして遂に此肉體は倒れることがないとも言へない、其場合にもうお前が連れて歸らうと思へば、それは自由である、併し俺の息のある間は、お前方の言ふことはきかぬ、死んで骨となつたら持つて行け、併し骨となつて歸つても、此悉達太子の骨は、たゞの骨とは違ふぞ、一切衆生を濟度せんとする人の遺骸で、光を放つものであると云ふことを、城内の人民に告げろ、と言つて居らるる。是は未だ悟らない時である、山に入つ

た時に既にさうである、果せる哉太子は遂に成道せられたのである、俺が死んだらも前等が擔いで歸らうと自由である、併し此骨はたゞの骨でないぞと言つて居る、何も骨が難有いのではないけれども、そこに非常に立派なる精神が輝いて居るのである。

七 釋尊慈悲の事蹟

斯の如くにして釋迦は、五十年の間間斷なく法を説いた、其親切と云ふものは非常なものである、釋迦自ら大涅槃經に於て、自分の親切の深いこと、力のあることを語りました。其一餉を申して見ますと、鶯掘摩と云ふ非常な悪人があつて、腹を立てて百人斬りを始めた、無暗に人を斬つて、九十九人まで人を斬つて、もう一人で百人の願が成就すると云ふ時になつて、鶯掘摩のお母さんは、忤が今朝出たきりで飯を食ひにも來ない、嗚腹が空つたらうと案じて、辨當を拵へて息子の所へ持つて行つた。鶯掘摩は百人斬りの惡心願を立て、九十九人までは斬つたが、もう一人其日の晝までに斬らなければならぬが、少しも人が通らない、時計を見ると、最早十二時に近づ

かんとして居る、誰か人が通らぬかと待構へて居ると、そこへお母さんが忤を案じて辨當を持つて來た、鶯掘摩は、母ではあるけれども之を斬れば、百人になるからと云ふので、遂に之を斬らうと決心した。其時にお釋迦様は、鶯掘摩が母を斬れば其罪業の爲に地獄に墮つるであらう、母を斬れば永劫の罪を犯すものである、どうしても是は助けてやらなければならぬと思つて、神通の力を以て、今や斬らんとする鶯掘摩と其母との間に飛込んだ、さうして斬らんと焦慮る鶯掘摩に向つて、「さアお前は母を許して佛を斬れ」と言つた。悦んで鶯掘摩は佛に斬り掛つた、所がなか／＼斬れない、佛様は少し動かれる、それから、「止まれ止まれ」と鶯掘摩は大きな聲で呶鳴つた。「止まれと言はないで、お前が止まれば宜い、我の方はバタ／＼しない、汝止まらざるが故に近づくことが出来ない、近づかうと思へば汝止まれ」と言はれたが、驅けて行つても斬ることが出来ない、「其譯を教へて呉れ」と云つた。「教へて呉れと言ふには、汝は我が弟子になるのか、譯を聞きなければ頭を下げなければならぬ、弟子になるなら、

刀を下に置き、段々やられてとうとう佛様の弟子になつた。するといきなり頭をクリクリと剃られてしまつた、どうすることも出来ないやうに袈裟を着せてしまつた、是が一つの手段であつた。斯の如くにして極悪なる鴛掘摩、母までも斬らうと云ふ惡心に満ちたる鴛掘摩は救はれた、是は皆釋迦の親切であります、親切と及びそれに適當なる智慧、即ちそれに應じたる所の手段方法が伴ふて居たのである。それから又子供を亡つて、氣狂になつて駆けつり廻つて居つた橋戸迦と云ふ子煩悩の女があつた、それを釋迦様は救はれた、どうして救つたかと云ふと、お釋迦様は慈念を籠めて其女の前に行かれた、すると彼女には我が愛子と見えて、「オー可愛い子供はこゝに生きてゐて呉れたか」と言つて抱き付いた、お釋迦様は黙つて抱かれて居られた、嬉しいと思ふと、精神は舊に復して氣狂が治つてしまつた、見ると佛様であるから、驚いて退いて禮拜した、狂亂の精神は直に其時に治つてしまつた。佛の親切は實に至れり盡せりであります。斯の如くにお釋迦様は、人生の苦痛も、實際の生活萬般を導いて下さる。

のであります。地藏様のやうに、賽の河原に待つて居つて、子供が死んだら此方へ寄せせと云ふやうなものではない、様々なる人生の苦痛、罪惡、生活の全部を濟うて下さる所の佛様である、是が皆釋尊の慈悲の一波動であります。

八 本佛實在の感應(上)

さうして段々進んで考へると、お釋迦様は涅槃をせられて幾千年を経た今も、尙ほ優しい精神を以て茲に實在せらるゝ譯である、それ故に之を法華經には、「毎に自ら是の念を作す」と言つてあり、是は日蓮主義者の忘るべからざる所であり、『毎自作是念』と云ふ所になると、お經の調子が變つて、良い聲になつて來ます。昔梅尾の明惠上人と云ふのがあつた、北條泰時は、此明惠上人に法を聞いたと云ふことである、又茶を支那より持ち歸つて我國に植ゑた人である、此明惠上人が、毎自作是念と云ふ所へ來ると、グツと詰つて讀めない、佛様は毎に自ら是の念を作す、今もどうぞして救はうと、我が頭上に輝いて居らるる、此方は寢て居つても、佛様は夜でも晝でも救

ふてやらうと思つて居られる、それは實に難有(あた)ることである、斯く思ふて『每自作是念』と云ふ所になると、明惠上人は讀めなくなつた、涙のみ出で、聲が出なかつたと云ふことである、是は明惠上人が泰時に話したことよりも、茶を持つて來たことよりも偉い、千載の下に傳ふべき話であらうと思ふ。故に向ふに阿彌陀様とか帝釋とかを對手として、其前に每自作是念と讀んだのでは、それは俺の方に關係はないと言はれる、又文殊菩薩の前でやれば、さう云ふ事を言つて呉れてはどうも困る、それは本佛釋迦如來の大慈悲であるから、其御經文は向ふの方へ持つて行つて呉れと言はれるに違ひない。そこで『毎に自らは念を作す、何を以てか衆生をして、無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん』と、釋迦牟尼佛は、どうしても之を濟ふが爲には、身を現じて實行の範を示し、萬事萬般の上に於て、佛陀には斯の如き智慧あり、斯の如き慈悲あり、又斯の如く完全なる人格を有つて居ると云ふことの、範を示さなければならぬ、即ち身を現じて法を説くと云ふことになる、見佛聞法と云ふものが、それ

である、釋迦の涅槃せられた後にも、尙ほ如來の教法が遺つてお經と成り、如來のお姿は佛像と成り、そこに實在を信することが出来る。

九 本佛實在の感應(下)

さう云ふやうに親切なことは、唯だ一時ではない永遠である、今日も尙ほ其の慈悲が被さつて居る、本佛釋尊はこの法華經等の諸經に托して、さうしてその教が傳はつて來て居る、其根本を言へば、皆釋尊の慈悲智慧の結晶より來つたものである。道德宗教の如きは一の根本を置いて、根本に推功歸本すると云ふことが大事である、茲に軍人があつて戰場に出て戦に勝つた、それは忠勇なる軍人の功である、其忠勇なる軍人の精神は何處から出たかと云ふと、日本の國體である、皇室の稜威に依つて、軍人の精神を鞭撻したのである、實際戰場に功を現はしたのは軍人であるが、推功歸本すれば、陛下の稜威に依つて戦に勝つたと云ふことを言ひ得るのである、それを戦に勝つたのは軍人で、天子様は皇居の中にござつたのであると云ふやうな事を言つたなら

ば、其時には日本の思想と云ふものは紊れてしまふのである。観音様の働きたる文殊様の働きたる、日蓮聖人の働きたる、之を推功歸本すれば、本佛釋迦牟尼佛の御威徳と言はなければならぬ、それが日蓮主義の解釋である、事々物々に本佛釋尊の慈悲を直感する、そこに活きたる所の日蓮主義が輝いて居るのである、本佛と懸離れて分立してしまつて、推功歸本すると云ふ觀念が無ければ、それは斷じて日蓮主義ではない、其意味を了解したものは日蓮主義者であり、了解し得ざるものは非日蓮主義者である、日蓮主義者は、宗教の上に於て道徳の上に於て、この偉大なる思想を養成し感化することに從來するのである、分らぬ者を分らぬ儘にして置くのは、日蓮主義ではない、了解せざる者に了解を與へ、そこに偉大なる宗教の信仰を與へる、それが日蓮主義の實行である。

一〇 本佛の功德

七、功德、次には功德と云ふことであります。功德と云ふのは、佛様の積まれた徳

のことである、佛は前に申すが如くに、いつもかも慈悲と智慧で働かして、さうして衆生を濟度して居らるゝが故に、其積み重ねられて居る徳と云ふものは、殖て行くのである、さうして佛は暫くも其善い仕事を止められないので、壽量品に説いてあるが如くに『所作の佛事』佛の作すべき佛らしい仕事と云ふものは、『未だ曾て暫くも廢せず』少しも止めたことはないのである、佛の立派な仕事は、途中で休まれたと云ふこととはない。佛様の功德と云ふものは、日々に増加して庫に一杯に入つて居る、其功德の宏大なることは、法華經の信解品に、長者に譬へて、『其諸の倉庫に悉く皆盈溢せり』澤山の倉に一杯満ちて居ると説いてある、どの位の功德か推測することも出来ないが、其功德と云ふものは何處に收まつて行くかと云ふと、之を法華經の方では、此功德をば妙法蓮華經の五字に移した、移すと言つても入れきりではない、誰でも之を貫ふことが出来る。併し之を身體に付けて置くことが出来ても何にもならない、御符や色々な御守の如きものを、身體に縛り付けて置いても駄目である、柿の木蜜柑の木に

肥料をやらうと云ふのに、根にやらすして木に肥料を掛けてやつても何にもならない、身體中にお經を書いて貰つて、其中に入つて居つた所が何にもならない、判を押した襦袢を着て居つても何にもならない、毛孔から脂が滲込むか知らぬが、それでは何にもならない、精神を通して其心の底に滲込むのでなければならぬ。之を纏めれば妙法蓮華經となり、その功德が精神に滲込んで行くのである、基督教では胸に十字を組むが、一番良いのは、聲朗かに唱へることで、これが人類感化の最高なるものである、此妙法蓮華經と聲朗かに唱へるのが、宗教の模範のことである、其中に偉大なる佛様の慈悲、智慧、功德と云ふものは、籠つて居ると確信するのが、日蓮主義者である。故に妙法蓮華經と唱へる所に、佛様と云ふ考がなかつたならば、中味が空つぽになつて来る、そこを能く考へなければならぬ、字が難有い、鬚があるから難有いと云ふやうなことを云ふならば、それは南無妙法蓮華經に限らない、地藏尊と云ふ字でも跳ねられる、さうすれば同じことである、之も一の結構な話であるけれどもさう云ふ

ものではない、此妙法蓮華經の五字を唱へる中に、本佛の功德が含まれて居るのである。

一一 本佛の力用

八、力用、佛教で慈悲と言へば、智慧を有たない慈悲は語らない、功德と言へば、智慧と慈悲を取つては功德はない、佛の力と言へば、功德と慈悲と智慧を取つては力はないのである。譯の分らぬ所から力が出て来ない、人間の力と云ふものは、智慧と慈悲と活動した所の經驗とが、力になつて来るのである、故に釋迦の用ゐられた力と云ふものは、非常なものであつて、神通の力と謂つて居る、人間の力を超越した宏大な力が現はれて来るのである、而して其宏大なる力を妙法蓮華經の中に籠めて、日蓮聖人は斯う言はれた、『釋尊の因行 果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す』、釋尊の因行果徳、此二つが妙法蓮華經の五字に具足するものである、口で唱へれば一言であり、字で書けば五字である、恰度四遍か五遍一と息で唱へられる、其中に釋尊の因行

果徳の功徳が入つて居る、故に「此五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り與へたまふ」自然に其功徳を譲り與へられるのである、そこに簡單なる宗教がある、時に擴げれば宏大なる意味になるけれども、纏めれば妙法蓮華經、そこに尊い佛様の功徳を譲り受けることが出来る、其處に現在未來に對する一切の希望を満し得る譯なのである。

最初から申した通りに、佛様には三徳があり、又其本體を顯本すれば絶對の如來であり、更に又有ゆる方面に應現して、人の心の中にも働いて總ての善を導かれる所の方である、さうして又其體相は、眞善美を結晶した所の絶對である、智慧、慈悲、功徳、其完全なるものが、一の佛様である。吾々釋迦教を奉じ、釋尊の總てに信仰を立つるものが、釋迦如來を捨て、地藏様に行き、釋迦如來を捨て、阿彌陀如來に赴くと云ふことは、甚だボンヤリした話である、吾人佛教徒は、此大切なる事をボンヤリして居ると云ふことでは、是が國家の思想に移つた時には、どうするかと叫んだのが、

日蓮聖人である。佛教徒が絶對に信頼して居るべき所に、ボンヤリして居つたと云ふのは、一の罪惡である、お父さんお母さんのことを、ボンヤリして居りましたと云ふ言草はない、是は宗旨宗派の議論ではない、物の條理は同じである、一切の事柄は、詰り家庭の道徳も、社會を導く所の道徳も、國家を進歩せしむる道徳も、天地を貫く所の道徳も、一つである。日本の家庭は兄弟が、二人あつても三人あつても、又下女下男があつても、總ては其族長に依つて決せらるゝものである、之を多數決に依つて定めたならどうなる、毎朝味噌汁で食べて居つたものが、朝から刺身の一皿位は宜からう、夜寝るのも十時は遅いから八時にしやう、朝も早くてはいけぬから、八時九時或は十時位までも寝てゐやうと云ふやうなことが、多數決に依つて定められる、斯う云ふことが家庭に行はれたらどうします、日本の家庭は、族長主義に依つて組立てられ、一切が族長に依つて支配されるとすれば、社會も亦さうでなければならぬ。所が西洋の家庭に於ては、さう云ふことになつて居らない、親の權利も自身の息子には及

ばない、夫婦が出来れば親と別居してしまつて、決して一緒には居らない、やつて來ても家賃を拂はなければ泊めないと云ふことになる。日本はと云ふと、家族主義を以て立つて居る、此精神を社會に及ぼし、國家に及ぼし宇宙に及ぼすのである、故に宗教に於ても、家庭と一貫したる主義を執らなければならぬ、是が日蓮主義である。そこが日蓮主義の偉い所である、道德の方では斯うだが、宗教の方では別だと云ふのはいけない、故に佛様に就ては、佛敎に諸宗ありと雖も、日蓮聖人の解釋したやうな意味に於て、佛様を了解して居るものは、他にはないのである。

一二 華嚴宗の佛身觀

華嚴宗に於ては、お釋迦様を大きく見やうとして、大きいお釋迦様、小さいお釋迦様と考へた、一方に小さいお釋迦様があつて、別に盧舍那佛と云ふものがあるやうに考へた、此盧舍那佛と云ふものと、釋迦と云ふものとの關係が、分らなくなつてしまつた、段々調べて見ると一つのものであるけれども、華嚴宗の方では、大佛様と云ふものは、お釋迦様とは別ものゝやうに考へて行く、法華經は釋迦が説いたのである、華嚴經に盧舍那佛が説いたのであると、斯う云ふやうな醉つ拂ひ見たやうなことを云ひ出した、さうすると又、小さな釋迦が説いた法華經は大きな盧舍那佛の説いたお經には及びも付かぬと云ふやうなことを言ふに至る。

一三 眞言宗の佛身觀

弘法大師も随分誤つた考を有つて居つた、あの人は賢いのが爲に色々なことをやつた、大日如來の方が偉いと云ふやうなことを言つて居る、それは何處に居らるゝ佛だと云ふと、それは天に在る佛、天と云ふと何處だと、段々やつて行くと、答辯が巧く付かないから遁げ歩いて、終には地水火風空と言つて、法界に遍滿する所のもの、即ち一切を含んで居る所のもの、遍一切處と云ふものが、毘盧舍那佛であると言つて居る、山でも河でも皆大日如來である、風が吹いても雨が降つても、皆大日如來の說法である、お多福が小便をすればザア〜と音がする、それも大日如來の說法である、

終にはお多福の小便の音の方が、釋迦如來が慈悲と智慧とを以て熱誠籠めた所の法華經よりも、尙ほ價値のあるものだと言ふことになる、お釋迦様の智慧と慈悲との結晶である法華經と比較して、お多福の小便の音の方が尊いと言ふに至つては、迷ひも深い哉である。

一四 淨土宗の佛身觀

それから淨土宗と云ふものが出て、法然上人は、釋迦は偉いけれども、吾々は猫のやうなものである、其猫のやうな人間を相手にして、黄金のやうな説法をしても適當せぬ、寧ろ鱗の頭の方が宜しいと云ふ。日蓮聖人はさう云ふ思想の混亂、即ち似て非なるものを誡めた、霜を履んで堅氷到るで、其解釋の如何に依つては、終には日本の國體に違ふ説明を試るやうにもなる、故に日蓮主義は、凜然として名分を正し大義を明かにするのである。

一五 經典精研の希望

尙ほ諸君は、華嚴經に就て調べる機會があり、又大日經に就て調べる機會があり、したならば、此日蓮の主張を照して見られたい、今申すやうな誤りと云ふものは、明白に分るのである、此事に就ては私は一切教の經典に就て一一に證明をする爲に努力して居る、唯だ分り易いやうに言ふから、雜駁な語を使ひますが、此私の思想の根柢には、確實なる證據があつて之を語つて居るのである、徒らに弘法大師等の悪口を言はふとする陋劣なる心情を有して居るのではない、確乎たる主義、整然たる思想を以て、彼等の誤れる所を批判するのであります。

斯くして諸君は、日蓮聖人の教の如く、本佛釋尊の尊ひ意味合を、遺憾なく了解して、さうして益々本佛釋迦牟尼世尊を渴仰し信奉せられんことを、切に希望するのであります。

第四編 人身に關する意識信念

本覺の窟りを以て我が心性を刺せば、生すべき初めも無し、故に死すべき終りも無し、既に生死を離るゝ心法にあらざや。劫火にも焼けず、水災にも朽ちず、劍刀にも切られず、弓箭にも射られず、芥子の中に入れても芥子も廣からず、心法も縮まらず、虚空の中に満つれども虚空も廣からず、心法も狭からず。一代聖教は此の事を説くなり、此れを八萬四千の法藏と云ふ。是れ皆悉く一人身中の法門にてあるなり、然れば八萬四千の法藏は、我が身一人の日記文書なり。

(總勘文鈔)

一 人身觀の必要

本編に於てお話しすることは「人身に關する意識信念」と云ふ事で、即ち日蓮主義は人間を如何に見るか、日蓮主義は如何なる信念に心を据付けるか、と云ふことを明か

にしなければならぬのであります。前編には佛に就てお話をしましたが、こゝには人間に就てお話をするので、尙ほ宇宙に就てのお話も附加へて置かうと思ふ。

一體人間の事柄は最も大切であつて、自分自身を了解しなかつたならば、物事を正當に判断することは出来ないのである、物事を判断するには、標準もあるけれども、自分の考が定まらなければ、如何なる事を判断しても、過たずに正當なる判断を下すことは出来ないのである。所で人間は御同様斯う云ふ風な者であるが、この身體が何も判断するのではない、心と云ふものが判断するのである、人間から心を取去つてしまへば何にも分らぬ、人間は心があつて生きて居るのである。

二 人心の不可思議

さてその心と云ふものが何であるかと云ふと、中々分らない、歌にもある通り、心にも及ばぬものは何かあると

心に問へば心なりけり

であつて、洵に不思議なものであるが、是が非常に大切なので、人間は寧ろ心である
 と云つても宜い、人間の心が一切を判断するのであつて、一切の物は人間の心を通し
 て存在するのである。であるから一切の問題は人間を通して定まるのであつて、總て
 の文明を組立て、居るのもやはり心である。その位大いなる價値のある心であるけれ
 ども、その心に問へば、やはり心と云ふものは何だか分らぬと答へる、例へば此處に
 コツプがあり白墨がある、是を見て「是はコツプである」「是は白墨である」と云ふこ
 とを知るのは、何であるかと云うと、心があつて之に答へるのである、之に答へるも
 のは心であるけれども、その答へる心は何であるかと云ふことを、その心に問ふて見
 れば、やはり分らない、さう云ふ意味を歌つたものが、今の歌であります。諸君も御
 承知でありませうが、彼の井上圓了先生は、妖怪博士と言はれる位、有ゆる化物の研
 究をやつた方でありますが、先生が言はれるのに、人間より外のものは、如何なる面
 倒な化物でも分らぬものは殆んど無い、けれどもどうしても分り悪い妖怪は、即ち人

間であると言つて居られる、大抵妖怪の正體は人間であつて、人間の工夫した妖怪と
 云ふものは、ちよつと他の者が化けた妖怪より、分り悪いと云ふ。そうして見ると人
 間と云ふものは、一方には妖怪の心を有つて居るし、又一方には聖人君子ともなる、
 立派な心を有つて居るので、斯の如く人間の心には高低がある。

三 人心の研究と新文明

西洋の近世文明を開いた思想は、何であるかと云ふことに就て、今日の學者の一致
 して居る點は、「デカルト」の學說であると云ふことでありますが、この「デカルト」
 と云ふ人は、從來の學說を一切擲うつてしまつて、一切を疑ひと云ふことを以て撥ね
 つけてしまつた。すべて何事でも疑へば、必ず疑はれるもので、物の有るとか無いと
 か云ふことは、すべて人の感覺知識——即ち眼で見たり、手で觸つたりする事から來
 るものであるから、一つの物を有とも見られれば、無とも論ぜられるのである、例へ
 ば觸覺が麻痺して居つたならば、有ると思つた物も、その爲に無いと感ぜられる場合

もある、今までの習慣上素人が考へて居るものは、何でも疑へば疑ひ得られるものであると云ふのであります。さうして「デカルト」はその又疑ひの心を更に疑へば、残るものはやはり一つの疑である、さうしてその疑ひとは是れ即ち心であると言つて居る。さうして見ると、人間の總ては、又この疑ひに依つて組立て、居るものであるとも言へる、是が今日の有ゆる科學の生じた源であります、斯の如く如何に物を疑つて、之を破壊し盡しても、やはり心と云ふものだけは、最後に残るのである。故に人間の心を解釋すると云ふことは、非常に難かしいので、他の科學——即ち天文とか地理とかと云ふ學問の研究は、一つ／＼研究するに従つて、其ものが明かになつて來るのであるから、洵に研究はし易いのであるが、心の研究は實に難かしいのであります。今日の多くの學問は所謂物質科學と云ふものから成立つて居りますが、又精神科學と云ふものがある、即ち精神を研究する學問——心理學と云ふやうな學問は、心の研究をするやうであるけれども、實はその心が働いて而して後の事を研究するのであ

るから、詰り心の現象の學問であつて、心の本體はやはり分らないのである。故に心の問題と云ふものは、どうしても哲學に入らなければならぬとせられて居る、即ち精神に關する總ての問題は、哲學に入らなければ分らないとなつて居るにも拘はらず、今日日本の多くの者は、この哲學なるものを知らない、他の物質科學のみに依つて、すべてが判断出來ると思つて居る。

四 人心の罪惡性

斯う云ふやうに心と云ふものは、分らないものであつて、その人間の心が現はれたとも云ふべき、人間の歴史と云ふものを段々尋ねて見ると、實に殘酷な事も數多くある。或は山の中で道に迷うて、食ふ物は無し泊る所は無し、飢餓と疲勞の爲に、將に山中に餓死せんとして居る所を、漸く獵夫の爺さんに、助けられて命を繋ぎ止めて、「實にあなたは私の命の恩人でございます」と云つて喜んだ者が、忽ちにしてその爺さんの小金を溜めて居るのを見て惡心を起し、到頭爺さんを打殺してしまつて、その

金を持つて遁げると云ふやうな、實に禽獸にも劣るやうな残酷な事をする人間もある。さうかと思つたと又一方には、自分の命を捨てしも、君の爲め、親の爲め、夫の爲め、家の爲め等に、一身を捧げて盡すと云ふ者もある。斯う云ふことは皆人の心の産物であつて、この悪人もこの善人も、みな元は同じ心を有つて居る人間の所行であり、而して斯う云ふやうな善い事も悪い事も、皆一人の心に具へて居るのである。だから此の心の振向けやう一つに依つて、人の善悪が分れて來るのであつて、吾々お互も場合に依れば、人を殺すやうな大悪心を起さないと限らない。であるから一人一人の研究と云ふものは、全人類の研究と同じ價値を有するのである。

五 自然主義の誤解

さう云ふやうな細かい點は先づ措いて、人の心の上に就て大切なる點を摘んで申せば、第一に今の世の中の人の誤解して居ることは、「誤れる自由主義」と云ふことであり、元來この自由主義と云ふものは、西洋に於て政治上の壓制に對抗する爲に、

人民が自由を主張したものである、所が段々その自由、所謂自由主義と云ふものが、政治と道徳と混線してしまつて、道徳上に於ても、自由を叫ぶやうになつたのである。即ち人間は自由である、道徳も規則も要らない、自分の心の儘にやれば宜い、それが吾々の自由である、偽らざる心である、自分の心にもない事を飾るのは、偽れる心であるナンと言ふ。所が人間の心と云ふものが、善にのみ向ふものならばそれでも宜いけれども、中々さうばかりは向はないものである、それは孔子と云ふやうな聖人になれば、「心の欲する所に従つて矩を踰えず」と言つたけれども、吾々凡夫は中々さうは行かない。そこで誤れる自由主義、誤れる自然主義に感溺して居る連中は、親の勧めた結婚を嫌つて、自分の好いた者同志で我儘な結婚をする爲に、結婚と言はずして共同生活ナンと言つて居る、さうして双方の愛のある間だけ同棲をするが、嫌になつたら何時でも分れると云ふやうな、禽獸に等しいやうな事をやつて、嫌になつても夫婦と云ふやうな形式に捉はれて、尙ほ一緒に居るのは偽れる心である、吾々の主義は偽ら

ざる心であるなどと言つて居る。その外働く事にしてもさうであつて、少し働いて多くの報酬を得やうとするのが、各々の欲望であるから、五十銭の仕事は五十銭しか働かない、それ以上餘分に働くのは偽れる心だ、ナンと言ふ、何でも人間の心の儘にやるのが偽らざる心だ。さうして又偽らざる精神と云ふものは、人の事など考へるものでない、自分の爲ばかり考へるのが偽らざる精神である、人に親切なやうな事を言ふのは、うまく騙して結局自分の利益を計る爲である、演説や説教するのでも、坊主がさう云ふ事をしなければ、食へぬから親切にやるけれども、それは親切に説教して自分が飯を食ふ、やはり自分の爲である、坊主があんな事をやるのは、實に厄介な商賣を始めて居るのである。斯う云ふ工合に物を觀察すれば、軍人が國に盡すと云ふのも、月給や勤章貰ふ爲で、やつぱり自分の爲だ、如何なる人でも自分の低い了見を以て推測するのであるから、そこで人間は利己的動物と云ふことは、何にも遠慮はない、自分の事を考へるからと云つて、そんなにペコペコする事はない、偽らざる所は皆自分の

爲である、親を有難いと云ふのは、親が世話して呉れる間は難有いけれども、一人立になると親は邪魔になる、偽らざる精神は親は邪魔者だ、さう云ふ所から自然主義と云ふやうな事を唱へるのである。或は其處まで激しく言はないでも、人間に修養を與へずして、其の儘で宜しいと云ふ事は、非常に間違つた事である。所が日本人の大多数は——私は敢て自然主義とは唱へない、又そんなやけくその事を考へて居るとは言はぬけれども、事實に於ては何等修養を積まない、だから詰り黙つて居る所の無言の自然主義だ、「自然主義になりませう」と云ふやうな事は、言はないけれども、本當の初心の自然主義で、誤れる自然主義を實行して居る身讀主義だ、身を以てやつて居る自然主義者である、であるから事實非常に頽廢したる風になりて來るのであります。

六 人心修養の必要

是は如何にも残念な事で、今日の國家に横はつて居る大問題の一として、國民が自覚して、人間は修養を積まない限りには、洵に淺ましい者になつて行くと云ふこと

を、汗を流す程に考へて、即ち慚愧感奮することである。鏡が溜つた、學問したと云へば、己れの精神には何等修養を積んでゐないでも、一人前の人間だと思ふ、この了見が間違つて居る、學問はあり身分はあつても、精神的修養から言つたならば、實に耻かしいものであると、國民が慚愧感奮したならば、初めて日本の發達は健全になつて来る。偽らずと云うと、ちよつと立派に思ふけれども、是は野生的であるからあらぐれ石見たやうなものである、玉になる礫石ではあるけれども、磨かなければやはりトゲ／＼であつて、光も何も無い。人間の心に修養を興へない、善き方面を開いてこないと云ふことになつたならば、泥池見たやうなものである、或は東京の淺草邊の鐵漿溝と同じものである、臭い匂がして、洵に見ても氣分が悪いやうな、墨色に濁つた溝である、人の心も修養を積まなければその通りである、それは生れたばかりの子供の間は宜しいが、段々年を取るに従つて、いろ／＼の欲望を生じ、誘惑を生じて来るから三十、四十になつて居る親爺さん、おかみさんと云ふ者は、おはぐる溝がドロドロ

口に濁つて居る、臭氣紛々たるものである、修養を加へなければ人間は禽獸より悪いと思ふ、それは狎ころでも猫でも可愛らしいものである、人間の修養を加へない奴は逆も狎ころだけに行かない、餘程恐ろしいものである、先づ動物に譬ふれば、狼か虎か、毒蛇と云ふから蝮か、百足か、と云ふやうなものになつてしまふ、であるからどうしても修養を大事にしなければならぬ。

七 誤解せる人身觀

所が修養しても駄目だと云ふ説がある、是は又厄介な話であるが、生れたこの儘で宜いと云ふ極端な自然主義があるかと思へば、人間と云ふものは如何に骨折つても、ものにならないと云ふ議論が一方にある。それは人間と云ふ者は如何に教育しやうが修養を積まうが、感化しやうが駄目だ、殊に世が末法となつて、下根下機となり、罪惡の衆生となつた今日は、如何ともし難い、是はおはぐる溝の澄まぬのと同じで、手の着けやうがない、諦めたが勝だと云ふやうに、人を悲觀する、少しはやり掛けたが

迎も駄目だ、善い考を起して見た所が、直ぐ悪い考が起つて打倒す、世の中は悪い奴が多いから、自分が善い考を通さうと思つても、通せないやうに世の中は出来て居る。商人なら商人が正しく商賣しやうと思つても、世の中の奴は皆んな客を騙してやつて居る。さうして正しい商人を色々批難したり、中傷したりする、そこで折角正しくやり始めた商人も、忌々しいから己もやつてやれ、向ふが向ふなら、此方も此方だと云ふやうな事になつてしまふ。大體今の世に善を爲せと云ふことは無理である、是は諦めたが宜しい、世の中は悪い事をするに極つたものだ、その代り其の罪を贖ふ方法として、一方ぢや悪い事をするけれども、一方ぢや罪の贖ひをする罪の税金を取つたら宜からう、ウンと高い税金を課けて、どうせ吾々は罪惡を犯すに違ひないから、その代り月に五圓なら五圓、寺へお賽錢を上げるとか、護摩を焚くとか、お札を貰つて歸るとか、罪惡消滅の運上を拂ふやうにしたら宜からう。斯う云ふやうな方法で、宗教を立てて居るのもある、今でもその方が商賣するのには工合が好い、さう云ふ主義を

やつて居る所の佛教徒もある、又天理教などは盛んにそれをやるのである、人間は罪の結晶だと云ふ、「何處か痛い」と云うと、「それは其處に罪が固まつて來たのだ」と云ふやうに、威し文句をウンと言つて、ソラ女房も悪い、親爺も悪い、この調子で行くと大抵この秋には、二人の子供は盲目か覺になる、親爺は死んでしまふ、財産は騙されて取られてしまふ、と云ふやうな事を言つて、それは恐怖の情を煽ること激しいものである、是は皆人生觀の誤りで、人間はさう云ふ方面は誰しもありませんけれども、茲に有難いことには、さう云ふ悪い精神の働く奥に——奥か真中か何處か知りませぬが、奥行が深いならば奥の奥のズツと奥、横で言つたならば、横に悪い事を澤山して居るその真中に、或る清い立派なものを誰も皆有つて居る、けれども是がちよつと眼を醒さない、働かないのであります。

八 釋尊正覺の氣分

是は如何にも大事なことで、お釋迦様の教はその點が非常に宜しいので、お釋迦様

は最初菩提樹の下に正覺を成じて、何とも言へぬ清い覺を得られた、智惠の方から言へば、一切の事柄が明かに分るやうな、絶對の智慧を得られた、慈悲の方から言へば、一切の者を感む所の完全なる慈悲を得られた、さうして氣分の好い方から言つたならば、何とも言へない歡喜、人間では譬へやうがない、酒の好きな者が上等の酒に酔つて、櫻の花でも見て浮れて居ると云ひますか、それでも一寸浮調子でいけない、或は春霞を見て浮きくした精神になつて居るとか、逆も言ひ表はしやうのない、非常な清い歡喜が満ちて居る、即ち智慧もあり、慈悲もあり、歡喜もある。人間が物の筋道に迷うて、正しきを履み外して横道に行く、心配を買ひ込んで樂みを得ない、己れ勝手に考を以て親切が無いと云ふやうな、暗黒と無慈悲と心配、斯う云ふものに、人間の精神は隠れて居る。お釋迦様の明かな智慧と、大きな慈悲と、清い魂から見たならば、まるでお月様と籠ほど違ふ、そこでお釋迦様は、この清い尊い覺を、この人々に與へやうとしても逆も駄目だ、そんな者を相手にしても仕方がないから、早く涅槃に入つた方が宜からう、「疾く涅槃に入りなん」とちよつとお考へになつた。このお考へになつたのも全然間違つたことでは無かつたでありませう、大抵の人が本當の大きな考を以て世に立つ時分には、皆この感じを懐くものである、孔子が「桴に乗つて海に浮ばん」と言つたのも同じことで、一生懸命道を説いても天下の奴は分らぬ、よくよく馬鹿な奴が寄つたものぢやナと言つて、慨歎して言つて居る、大抵えらい人は皆この感じを有つことがある。世の中の奴は言うて聞かしてもく善い事は分らぬ、覺えないでも宜い詰らぬ事を澤山覺え込んで、始末の悪い奴が寄つたものだナと考へられた、是も一應眞理である。

九 人心の靈妙性

けれども果して人間と云ふ者は絶望すべきものか、と云ふ問題になると、お釋迦様は考へ直ほされた。それは是等の穢れた精神の底に、何とも言へない清い佛性を有つて居る、我が覺りし智慧と同じきものを持つて居る、我が得たる慈悲と同じものを有

つて居る、我が悦喜と同じ喜悅を得べき心を有つて居る。例へて見れば、池の泥は濁つて居るけれども、蓮の種をその中に入れれば、その種は暫くにして芽を吹いて美しい花を開く、不忍池見たやうに、下の泥を見たならば如何にも穢いものだけれども、美しい蓮の花を開く、人間はあれと同じものだ。人間の當體と云ふものは、泥池から蓮の華が咲いて出て、芳き香を發するやうなものである、斯う云ふ事をお考へになつた。そこで波羅奈斯國に行つて初めて法を説かれた時にも、この話が出て居る、人間は表面は悪いけれども、教化し易いものである、泥の中には一寸見ると、こんな所から美しい花が咲くかと思ふけれども、その泥が却つて肥料となつて美しい花が咲くものである、蓮は作り悪いものでない、蓮の花はどんな穢ない所でも咲く、この人間は教化し悪いものではない、泥の如き池の中に清き花を咲かす事は、イト易きことであるとお考へになつた。それから五十年の間様々の法を説きになつて、即ち人間の泥の如き心の中から、清い花を開かすべく骨を折られた。人間の事を人の華と法華經に

説いてある、釋迦牟尼佛一代の活動は、人の華を開かす——泥の如き人をして、蓮の華を開く人たらしむるのが、釋尊の骨折られたる所である、それが纏つたものが法華經である、即ち法華經の題目には「妙法蓮華」とある、「法蓮華」と云ふのは人間のこゝとで、草の蓮華と云ふのは池にある植物であるが、是は法の蓮華で、泥の中から清き花が咲くが如くに、煩惱の精神の中に、美しい花を開くべき頗る面白いものである、故に「妙」と云ふ字を頭に附けてあるのである。この法蓮華は抛して置けば、泥の臭い所にあるけれども、少し導きを與へれば花を開く、太陽の光が出て照さんければ芽を吹かぬ、そこで蓮華は日に向つて花を開くと云ふことがある、印度の言葉に、日出づれば紅蓮ひらき、月出づれば青蓮ひらくと云ふ事がある。是は即ち釋迦自ら日を以て任じ月を以て任じて居る、泥池の中の蓮として咲くべき花は、人の心に佛性がある、けれども日が出、月が出なかつたならば、この蓮は開かぬ、我自ら日となり月となつて、この人の心の蓮の花を咲かせて見せや

うと考へになつた、そこで終が妙法蓮華經と云ふお經に、纏りが附いて居るのであります。佛様が無ければ妙法蓮華經があつても、法蓮華は泥の中に永久に隠れて、その花は開かないものである、日出で月出でんければ蓮の花が開かぬと云ふことが、法華宗の人にして分らぬやうでは、阿含經をも讀むことは出来ない譯であります。

一〇 十界互具の本体

さう云ふ次第で其處が一番大事な問題であります、そこで人間の身體を考へるには、日蓮主義では之を十界互具と云ふ。表面は人間であるけれども、その心の中には十のものが具はつて居る、その十と云ふのは、地獄の方から數へれば、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛であり、この十のものが具はつて居る、具はつて居ると云うても、そんなものが有るか無いかと疑ふだらうけれども、それはサウ知り悪いものではない、自分の顔は見えぬから仕方がないけれども、人の顔を見れば分るぢやないか。或る時は隣の八兵衛が、非常に嬉しさうな顔をして飛込ん

で来て、實に面白くて堪らないと云ふこともある、さうかと思ふと今度はブン／＼腹を立て、忌々しいと云つて青筋立て、飛んで来る時もある、又別段嬉しいとも悲しいとも言はないで、普通な顔をして落付き拂つてやつて来る事もある、又或る時は非常な慾張り根性で——慾張り面と云ふのは、どんな面か分らぬけれども、それでも何か優しいやうな顔をして旨い事を言つて、結局己れの利益に話を落さうと思つて、いろ／＼頭を下げぬでも宜い所を、三遍も五遍もお辭儀したりする、さう云ふ態度を執ることもある、又或る時は譯が分らぬで、非常に愚痴な事を言つて居る、随つて人の愚痴を言ふ顔にも特色があらう、自分が氣を附けないからちよつと分らぬ、是れから諸君が注意をして、婆さんが愚痴を言ひ出した時の顔は、どう云ふ所に特徴があるか、能く氣を附ければ必ずある、又何か慾張りの奴が来て、今日は親切な事を言ひ居るが、又金でも借りに來たのぢやないかと云ふ時には、その面を見ればやはり特色があるに違ひない、注意せぬから私共は分らぬけれども、日蓮聖人は注意せられたと見えて、

愚痴な顔がはつきり分ると書いてある。愚痴面と云ふものもあると見える、それから料見が振れて、表面優しいやうな事を言つて、腹黒い——と云ふか、臍が黒いと云ふか、人を騙さうと云ふやうな、料見の振れた奴の面つき、さう云ふやうなものがある。と云ふ。さうすると喜んで居るのは天上界の一部分が現はれ、腹立つて居るのは地獄、平らかな有様は人間、慾張り、餓鬼、愚痴は畜生、振れた腹黒いと云ふのは修羅である。さうすると人間の顔に地獄から天上界までの六道があるぢやないか、さうして之を盛んに顔が表はしつゝあるのである。芝居などを見たならば、役者が表情が上手だと云ふのは、之を巧に表はすことなのである。哀れな時には哀れのやうに、慾張り親爺は如何にも慾張り面にやるのが名優なので、そこで面白味を感ずるのであるが、是が實際心に依つて表はれるとすれば、地獄より天上界までの性質が、人間にあることが分るのである。それから土の方は土等だからちよつと出ないけれども、全然出ない譯でもない、或は自分の夫が死んだとか、子が死んだとか云ふ事に依つて、非常に人

生を悲観して、慾も得も何も要らぬ、唯だ人生と云ふものは果敢ないもので、榮華は夢か幻か、今まではたゞ一時の目前の喜びのみに、心を置いたけれども、今日は可愛い夫が死んだとか、我が子が死んだとか、人生を悲観する事がある。その時には慾張りだの我慾だのと云ふ精神が無くなつて、清い精神がその奥に閃く、唯だ目前の利益を趁ふて、さうして物質の喜びに憧れて居つたのは夢で、モウ少し大きい深い所に人生を見なければならぬと、氣が附いて考へるやうになれば、それが聲聞縁覺の心である、それが説教や演説を聞いて起れば聲聞である、花が落ち、葉が散り、人が死にするやうな事實を目撃して、人から教へられなくとも自ら自覺するならば、それは縁覺である、縁に於て覺るから縁覺である。菩薩は親切な精神であるが、是は將に人間にあるものである、どんな悪人でも、人の家へ這入つて泥棒して、場合に依れば殺人罪を犯すやうな奴でも、自分の妻や子の方に向いたならば、優しい精神を有つて居るものである、又非常な悪い奴でも、赤子が井戸の傍へ行つて遊んで居つて、ア、モウ

一足で落ちこちさうだと云ふ時になれば、誰でも急いで行つてその子供を抱き止める、夜は人を殺して錢を取る泥棒でも、無邪氣な赤ん坊が井戸の中に落ちやうとすれば、之を止めに行くだけの親切は人間にある、犬や猫にはないが人間にはある、其處が即ち菩薩の性質を有つて居る證據である。佛様はその慈悲が大きく現はれて、一切の人間を悉く憫れむと云ふ大慈大悲であるから、一寸現はれないけれども、昔の人間にさう云ふ考を有つた人がある、支那で言へば堯舜と云ふやうな人は、やはりサウ云ふやうな大きな考を以て人を救はうとした。日本で言ひますれば、天照大神様を初めとして、歴代の天皇の大御心と申すのは即ち是である、仁徳天皇が民の爲に三年の賦課を免ぜられて、御殿は雨が漏るやうになつて、皇后様はどうしてこんな見すばらしい事になつたであらうかと、云つて御心配になつて居られた時に、仁徳天皇は喜んで「民のかまどは賑ひにけり」——あ、朕は金持になつたと仰しやつた、皇后様が「でも此の通り雨が漏つて居るではござりませぬか」「イヤ人民が皆榮えて居ると云ふことは、

朕の富めるものである」と仰せられた、この御精神は管に仁徳天皇だけではない、我が朝廷御歴代が、皆大きな仁愛を有つて居らせられるのでありますから、我が國の天皇は即ち佛界の精神——佛と同一なる御精神が現はれて、事實にお働きになつて居ると見るのが、當然の事であらうと思ひます。そこで吾々の方に於ては餘り現はれ悪いけれども、併し佛様の心を考へ、えらい人の事を考へると、一人よりも二人、二人よりも三人、どうぞ親切を及ぼして、自分の働く事が大勢の人の幸福になり、永い後までも善き影響を與へるやうにしたい、少しの人に少しの時間効力があつても、モウ少し時間が経つたならば雪達磨が消えるやうにグシャ／＼と消えるやうな仕事にのみ、力を盡すのは駄目な事である」と云ふことを考へて、大きな廣い範圍に永い親切を與へんとするならば、それが佛様の心の現はれである。それでありますから、お互に詰らぬ方から見れば、地獄や餓鬼が盛んに働くけれども、又美しい方から見れば、菩薩の心、佛の心が働く」と云ふ事を見るのが、法華經の教である。さうして法華經は、

人身に関する意識信念

今自分の心は何方に向ひて居るかを時々反省せよと云ふ、ウツカリすると直ぐ悪い方が出るぞ、顔洗つたならば今どつちだ、今我が心は地獄か餓鬼か畜生か、顔を洗ふなり「今日は儲けてやらなければならぬ」と考へれば、バツと慾心が出る。或は又詰らぬ事を考へ出して、「昨夜は何處の宴會で、彼の親爺失敬な事を言つた、昨夜は寝たから忘れたけれども、考へ出せばいまいしい」斯う考へればその時瞋恚の心が起る。そこで法華經の大切なる人身觀は、今の心何處に行くや——唯今の心が餓鬼に屬するか、地獄に屬するか、菩薩に屬するか、佛に屬するかと云ふことを、時々反省して見よと云ふ。恰度看護婦が熱を計るやうに、ちやんと月日と時間を記入して置いて、「三月二十四日午後三時は餓鬼の心盛んに動く」六時に取つて見たらば、今度は更に悪くなつて「地獄の焔大いに燃る」と云ふやうに、即今唯今の心何處に行くやと云ふことを、二三日やつて見たならば——嘘を交へないでやつて見ると、モウ劈頭第一から餓鬼、次は修羅、次は地獄、又修羅、又畜生と云ふやうな工合で、善い方は少とも出て

來ない。さうすると偉さうに法華行者とか何とか言つても、どうも我が心は地獄、餓鬼、畜生が盛んに起る、是ではいけないと云ふことを、茲に反省して、己れの精神の持ち方を變へて來なければならぬ。それを考へないで、こんなものだ、あんなものだと云ふ事だけ話して、己れに關係しないものならば、それは他人の實で、己れは何處迄も詰らぬ人間で終るのでありますから……。そこでそれを事實にやつたのが、天台智者大師の法華三昧の行である、それを面倒に考へずに、南無妙法蓮華經と唱へながら、時々自分の心に反省して見て、今何だ……南無妙法蓮華經と言ひながら、又餓鬼を出して居るぢやないかと反省する、近頃の人は聲だけで誤魔化して居るが、それはいかぬ、故に即今唯今の心何處に向くやと云ふことを考へる、さうすると唯だ自分だけでは、餘り善い心がどうしても起らない、「起れ——」と獎勵しても「善い心よ、多く起つて呉れ——」と云ふ希望を懷いても中々起らぬ、直ぐ詰らない考が起つて仕方がない、それより何か食ひたいと云ふやうな心が起ると、中々去らない、「晩に一つ鯖の刺身で一

「パイ」と云ふやうな事を考へると、段々時間が切迫して来る程、鮪に縁が近くなつて来る。今度花を見に行くには、何を持って行かうか、澤の鶴が宜からう。酒の好きな奴は忘れつこない、飲みたい、食ひたいと云ふやうな事は割合に餘計動くので、人間の精神には餓鬼のやうな精神は餘程強い、晝飯を食つて腹一パイでも、直ぐ晩には「蕪蕪煮て置け」と言ふ。であるから少しでも清い精神に戻ると云ふことを努力しなければならぬが、それが中々出来ない、そこで我が精神の善い方へ向く手段方法を講じなければならぬ。それには形から言うたならば、御本尊、佛様、日蓮聖人と云ふやうな尊とい所に對面する、向ふはそんな餓鬼だの地獄と云ふ心が一點も働かない、清い道の爲に正義の爲に命を捨てた所の人であるから、日蓮聖人でもお釋迦様にでも向ふと云うと、此方の餓鬼の心地獄の心が屏息して、清い精神の方へ近づいて来るのである。

一一 自他感應の妙旨

己れの精神もさう云ふやうになるが、向ふからもそれを助けて下される所には、實際に活きた働きがあるのである。唯だ吾々の方からばかり行くのではない、感應不思議と云ふ事が其處に在る、日蓮聖人を信すれば、日蓮聖人の活きたる精神が、吾々の精神を善い方へ引張つて行つて下さる、お釋迦様を信すれば、お釋迦様の活ける精神が、吾々を引張つて下さると云ふことが宗教である。水あれば必ず月がそれに映る如く、渴仰すれば必ず感應を起して来る、水は天に昇つて月を迎へて来るのではないが、盥に水を入れさへすれば月は映る、月が盥の中に落込むのではない、月は天に在り、盥は地に在り、然れども水を入れさへすれば、即座に月が映るのである、月は下り降らずして水に映り、水は上り昇らずしてこの月を迎へると云ふ、不思議の感應が其處に現はれる所が宗教である。鬼子母神様を信するには、雜司が谷へ行かなければならぬと云ふのは、何でもお月様を映すには盥を持つて行つて、連れて來なければならぬと云ふやうなもので、そんな手ぬるい事では駄目である、何處でも構はない。どうも善い事

をやらうと思へば、餓鬼や地獄が出て来る、是では困つたと云ふ、渴仰の精神を以て、南無妙法蓮華經と唱へれば、感應不思議の力を以て、非常な清い菩薩の精神、佛の精神が活躍して、己れの精神に動いて来る、動いて来ない間は、何遍でも南無妙法蓮華經と言つて、本當に出るまでやる。さうして、愈々立派な慈悲の精神に來たと云ふ所になれば、モウ止めても宜しいが、出て来ない間は、何にもならぬ、それぢや下の鐘をカン／＼叩くより、自分の頭を叩いた方が宜い、南無妙法蓮華經、コツン／＼、本當は鐘を叩くのぢやない、頭を叩くのだけれども、一一頭を叩くのは面倒だから鐘を叩く、あれは警鐘である、眼を醒まして確乎せよと云ふ所から鐘を叩くのだ、あの叩き方は火事のより烈しいものだ、初めはチャン／＼／＼／＼／＼／＼／＼、チャーン、それから段々チャーン、チャーン／＼／＼／＼と、烈しく叩く、之を聞いたならば、静として居れぬ程響く、濟んだかと思ふと、又烈しいのが来る、細くなつたかと思ふと、強くやる、それが叩き方である、人の精神の眠れる奴に、「しつかりしろ、氣が附いたかッ」と土性を

打折るやうな勢で一生懸命叩かなければならぬ、それから鏡鉞と云ふものも、近頃ジヤーン、ポーンと云つて、ぼけたやうな音がするけれども、本當のはあんなものでない、スル／＼／＼／＼チャーラン……居眠りして居る奴は、皆眼を醒すやうにやる、それが大事である、故にどうしても佛様を信する所の精神が結び付いて、初めてこの佛性が眼を醒ますのである。是は如何にも不思議な事で、明治天皇の御製にある通り、

めに見えぬ神に向ひては、ちぎるは

人のこゝろのまことなりけり

めに見えぬ神の心に通ふこそ

人のこゝろのまことなりけれ

神に向ひ、佛に向ふと云ふことが無くては、どうしても人間の清い精神——所謂誠と云ふものは眼を醒さない。藤田東湖が正氣の歌に言つて居る天地正氣——この天地の間には一種言ふべからざる正大の氣が満ちて居る、殊に「神州由來正氣あり」と

人身に関する意識信念

云ふやうに、日本の國には何とも言へぬ清い立派なものが一パイある、それが「秀で
ては富士の嶽となり、注いでは大瀧の水となり、發しては萬葉の櫻となり、凝つて
は百鍊の鐵となる」この立派なものが即ち日本にあると云ふ風にして、自分の心を導
けば、幾らか良くなる。それがボカンとして居つては、どうも善い精神と云ふものは
起らない、それは胸突き廻すのが一番早い、どうだ、性根が入つたか……ナニ？ 今餓
鬼の心だ、イカヌ……今は地獄だ？、イカヌ……落第だ……と云ふやうにやるのが
一番早い。

一一 善心と悪心

その有様は涅槃經に説いてありますが、山に棲んで居る鹿が滅多に人里へ出て來な
いけれども、三年に一遍か二年に一遍ちよつと顔を出す、「ソラ鹿が來た」と云つて百
姓が捕へに行くと、又ビヨン／＼と山の中に飛込んでしまふ、人間の心につて來る
善心も、二年か三年に一遍顔を出したかと思つと、直ぐビヨン／＼と山の中に飛込ん

で分らなくなる、悪い方の精神は自家に飼つてある犬みたやうで、庭にゐなくなつた
と思つても直ぐ裏の方に居る、水ブツ掛けて逐ひ出しても又臺所に來て居る、夜でも
晝でもグ／＼寝て居つてその家を離れない、悪心の去り難き事は家に飼へる犬の如
く、善心の留め難き事は、山に棲める鹿のたまにやつて來たのを捕へんとする如きも
ので、直ぐ逃げてしまふ、此處が人間の洵に淺ましい所であるから、どうしてもそれ
を引締めなければならぬ、さうして誠の心を能く養ふべきである。

一二 誠意養成の方法

それはどうして養ふかと云うと、どうしても眞面目な考になるのが大事である、上
つ調子では誠は出て來ない、ゲラ／＼笑つて居つては誠は皆逃げてしまふ。佛様の前
に坐つた時にはどうしても眞面目になる、佛に向つては幾ら女でもゲラ／＼笑はない、
眞面目になると云ふ所に人間の誠が發現する。之に就ては私は東京人は未だ宜いと思
ふ、東京の人は割合に眞面目であるが、大阪邊に行くと云うと、人に出會ふ度毎に彼の

口合ひ見たやうな滑稽諧謔を盛んに言ふ、さうして一人が眞面目に言ふのを寄つて集つて茶化すやうな事を言つて、一つも眞面目を言はぬ。佛様はさう云ふやうな事を大變滅めて居られる、人間の心はちよつと物を考へるのでも、滑稽諧謔みたやうになると誠は現はれない、敬虔の念と云つて慎しむ精神で行かなければならぬ、それは苦虫かんだやうな顔をしると云ふ事ではないけれども、眞面目な所に精神を置かなければならぬ、殊に日本人は眞面目でなければならぬ。

一四 菩薩行の自覺

そこで日蓮主義は菩薩の精神があると云ふだけではいかぬから、菩薩の行ひを實行することが、日蓮主義の人生觀として非常に大事な點である。佛様を信じて菩薩の氣風が段々養はれて來れば、それを實地に行はなければならぬ、それには幾分の菩薩行と云ふものをやらなければならぬ、表面から菩薩行は難かしいと思ふけれども、さうでない、菩薩の行と云ふものは、何等かの親切が行はれば、それが皆菩薩の行で

ある。そこで自分自身に立派な考を極めて、宗教家であれば、自分の活動の中に菩薩の行の一部分を現はさう、又軍人であれば、軍人その職責の中に菩薩的精神を現はさう、商賣人であれば、商賣の中に菩薩の精神を現はさうと考へて、世の中を次第次第に良くして行く、人間の穢れ行く世界を引上げて、菩薩の世界にして行くと云ふことが、日蓮主義の努力であります。餘りこの菩薩ナンと云ふ事を別のものに考へてしまふからいかぬ、菩薩と云へば觀世音菩薩とか地藏菩薩とか云ふやうに、人間でない者と思ふやうになつたのは大變間違である。法華經では吾々悉く皆菩薩なりと云うてある、又日蓮聖人は、

日本國の人々は皆是れ菩薩なり。

と仰せられた、心が違へばそれはやはり地獄、餓鬼になるけれども、元來言へば日本人は菩薩となるべき性質を有つて居る者である。

一五 易行易守

人身に關する意識信念

然るに是は淨土門などが起つた爲であるけれども、日本人は善い事は出来ないといふ事を、餘り強く思つて居る、善い事は出来難いと云ふけれども、さうではない、方法で以てすれば善い事は誰にでも出来るのである。是は 明治天皇が、軍人への勅諭にお示しになつた事が、非常に良いと思ふ、即ち

天地の公道、人倫の常經なれば、行ひ易く、守り易し。

と仰せられた。人間が善い事をするのは、決して難かしい事ではない、心の誠が眠つて居れば難かしいけれども、心が覺むれば、親に不孝するより孝行する方が行ひ易い事である、親の肩を摩する方が宜いか、親の頭を胸突く方が宜いかと云へば、親の頭は中々叩けるものでない、人を騙すと云ふ事も、誠が開けた時には、人を騙す事は首を斬られても出来なくなる、さうして人に親切をすることは行ひ易く、守り易くなる。故に淨土門の法然などが出て、餘り人間は善い事は出来ぬものだと、強く云ひ過ぎたのは非常な罪惡である。明治天皇がお示しになつた通り、善い事は即ち天地の公道、

人倫の常經であるから、忠節を守り武勇を尚び、立派な事をやるのは、行ひ易く守り易きことである、それが自分に守り悪いと思はれるのは、己れの精神に修養の足らぬ所があるからであると、慚愧の心を起して、善い事の出来易い人間にならなければならぬのである。今日は無闇に善い事は出来ないと言ひ過ぎて居る、是は淨土門が日本人を誤らした所の罪惡で、地獄に行つて胸突かれても、その罪業は消滅し難い程なる重罪犯である、又日本人もサウ言はれると「サウカナ」と思つてしまふからいけない、それは表面は泥みたやうであるけれども、この中から蓮の華を咲かさなければならぬ、と云ふ方に導くのが本當の教である。であるから日蓮主義は、菩薩行を皆やれ、さうすれば人生と云ふものが、楽しい所になると教へるのであります。

一六 勇猛精進の願行

己れが引込思案であると云うと、世が濁つたり世の中に面倒な事があると、一一その爲に困ることになる、どうも人が性の悪いとか、或は自分を迷はす誘惑が多いと

か云ふけれども、菩薩の精神を起せば、己れの救ふべき迷うた奴が澤山ある。此處にも居るナ、此方の方にも居るナ」と云ふ事になると、世の中の濁濁と云ふことが苦にならない、世の中がすつかり澄んでしまつて居つたならば、菩薩行を打立つべき所は無、醫者になつたならば、病人が多くなければ困る、病人が一人も無いと云ふことになつたらば、お醫者様は商賣換へだ、菩薩の行を起した時には、世の中に病める者があり、迷へる者があると云ふ事は、即ち自分の行を積む仕事が多いのであるから、喜ばしい事になる、軍人が戰場に臨んだならば、成べく大きな敵と戦はうとする、昔の軍記を読んで御覽なさい、武士と云ふ者は、名もないヘッポコ侍は相手にしない、貴様は何だ、足輕だ、そんな者は我が相手にならぬ、其處退けッ」と云ふ譯で、立派な大將を目指して行く、さうして立派な鎧でも着た者に出會ふと云うと、「我れこそは清和天皇何代の孫、何の某なり」と云つて名乗を擧げる、そこで、「よき敵御坐んなれ」と云ふ譯で組打を始め。菩薩の精神になればその通りである、一身を賭して、

進退是れ谷まるどうじやうかと云ふ心配事の來た時に、信仰の力、菩薩の心を以て、之を支へて行くことになつて、初めて眞の悦喜を感じるのである、餘りビクつくから人間は弱くなつてしまふ、面白いもので、少し自ら進んでやらうとすると、物事と云ふものは大變勇氣が出て來る、例へば皮膚を健康にしやうと云ふ目的で、毎朝水で冷水摩擦でもして置くと、寒い所に出ても風邪を引かぬ、一週間で冷したから、襯衣を脱いだけれども何ともない、二週間目には下着を一枚脱いでも、風邪を引かない、今日は大分寒い」と人が言つても、「ナニ面白」と云ふやうになる、寒さに對抗しやうと考へて居れば、非常に愉快である、それがア、寒い／＼と思つて居れば、「今日は馬鹿に寒い襦袢をモウ一枚出せ——襟巻を出せ」段々いぢけて來る。世を救ふべき責任を帯びたならば、其處に勇氣が現はれて來る、菩薩行に立たなければ、佛教信者は利益や功德を貰ふ乞食の集まりだ、阿彌陀様、私の方へも餘りを一パイ下さい、「觀音様、私にも御飯の残りでもやつて下さい」何を呉れ彼を呉れと云つて、少しも他に

向つて救ひの働きをしないならば、日本國民を擧げて、乞食にしてしまふことになるぢやないか、「私が死んだら頼みます」「お婆が病氣だから頼みます」……そればかりの宗教であつては、さつぱり詰らぬ事になる。無論人は、さう云ふ救を求めも悪くはないが、自ら佛の精神に活き、菩薩行の一部分に這入つて、世を救ひ人を救ふ所に、佛敎の人生觀があるのであります。

それを斯の如く低い考にしたのは誰の罪であるか、佛敎を披いて見たならば、苟も菩薩の行を立てない者は、眞の佛弟子でないといふことは、到る處に言うてある、己れの事だけ考へて菩薩の精神に入らない者は、割れたる石は合はざる如く、炒つたる種の花咲かざる如く、永久の沈淪を免れないと云ふことを、誠められて居るのである。であるから佛敎徒は菩薩の行を起して、一分なりとも善き働きをすることに、眼が覺めなければならぬと思ふのであります。

一七 宇宙觀の概要

それから次に宇宙の事に就て、日蓮主義の見解を述べやうと思ふ。

一八 唯物思想の淺見

是は詳しく話すと、問題の廣いことであるが、現在世の中を汚濁して居る宇宙觀は、全く唯物思想である。神も無ければ、佛も無ければ魂もない、唯だ天地は物質ばかりである、物體の運動あるのみと考へる、人間も精密な機械が動いて居るやうなもので、時計がゼンマイ掛けられて動くのと同じで、何にも精神と云ふものは無い、人の死ぬと云ふのは、時計の機械が壞れて動かなくなつたと同じことで、何も魂と云ふものは無い。斯う云ふ事を、西洋の詰らない學者が言つた、直ぐ打破られたのであるけれども、ちよつと馬鹿な事を言ふ者には、都合の好い議論である、神も佛もない、精神も魂もない、人間の一生それだけが、全體であるとか考へると云うと、物の分りが宜いから、そこで唯物の思想が少しばかり起つた、併し學問の方では、直ぐ打破られた思想である、是は十八世紀の思想と云つて、二百年前の舊い思想である、何にも今日學

説としては、力のないものであるけれども、哲學や宗教をやらぬ方の醫者とか法律家とか、さう云ふ事だけやる學者は、舊い二百年前の唯物論の思想を受入れた。そこで日本のお役人とか、教育家と云ふやうな者は、皆えらい人であるけれども、思想としては唯物主義の傾向である。今日でも正直に言うたならば、神も信じない、死んで魂が続く事も信じない唯物論者である。本當に言へば全く悪い考である、お釋迦様に言はせれば、青鬼、赤鬼に胴突かるべきものである。所か之をえらさうに考へる者が日本にも多いので、精神問題、修養問題を言つと、之をバカにする、けれども學問の正統から言つて、唯物論が學術上立つかと云つたならば、日本に於ても、思想家等が議論の上に、唯物物を標榜して戦ふ人は今は無い、唯だ黙つて居る、是もやはり黙々の間の唯物主義で、前の黙々の間の自然主義と同じである、議論としては敵はないから黙つて、唯だ神も佛も信じない、宗教は迷信だと云ふ俗論を振舞して、日本の國民を毒して居る、甚だ卑怯未練な者である、學說上に於て唯物主義が立つならば、堂々と

唯物論を提げてやるが宜い、立たぬなら引込んだが宜い、素人を騙して唯物主義の毒を天下に流す、さう云ふ教育家がありとし、役人がありとすれば、非常な罪惡である、日本の國家を毒する罪人である。であるから今天地を考へるには、どうしてもさう云ふ唯物論の考を捨てなければならぬ、若し神も佛もない、魂も無いと云ふことになる、人間の幸福は、生きて居る間に取らなければならぬ事になるから、悪い事をして法律さへ逃れたならば宜い、日本で悪い事をして、亞米利加へ飛んでしまへば、それ迄だと云ふことになる、罪惡を犯す奴は今日その通りやり居る、人を殺して何とも思はない、大根切ると同じだ、それは人の魂を重んじない、因果の關係と云ふことを信じないからである。その罪惡には必ず結果がある、一つの魂は永遠に存在するものであつて、その罪は己れ永久の生命に係るので、幾億萬遍地獄の底に送られて、それに幾百倍したる苦痛を、受けなければならぬと考へたならば、無駄の事で人を殺すやうな事は決してしない。唯物論の爲に狂暴なる罪惡が行はれる、唯物論の爲に社會主義

が起つて、天下を覆へすやうな事をやる、露西亞を御覽なさい、宗教は一方で非常に叩きつけられて居る、教會の財産は奪はれ、建物は破壊され、宗教は非常な打撃を受けて居る、さう云ふやうな事は段々國を潰してしまふものである、露西亞だつて學校を拵へたし、露西亞だつて軍人を有つて居つた、政治家も居つた、然るにグジャク言ひながら、その國家を根本的に破壊してしまふのである、であるから唯だ表面の智識を興へても、根本から國家を覆へすやうな罪惡を犯すに至るのである。是は唯物論を以て行けば「日本の神様とは何だ、古い時代の野蠻人じやないか、何處から来たか、蒙古か、南洋か」さう云ふやうな事しか頭に働かない、己れの馬鹿は分らない、皇室の御稜威、稜威とは何だ、そんなものがあるか「親の恩、恩とは何だ、母の恩なんとなつても、形が無くては分らぬ、己が子供の時分に幾ら親切にして呉れても、己は實際見て居らぬから何にも知らぬ、全體頼みもしないのに、吾々を生んで、孝行しなればならぬと云ふのはどう云ふ譯だ、斯う云ふ者が一パイ居る、是は皆唯物的思想の

産物である。全く日本の教育は未だ醒めたやうな醒めぬやうな所がある、この唯物思想を根本的に撃滅しなければならぬ、明治以來、人間の魂ナシと云ふものは無い、死んだらそれつきりだ、神様は無いものだとか言つて、教育の上から無闇に宗教を排斥した、それは宗教の害毒を認めた點もあつたけれども、實は外國の思想より來た誤解が餘程あつた、即ち唯物論の影響を受けて宗教を排斥したのであるから、この罪障消滅をせなければならぬ。今頃宗教に對して愚痴を言ふたりするより、己れの學問智識の不透明を愧ぢなければならぬ。そこで少し醒めた人の働きは大變立派になつて來た、政治家の中にも、教育家の中にも、段々さう云ふ唯物物の思想を捨て、精神的の活動を始めた人があるが、それは從來の弊害を除いて、多大なる効果を現はしつつあるのであります。故に天地宇宙と云ふには、神も無い、佛も無い、何も無いと云ふやうな事はいけない、どうしてもこの天地の間には偉大なる存在者がある、と云ふことを信じなければならぬ。

一九 宇宙の大生命

そこでその偉大なる存在と云ふことに就て、いろいろ問題が起るのでありますが、之を人格に見ないで、前に言ふ天地正大の氣として見るとか、或は宇宙の大生命として見るとか、色々の名前で現はしてゐるけれども、何かえらい者がある、さう云ふ風にして考へて行くことも、結構な事であるけれども、更に適切に考へて行かなければならぬ、例へば伊藤仁齋先生が言はれたやうに、同じ天を大切にすると云つても、ほんやりして居つては駄目である、今の教育家が考へて居るやうなものでは駄目だ、形ある宗教に入らぬ迄も、伊藤仁齋先生は斯う云ふことをいはれた、それは同志の學者を集めて互に經書の講義をする會に於て、仁齋がその講義の前に、

赫々上に在り、明々下に在り、心若し私曲ならば、天それ我を厭てん。

と云ふことを言つて講義をされた、赫々上に在り」と云ふことは、お日様が照すやうに天道は見て御座る、明々下に在り」と云ふのは、明かなるものが、地から後光が指

すやうに、自分等を見て居る、即ち天地が自分等を見て居る、若し自分の心に間違つた考があつたならば、天から捨てられてしまふ、天に捨てられるれば、愆ふる所なしと云ふ考を以て、法律が許さうが人が許さうが、この赫々明々たる天地に捨てられた者は、何處にも縋るべき所はないと云ふ事を讀んで、さうして話をした、是だけは道徳修養の方に於ても、やはりやつたものである。所が今の教育ではそれだけでもやらない、天地の公道と云ふ事さへヨウ言はないやうになつた、窮屈至極な變テヨなものである、この一番善い所を忘れると云ふのは、日本を咒ふ惡魔外道と云つても宜い、人間の本當に良くなるべき大切な所、機械で言うたならば、この機械一つ取つて置けば、後は駄目だと云ふ大切な所、刀で言へば目貫が抜けて居る、イザと云ふ時に刀を振上げる、刀はボンと向ふへ抜けて、櫛の柄だけ自分の手に残るやうなものだ、その通りの事をやつて居る、學校で二十年教育を受けて、大學卒業して出て來たボンチがどうだと云つたら、刀は向ふへ抜けて柄だけ残つて居る、是は日本教育の失敗史として、大

いに慚愧すべき所である。宗教と言はなくても、宇宙に對しては、皆さう云ふ風に浩然の氣とか、正大の氣とか云つて、其處に慎む考があつたものである、それから進んでやはり儒教でも段々人格化して、天意と云ふ一種の人格を其處へ認めるのである、人格を認めると云つても、どう云ふ姿だと云ふ姿までは説かぬけれども、「天を祭る在すが如く」と云つて、人格を認めれば其處にちやんと御坐る、上に在るが如く左右に在るが如く——即ち自分の信する天道と云ふものは、頭の上にズツとお居て下さる、右と左にお守護下さると云ふやうに、考へてやらなければならぬと云ふ、其處まで行けば宗教と違はぬ。さう云ふ事を言へば、日本の教育家は「それは宗教の形へ這入つた」と言ふ、何處までを、道徳修養に入れるか天地正大の氣と云うて宜いか、その區域も研究されて居らぬ。成立宗教がいかぬと云ふ事は、その人格者をお釋迦様とか、ゴッドとか阿彌陀様とか云ふから、困るのだらうけれども、偉大なる人格者の宇宙に存在することは、日本人は國民の本分として、神様が日本をお開きになつた、伊勢の

大廟があつて之に鎮座ましますと云つて、日本人は神の存在を信じて居る國民であり、或は招魂祭をして、日本の軍人は國家の爲に戦場の露と消えても、その魂はちやんと九段の社の中に在つて滅びず、永久に日本の前途を守つて居ると云ふのが、日本人の信仰である以上は、決して日本は無神論、無靈魂論を唱へらるべき國家ではない。それであるから若し日本の教育家、役人が賢所へ参拜して、神の實在を信じないならば、實に不都合極まるものである、さう云ふ者は本當は法律を以て處分されても仕方がないものである、どうしてもこの宇宙を見るには、一つのさう云ふ立派な精神のある神様あり、佛様ありと云ふ方へ、段々近寄つて來なければならぬ、この人間の魂の事にしても、死んで無くならないと云ふ了解及び信念を培養することに努力しなければならぬ、眼に見えぬから、疑へば疑へるけれども——死ねば何處へ行くか分らないと云へば、分らないやうにも考へられるけれども、それを有ゆる方面から、智識の満足、感情の満足、意志の満足に依つて、信仰を決定するやうに、國家の風教を導く、

有ゆる方法を以て、子供の時分から、人は死んでも魂は消えないと云ふ信仰を興へるのが、萬事萬端の爲に大利益である、それを寄つて集つて壊した結果は、どうなるかと云へば、即ち前きに言ふ狂暴なる犯罪が現はれて、遂に國家を壊してしまひ、人間の幸福を失つてしまふぢやないか、そんなバカな事を骨折つてする事はない。宇宙を観るにも、冷たい方に考へてはいけない。それは成程聲を聞くことは出来ない、眼に見る事は出来ぬにしても、偉大なる其處に大人格者が御座るのであると考へて、さうして精神を其處に導いて行かなければならぬ。

二〇 宗教心の培養

殊にそれは子供の時分が宜いのであります、人間は十四五から十七八位までの間に、この清い精神が動くものである。あなた方も子供を持つたら、氣を附けて御覽なさい、必ずその頃に神様はどうだとか、佛様はどうだと云ふことを尋ねますから、その宗教心の萌芽を殺さぬやうに段々導いて「それは結構な尋だ、ちよつと分らぬかも知らぬ

けれども、その事は段々能く考へて、神を信じ佛を信する清き信仰に入ると云ふことが、一番大事であるから、お父さんやお母さんとお話する事は、不十分であるかも知らぬけれども、私の信心は違はないのであるから、私の答に満足しない場合には、又その話をして貰ふ人を連れて来て、お前に分るやうにしてやるから」と云つて、ちやんと了解するまで話をせなければならぬ、自分が分らぬものだから一緒にいつて、「まうちやナ、あるか無いか分らぬナ——」、それが非常に多い、家庭に於てこの宇宙的の大人格を壊して、一國の基礎を破壊し、人類文明の中軸を失ふやうな事を、平氣で言うて居る。人間は言へる事と言へぬ事がある、例へば冗談でも「どうだ貴様、俺が日本を壊す時分に、一緒にやるか」それは假令冗談でも、そんな事に賛成は出来ぬ、「俺は今夜貴様の親父の首を斬らうと思ふ、賛成して呉れ」……斯う云ふやうな事に賛成しやうと云ふ事は、冗談でも言へない、言へる事と言へぬ事があるのである。清い信仰を子供が求めた、天然の固有の宗教心が動いて来て尋ねた時に、親と一緒にいつて、

「サーそんなものはあるとも言へるし無いとも言へる、分らぬサー」と言つて、その清い信仰を誤魔化すことになつたらどうであるか、親がその子供の生涯を誤らしむるものである、所が日本の今の若い人でも、教育受けた人でも、さう云ふ問題になると、「あれは舊いお婆さんの言つた事である、人間魂」と云ふものは無い、死んでしまへばそれつきり、地獄や極樂と云ふことは、昔の人間が人を騙す積りで言つた事である」さう云ふ事を知つた顔で、破壊する時には豪さうな顔してやつて居る、眞の難有い信仰を説く爲には少しの熱誠もない、さうして破壊の時には力を入れて、分つたやうな顔して言つて居る、要するに健全な文明の壊し手は、日本に澤山居るけれども、組立てる爲の努力と熱心が缺けて居る。さう云ふ今までの學者や何かは皆いけないので、大いに回復しなければならぬ、今日は世界の國々に於ても、文明の建て直しぢや、西洋の國々でも何の國でも、この儘で宜いと云ふ國は無いちやないか、柱が腐つて根継ぎをして居るのもある、雨漏りで屋根屋を雇つて居るのもある、火事に出遇つて保

險會社へ錢を呉れと云つて居るのもある、我が日本は、日本で立派な考でやらなければ、受賣學問などは今日では全廢ぢや、さうして少しばかりの智識に依つて、この大切なる信仰を打破つたと云ふことは、非常な罪惡である。

二一 社會主義と唯物思想

私は加藤弘之氏にも言つた、大學の御殿で社會主義の事に就て、私が或る事に關係したものであるから、話して呉れと云ふことであつた、そこで私は、社會主義と云ふものは色々原因はあるけれども、唯物論から生じて居るものである、唯物論を唱へて居る者と、社會主義の惡逆とは兄弟である、道德的法律の裁判から言へば、唯物主義を臆面もなく主張する者は、社會主義を産む主犯者であると論じ、一方が死刑なら、一方は無期徒刑の價値があると言つて斷言した、加藤博士も居られたし、井上博士が「今日の話は面白うございますナ」と云はれると、加藤先生も「まあそんなものでせう」と云はれた。私は是が大嫌ひだ、唯だ權力是れ即ち主權、はり倒し是れ主權」と

云ふやうな事を言ふ、斯う云ふ事を言つたのが、日本學者の先輩ぢやないか、何も悪口言ふのでもないが、それが大博士、大先生だ、加藤弘之先生が今居れば、日本一番の大博士になつて居る、それが張り倒し即ち主權と言つて居る、是はその時代が間違つて居つた、何も彼の人が悪いと云ふのもあるまいが、モウ早や時代が一世紀ふるいのだ、今は精神を基礎にしたる文明に立たなければならぬ。それでありませうから、この宇宙を見るにも、どうしても其處に尊い神なり佛なりを考へるのが、是が大切なことでもあります。

二二 人格的宇宙觀

さうなつて見ると日蓮主義の教ふる所は、諸法實相と云つて、いろ／＼な哲學上の講釋もするけれども、一番終ひには、この宇宙には非常な尊い本佛が御座つて、この多勢の者を導いて居るのであると教へられて居る、即ち壽量品の次に説かれた所の分別功德品に於て、信仰と智識と云ふものは一つになる、智識と信仰が別に居る間は、

何方かに缺けた所があるのである、眞の智識と眞の信仰とは一つである、信仰に達しない智慧ナンと云ふものは、未だ完結しないのである。日本の國體を研究して、どうしても皇室の尊嚴が、大事ぢやと云ふ見究めが附いたならば、其處に信念が生れる、親に孝行すると云ふことは、人間の道徳として最も大事なことだと云ふ、孝道の意味が、本當に了解せられた時は、どうしても親に孝行しなければならぬと云ふ信念が湧いて来る、孝道が大事であると云ふ智慧はあつても、孝行せぬ間は、その智慧は未だ何處かに缺點がある。であるから壽量品の教に行くと云ふと、宇宙には眞如があると云ふ、實相があるとか言つて居る間は駄目で、この宇宙には非常にえらい佛様が御座る、それが何時も多勢の者を惑んで、お助けになる爲に働いてお居でなされる、靜として居る佛でなくして、衆生濟度の爲に活動する佛が、何時も御座る。

二三 本佛と吾人

その活動振りは、前の佛陀編で申した通りに、唯だ高い所にあるだけでなく、人の

中に現はれて来て、盛んに人々をお助けなさる所の佛である、第一は天竺のお釋迦様として現はれたけれども、我が國の天照大神としてもお現はれになるし、日蓮聖人としてもお現はれになるし、又幾多のえらい人々となつて、現はれてお働きになるのである、その事は『日眼女釋迦鈔』と云ふ、四條金吾の女房に送られた御文章を見れば分かる、有ゆる方面に我が日蓮主義で信する本佛は働かれる。耶蘇教あたりは全智全能と云ふけれども、餘り働かない、何時も一人ざりであるから、どうする事も出来ない、そこで神様が邪魔になる。佛様が邪魔になると云ふけれども、佛教はさうでない、有ゆる働さに現はれて出る、殊に日蓮聖人は盛んに之を使はれた、前編に申したやうに、船守彌三郎が、粗岩から聖人を救うた時にも「是は普通の漁師ではない、この彌三郎の精神に本佛が乗移つて、日蓮を救うたものである」と言はれ、又彌三郎の女房が、三十日の間隠覆つた事に就ても、聖人はやはりさう云ふ意味で、自分の母親が生れ代つて、彌三郎の女房になつて居るのか、釋迦如來の魂が彌三郎の妻の心に這入つて、

日蓮を助けて下さるのか」と仰しやる、お釋迦様と云ふものは、雲の上にはかり御座るものではない、漁師の彌三郎にも這入れば、彌三郎の妻にも這入る、阿佛房の心にも這入る、一切萬端に佛は働くのである。又自分自身の心にも無論働くのである、其處が非常に大事なこと、最初は佛様と自分とは向ひ合せになつて、佛は哀愍を垂れ、吾々は渴仰を捧げて、向ひ合せだけれども、段々接近して佛と自分とは一體になる、恰度親と子が寄つたやうなもので、初めは「御機嫌宜しうございます」と云つて居るが、親の方から「モツと傍へ寄れ」と云つて、段々親子が寄つて来るやうなもので、大きくなつて抱くのも工合が悪いけれども、それでも娘が嫁に行つてたまに實家に歸れば、又母親に抱いて寝て貰ふやうなものである、其處に一種言ふべからざる慈愛の結晶がある。宗教はやはりサウで、最初は離れて尊敬を拂ふ、向ふは救ふと云つて、上下になつて居るけれども、段々接近して一つになる、さうすると自分の心の中に佛が這入つてしまはれる、理窟ではない、禪宗坊主は理窟を捏ね廻して、自分に佛があ

るナンと言つて居るが、そんな理窟はモウ微が生へて駄目だ、生々したる對立の上に絶對の佛があると信じた者が、今度段々に信仰が進んで、精神的に佛が自分の心に這入つて下される、今までの自分の心であつたならば、臆病であつたらうけれども、あ釋迦様の心を迎へて來た自分の心は、唯の人間ではない、自分だけならば弱かつたけれども、下には佛性が動き、上から佛の魂を迎へて來た心は、非常な強いものであると云ふ考が起きて來るのである、日蓮聖人はその手本である、日蓮聖人が餘り立派だと吃驚していかぬから、それ程まで行かぬでも宜い、佛の心が乗移つて下されれば、今まで非常に性の悪い了見であつたけれども、幾らか優しくなつた、今まで我慾一點張であつたけれども、少しは慈悲の心も動いて來たと云ふやうに、初めは少しづつの方が宜い、餘りバツと立派にならうと思つて吃驚してしまふ、一分々々でも宜しい。

二四 向上進取の大精神

それでも向上せんとする欲求と云ふものは大事である、畫つて進まぬと云ふ事は一

番いけない、法然や親鸞のやつたのは畫つて進まぬやり方である、少し宛でも進むと云ふことが、一番大事である、畫つて進まないと言ふのは、道に線を附けて、是から先きは行かれぬとしてしまへば、其處まで行けば動かぬ、モウいかぬと極めて居る、淺草の觀音様へ行つて家へ歸ると云ふことにすれば、向島へはどうしても行かない、けれども觀音様から船で川を渡つて、向島へ行くと方針を取れば行けないではない、所が眞宗、淨土宗のやり方は、大抵の場合自分畫つて進まない、人間には善い事は出來ない、と言つて居るか、あゝ云ふ事は非常に悪い事である、決して出來ない事は無い、又事實少しはエラクても、出來ぬことはないと言ふ精神を、人間に與へなければならぬ、やればやれるものだと言ふ事を教へないと、やれる事でもやれなくなる。それは心の持ちやうで、可笑しいことがある、夜遅く家へ歸つて來ると門が閉つて居る、是は又閉めてしまつたナと思つて、それでも手を掛けるが開かない、仕様ががない奴だ、ドン／＼叩き起して、聞いて見るとナーニ鍵は掛つてゐない、ちよつと